琉球大学学術リポジトリ

琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究

メタデータ	言語:
	出版者: 狩俣繁久
	公開日: 2009-02-25
	キーワード (Ja): 琉球, 八重山方言, 比較歴史方言, 波照間島方言, 石垣白保方言
	キーワード (En):
	作成者: 狩俣, 繁久, Karimata, Shigehisa
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8927

琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究

（課題番号　17520303）

平成17年度～平成19年度　科学研究費補助金
（基盤研究（C））研究成果報告書

平成20年3月

研究代表者　狩　俣　繁　久
琉球大学法文学部教授

はしがき

研究課題

琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究

研究組織

研究代表者：狩俣繁久（琉球大学法文学部教授）

研究経費：

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	1,200,000 円	0 円	1,200,000 円
平成 21 年度	900,000 円	0 円	900,000 円
平成 22 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
総計	2,800,000 円	210,000 円	3,010,000 円

研究発表

雑誌論文

2008 年

かりまたしげひさ(2008)「琉球語音韻変化の研究」『ことばの研究』第 12 号、むぎ書房　215～275

2007 年

かりまたしげひさ(2007)「琉球方言音韻研究の現況－音韻変化の体系の研究をめざして」『国文学解釈と鑑賞』第72巻7号、28～38

かりまたしげひさ(2007)「これまでの琉球方言研究、これからの琉球語研究」『沖縄言語研究センター資料』№161、1～12

2006 年

かりまたしげひさ(2006)「琉球語音韻変化の研究・序説(1)」『沖縄言語研究センター資料№160』1～38

かりまたしげひさ(2006)「琉球語のせま母音化の要因をかんがえる－空気力学的な条件と筋弾性的な条件－」『沖縄文化』100 号、87～100

2005 年

かりまたしげひさ(2005)「空気力学的な条件と筋弾性的な条件から琉球語の子音変化をかんがえる」『沖縄言語研究センター資料』№145、1～40

かりまたしげひさ(2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』第 11 号、38～95

琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究
ー波照間白保方言の比較方言学的研究ー

もくじ

第１章　研究の目的、前提　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
第２章　波照間白保方言の比較音韻論　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２６
第３章　波照間白保方言の形容詞　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　８８

第１章　研究の目的、前提

１　はじめに

これまでの琉球語研究は、音韻、アクセントの記述的研究と主要な音韻的特徴にかんする比較研究、文法にかんする概略的な記述研究と主要な項目の比較研究、国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』の首里方言、宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』（石垣市新川方言）、仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』（今帰仁村与那嶺方言）などの辞典の刊行や語彙の収集が中心であった。

琉球語諸方言のふたつ以上の地域を対象におこなった研究には宮良當壯（1930）『八重山語彙』、崎山理（1963）「琉球・宮古方言比較音韻論」、平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』、平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』、琉球大学沖縄文化研究所編（1968）『宮古諸島学術調査研究報告ー言語・文学編』、中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』、中本正智（1982）『図説琉球語辞典』、平山輝男編著（1983）『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』、平山輝男編著（1988）『南琉球の方言基礎語彙』などがある。

宮良當壯（1930）は、「八重山語総説」135ページ、方言語彙を五十音順に配列した「甲編」301ページ、標準語の逆引索引の「乙編」203ページの３部からなる。同書に収録された方言語彙は、大正期から昭和期にかけて現地調査で得られたもので、国際音声記号によって記録された信頼性の高い貴重な資料である。約80年前の、本土方言の影響をうける前の八重山諸方言の姿をしることができ、現在の方言と比較することによってさまざまな言語変化をさぐる貴重な材料である。

宮良當壯（1930）の解説編の文例の節には、石垣島大川、竹富島、小浜島、鳩間島、黒島、新城島、波照間島、与那国島の60個の例文がそれぞれの方言に訳され、仮名表記と音声記号によって示されている。さまざまな表現のもりこまれた文例は、地点ごとに対照できるようにならべられている。「甲編」には見出し語として収録された方言語彙16500語のうち、石垣市大川10400語、竹富島1900語、鳩間島1800語、小浜島1000語、新城島1000語、黒島900語、波照間島900語の方言語彙が収められている。ほかに石垣市

平得、同市真栄里、同市白保、同市宮良などの方言語彙がある。いずれも詳細な比較歴史言語学の材料であるが、それらにたいする宮良當壯自身による詳細な考察、本書を利用したその後の比較歴史方言学的な研究もない。

中本正智（1972）は、琉球語諸方言全体を鳥瞰しつつ、琉球語諸方言の音韻変化の通時的な考察を行なうと同時に各地方言の音韻的な特徴を概観している。八重山方言については、与那国方言、石垣方言、大浜方言、波照間方言、小浜方言、西表祖納方言、竹富方言、黒島方言、鳩間方言が考察の対象になっている。加治工真市（1984）「八重山方言概説」は音韻的な特徴を中心に八重山諸方言の概略的な解説である。平山輝男編著（1988）は、石垣方言、波照間方言、与那国方言の大量の基礎語彙とそれぞれの方言の音韻、アクセント、文法に関するややくわしい記述からなる。

上記の先行研究の照間方言島方言、白保方言に関する記述や資料は、本研究報告におっておおきく参考[1)]になったが、狩俣には調査できなかった語彙があり、確認できなかった事象があった。

2　本研究報告の目的

石垣島白保は、はじめは隣村宮良の管轄にあったが、1713 年波照間島から 300 人余の人々をうけいれて独立した村となった。その後、1771 年に起こった明和の大津波によって 1574 人の村人をうしなって壊滅的な被害をうけ、ほぼ全滅したが、首里王府の政策によって波照間島から 418 人の人々が移住、入植させられて再建されたことが王府時代の資料「八重山島年来記」に記録されている。波照間島と白保集落は海によって遠く隔てられていて、その後の目立った交流はない。また、白保集落は石垣島の四箇とよばれる中心市街地からもはなれている。

波照間島の伝統的な方言を波照間島方言とよび、白保集落の伝統的な方言を白保方言とよぶ。白保方言は、周囲集落の方言の影響がすくないようである。波照間島方言と白保方言を総称して「波照間白保方言」とよび、分岐する以前の共通の祖方言を「波照間白保祖方言」とよぶことにする。

歴史書によって分岐した年代が明確な波照間島方言と白保方言の共通するものは、波照間島から白保に人々が移住させられるまえにもっていた波照間白保祖方言の特徴を保存しているものとかんがえ、波照間島方言と白保方言の語彙を収集し、両方言の間の単語形式の一致と不一致、変化と不変化の程度をあきらかにしようと研究計画に着手した。

波照間島方言と白保集落の方言の基礎的な語彙の比較研究をおこない、白保方言と波照間島方言の分岐後の約 230 年間に、両方言で変化せず、波照間白保祖方言からひきついでいるものと、それぞれの方言で変化したものを明らかにするために、臨地調査に際しては、沖縄言語研究センター（1979）『琉球列島の言語の研究第 1 調査票その 2』、同（1979）『琉球列島の言語の研究第 2 調査票』、同（1979）『琉球列島の言語の研

---

1 以下の記述で狩俣が表記をかえて引用しているところがある。詳細はそれぞれの先行研究を参照していただきたい。

究第３調査票』、同（1979）『琉球列島の言語の研究第４調査票』を使用した。

『第１調査票その２』には、身体名称、家畜などの動物、稲や芋などの栽培植物など264 項目の語彙が収録されている。『第２調査票』には衣食住に関連する道具、自然、天体の語彙、数詞などの 300 項目の語彙が収録されている。『第３調査票』には親族名称、人間関係、代名詞などの 197 項目の語彙が収録されている。『第４調査票』には形容詞が 135 項目、擬声擬態語が 95 項目収録されている。

本稿の資料の主たる方言資料提供者（話者）は以下の方々である。

白保方言	M.M.（M36 生、男性）
	T.U.（M43 生、女性）
	T.Y.（S7 生、女性）
	U.Y.（T5 生、男性）
	U.T.（T9 生、女性）
波照間方言	U.S.（M42 生、男性）
	M.T.（T15 生、男性）

臨地調査でえられた単語を以下の①～④に分類し、①②③④のそれぞれがどのようにあらわれるか、その割合はどの程度あるかを検討し、言語年代学の方法によって両者の距離をはかる予定であった。

①語彙的な意味、対応語形・音声形式ともに一致するもの。
②語彙的な意味と対応語形は一致するが、音声形式にずれがあるもの。
③対応語形・音声形式は一致するが、語彙的な意味にずれのあるもの。
④語彙的な意味と対応語形（音声形式）がともに異なるもの（別語）。

しかし、急激な日本語化の影響によって、日常生活のなかで、とくにわかい世代との会話のなかで伝統的な方言を使用する機会がへったこと、近代化による生活様式の変化によって使用されなくなった事物が増大したことなどから、臨地調査に際して高齢の話者から回答のえられなかった語彙が少なからずあり、きわめて近縁の方言を比較研究するうえで、信頼できる数値をだすには無視できない数であった。

波照間島方言と白保方言のように、きわめて近縁の関係にある方言を比較研究するばあい、そして、近縁の周辺方言からの影響がかんがえられるばあい、音韻体系や文法体系に大きな違いをもつ言語や方言間の比較研究以上の注意が必要なのだが、それを解決するための手法がまだ確立できていないこと、明治以降の急激な近代化・日本化にともなって日本語標準語のおおきな影響をうけて琉球語諸方言が変化しているので、その点についても十分な注意が必要であることなどもわかった。

音声形式が一致する上記の①に属する単語のなかには、波照間島方言と白保方言が分岐する以前の共通の波照間白保祖方言がもっていた形式をひきついだ「ホモロジー」のものもあるが、波照間島方言と白保方言が分岐した後に、平行変化や収斂変化によっておなじ音声形式を有するにいたった可能性のあるものもある。また、②③のばあいにも、平行変化や収斂変化を想定しなければならないばあいもあるし、分岐したのち、祖方言からひきついだホモロジーに、あらたな変化が発生した可能性を想定しなければならないばあいも

ある。④のばあい、一方の方言が固有の内的要因によってあらたな形式（新語）を発生させた可能性だけでなく、祖方言からひきつぐ形式を有しながら周辺集落からの影響や日本語標準語の影響によって借用した形式が共存している可能性もある。

上記のことを明らかにするために、収集した単語の語頭、語中の母音、子音のすべてについて、先行する母音や子音などのさまざまな音環境において検討をおこなった。そのことによって、波照間島方言と白保方言の双方においておきた音韻変化のほぼ全体を記述できたとかんがえる。これまでおおくの琉球語の研究者が指摘してきた母音、子音の基本的な音韻変化を語頭、語中のいろいろな音環境において記述、分析した。また、あまり言及されることのなかった同化（隣接相互同化、遠隔進行同化、遠隔逆行同化）、音位転換、音挿入なども記述、分析した。

分析の対象を日本語から流入したとかんがえられる単語にまでひろげた。分析の対象をひろげることによって、音韻変化の順序を推論するてがかりがひろがったとかんがえる。

歴史資料によって人々の移住した年代が明確な波照間島方言と白保方言の詳細な比較研究を行なったことは、同様の移住がおこなわれた地域がほかにもあったり、移住のおこなわれたという伝承のある地域があったりする八重山諸島の諸方言の今後の比較研究の基礎となる資料を提供することは、本研究報告の成果のひとつにあげられるだろう。すなわち、本研究で得られた知見を基礎にし、八重山諸方言の他の下位方言間の比較研究へと拡大することによって、八重山諸方言の下位方言のこまかなちがいを解明し、分岐した時期の明らかでない方言間の距離、系統樹的な分岐関係とを推定し、それにもとづいた方言区画の基礎づくりにつながるとかんがえる。そしてさらに、対象を八重山諸島から、宮古諸島へとひろげ、宮古八重山諸方言全体の比較歴史方言学的な研究、そして琉球方言全体の比較歴史方言学的な研究を行なうための基礎づくりともなるだろう[2)]。

3　研究の前提[3)]

波照間島方言と白保方言の比較研究のまえに、それぞれに固有の体系をもった言語、あるいは、方言を比較研究するうえで前提となることがらについてのべる。

フォネームは、単語あるいは単語の文法的な形を形成するとき、孤立して存在するのではなく、他のフォネームと結合して単語のなかに存在し、他のフォネームと syntagmatic な関係をつくっている。フォネームは、語頭、語中、語尾の単語内での位置と、前後する他のフォネームの韻質の違いなどのさまざまな音環境のなかで隣接するフォネームに影響をあたえて変化させたり、隣接するフォネームの影響をうけて自らが変化したりするので、特定のフォネームについて論じるとき、当該のフォネームの現在の韻質だけでなく、由来するフォネームの韻質、音韻変化後のフォネームの韻質とのちがいをもたらした音韻

---

2 以下の記述で国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』、仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』の方言形を引用しいるが、狩俣が表記をかえて引用しているところがある。詳細はそれぞれの辞典を参照していただきたい。

3 以下の記述は、かりまたしげひさ（2008）記述の一部を追加、削除している。

変化の要因、音韻変化の過程、単語内での前後のフォネームとの相互関係、音韻変化を条件づける音環境などについても検討しなければならない。

特定のフォネームが当該方言の音韻体系において同時に存在する他のフォネームとの paradigmatic な関係のなかで相互に対立したり、かさなる領域をもっておぎないあったりして体系をなしているので、音韻体系内での当該フォネームの位置、他の音韻変化との整合性などを具体的に検討しなければならない。

3.1 音韻変化の構造（1）

古代日本語の*i に対応する宮古八重山諸方言の舌先母音 ɿ を中舌母音ï とみる先行研究がある[4]。*i>ɿ、*i>ï は、琉球語諸方言の*e>i、*o>u とおなじ狭母音化である。*e>i、*o>u は、どのようにおきているかをみる。日本語の i と e の x 線トレース図の正中断面を比較すると[5]、i は、舌のもりあがりが e より前に移動してたかくなっているのがわかる。おなじく u と o を比較すると、u は o より前に移動してたかくなっている。

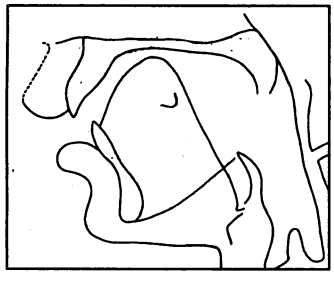

図1 イ[i]

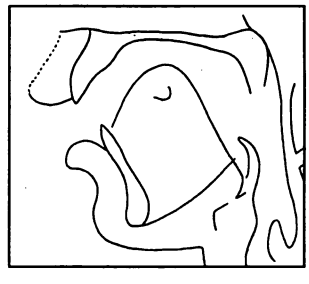

図2 エ[e]

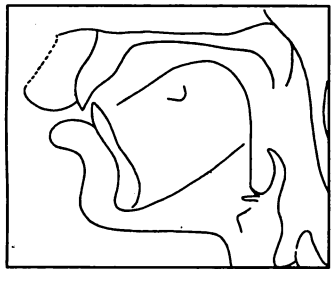

図3 ウ[u]

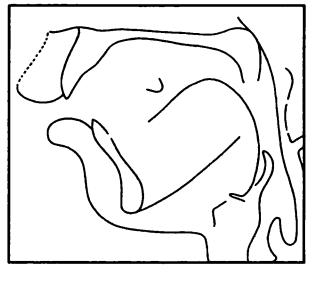

図4 オ[o]

日本語の母音を発するときの舌の最高点をむすんだ多角形（図6の内側の多角形）をみると、o>u、e>i は、舌のもりあがりがのどの奥から口の出口へむかった変化であることがわかる。o>u の変化や、e>i の変化を狭母音化というのはそのためである。

---

4 かりまた（2002）、かりまた（1986）を参照。

5 琉球語には同様の資料がないので、調音上の特徴がおおきくことならないとかんがえられる日本語の資料を参考に使用する。

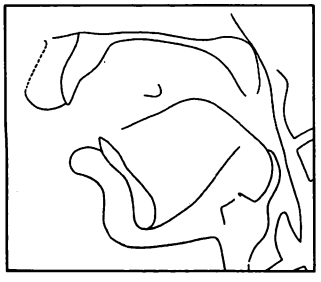

図5　ア[a]

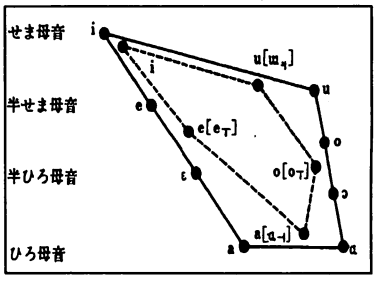

図6　母音多角形

呼気の流れる方向に舌がうごいておきた琉球語の狭母音化は、肺からおくられる呼気流がほんのすこしつよまることによって、舌の表面のうける圧力がつよまり、呼気のながれる方向にわずかながらおされたとかんがえる。琉球語の狭母音化は、話し手にはまったく気づかれないほど微細な変化だが、ながい時間に舌面がつよい呼気におされて呼気流の出口にむかった変化なのである。舌先母音ɿは、他の狭母音化とおなじく、舌が呼気流のながれる方向へおしやられて、前舌狭母音*iから変化したものである[6)]。

宮古島市下里方言の舌先母音ɿは、有声破裂音b、gと結合したり、語頭に単独であらわれたりしたとき、bᶻɿ:（坐る）、gᶻɿ:pa（簪）、mugᶻɿ（麦）、ᶻɿzara（鎌）のようにzをともない、無声破裂音p、kと結合したとき、pˢɿtu（人）、aspˢɿ（遊び）、kˢɿmu（肝）、sakˢɿ（先）のようにsをともなうアロフォンとして実現する。摩擦をともなうアロフォンは、*iが呼気流におしやられて、主要なせばめを舌先上面の舌べりと上歯茎の間で形成する舌先的な母音に変化して発生したためだとかんがえる。この摩擦をともなうアロフォンは、母音字母の左肩にs、zを添えてᶻɿ、ˢɿと書きあらわされてきた。

古代日本語の*iに対応する下里方言の舌先母音ɿは、o>u、e>iの狭母音化をひきおこしたつよい呼気流によってs、zの調音位置までおしやられた結果、摩擦音をともなうが、有声破裂音b、gと結合したり、単独であらわれたりするとき、ᶻɿになり、無声子音p、kと結合するときˢɿになる。また、単独であらわれたり、語末にあらわれたりするとき、呼気流のよわまりによって摩擦のよわいアロフォンであらわれる。

舌先母音ɿは、後続する子音*r、*w、*jに影響をあたえて摩擦音s、zにかえるが、ᶻɿは、ᶻɿzu（魚）、ᶻɿzara（鎌）のように後続する*w、*rをzにかえる。ˢɿは、kˢɿsan（切らない）、tskˢɿʃu（月、月夜に対応）、pˢɿsara（平良）のように*r、*jを無声摩擦音sにかえる。舌先母音ɿは、単語内での位置、および先行する子音の韻質のちがいなど、音環境のちがいによってことなるアロフォンᶻɿ、ˢɿであらわれるし、後続の子音にあたえる影響もことなる。

いっぽう、古代日本語の*iに対応する宮古諸方言の母音を中舌母音/ï/[ï]とみると、*i>ïの変化は、*o>u、*e>i、*e>ï>iなど他の狭母音化とは逆向きの変化になってしまう。*i>ïの変化を想定するなら、前舌狭母音*iの舌全体とそのもりあがりの最高点を後方、すなわち、中舌狭母音ïの位置に移動させた要因を説明しなければならないし、中舌母音ïにともなう摩擦音s、z発生の要因も説明しなければならない。同様に、後続する*r、*w、

6 狭母音化が呼気流のつよまりによって生じたことを上村幸雄（1989）が論述している。かりまた（2006）とあわせて参照していただきたい。

*j を摩擦音化させる要因と変化過程の説明ももとめられる。

中本正智（1976）、内間直仁（2005）、内間宗俊（2007）は、自らがかかげる母音多角形の図のなかで前舌母音 i よりも前に、しかも上の歯茎硬口蓋に接近して位置する母音を中舌母音と記述している。前舌狭母音 i よりも前方に位置する母音を中舌母音とみなすのは、音声学的にみて無理がある。

あるフォネームの音韻的な特徴を記述するとき、しかも当該フォネームがことなる音韻的な特徴をもった別のフォネームから変化した結果生じたものであるとき、変化後のフォネームの音韻的な特徴についての正確な音声学的な観察が不可欠であるが、変化前のフォネームの音声学的な特徴について検討することも重要であろう。そのさい、当該のフォネームを特徴づける代表的なアロフォンについてのみ検討するのではなく、さまざまな条件のもとに実現するさまざまなアロフォンについて、それが実現する条件とそれを生じさせた要因についても検討しなければならない。

3.2 音韻変化の構造（2）

下里方言には*gu、*bu に由来する v と*ku、*pu に由来する f がある。下里方言の v と f は、上の歯と下唇の裏側で摩擦をつくる唇歯摩擦音だが、(1) 母音と結合して音節を形成する音節副音になることもできるが、そのほかに、(2) 他の母音や子音と結合せず単独で拍をなす成節的な子音になることもできる。

(1) fi:（呉れない）、fa:（食おう）、ʋa:（豚）、ʋa:bi（上）、vva（おまえ[7]）
(2) do:v（道具）、janavtsɿ（悪口）、kuv（昆布）、pav（ハブ）、kasavta（瘡蓋）
to:f（豆腐）、jaf（厄）、ifsa（戦）、maffa（枕）

下里方言には vvi（売れ）、vvan（売らない）、vva（君）などの語がみられるが、これらの語は、つよい呼気流に対抗する唇歯のふんばりがあって、語頭の*u が有声の唇歯摩擦音 v に変化し、さらに後続の*r を v に同化させたものだとかんがえる。

*ure（売れ）>vri >vvi

*u をふくむ*gu、*bu も、はじめに*u が v に変化したのち、先行子音*b、*g が逆行同化によって両唇から唇歯への調音位置の変更、破裂音から摩擦音への調音方法の変更が生じて v と融合し、*gu>v、*bu>v の変化が完了したとかんがえる。v に後続する*r、*w、*j は、v の完全進行同化によって調音位置、調音方法の変更が生じて唇歯の摩擦音 v に変化している。

*gu >gv >v　　*bu >bv >v　　*bura >vra >vva

---

7 与論方言の ʔura（君）、伊江島方言の ʔla:（君）と同語源で、ura から変化したものだとかんがえる。

do:v（道具）、kuv（昆布）、avva（油）、kuvva（脹脛・こぶらに対応）

*ku も、*pu も、*u から変化した v が先行子音*p、*k を調音位置（唇歯）、調音方法（摩擦音）に変化を生じさせ、逆に、*p、*k は、後続の v を無声音化させるという相互同化によって、f に融合したとかんがえる[8]。この f は、さらに後続する*r、*w、*j を完全進行同化させて無声摩擦音 f に変化させる。

*ku >kv >f　　*pu >pv >f　　*kura >kvra >fra>ffa
ffu（黒）、maffa（枕）、ffan（降らない）、to:ffa（豆腐は・係助辞-jaの融合形）

語末に u をもつ名詞が格助辞 ju、係助辞 ja をともなう文法的な形式は、語末の母音と助辞が融合して、なが母音 u:（<u+ju）、o:（<u+ja）を生じさせるのに対して、to:f（豆腐）、jaf（厄）など語末に f をもつ名詞は、成節的な子音 m、n、v を語末にもつ名詞とおなじく、助辞の頭子音 j を同化させて、f に変化させる。

ti:+ju>ti:ju（手を）	ti:+ja>ti:ja（手は）
duku+ju>duku:（毒を）	duku+ja>duko:（毒は）
mumu+ju>mumu:（桃を）	mumu+ja>mumo:（桃は）
mim+ju>mimmu（耳を）	mim+ja>mimma（耳は）
kuv+ju>kuvvu（昆布を）	kuv+ja>kuvva（昆布は）
to:f+ju>to:ffu（豆腐を）	to:f+ja>to:ffa（豆腐は）

f が生成された音韻変化の要因、kura>ffa の変化を条件づける音環境、変化の進行過程（*kura>kvra>fra>ffa）、単語内で先行する*k、*p、後続の*r、*w、*j などの前後のフォネームにあたえた影響、音韻体系内での当該フォネームの位置、および、他のフォネーム v、m、n との paradigmatic な関係、*u>v、*gu>v、*bu>v など他の音韻変化との整合性などを検討すると、f は、m、n、v とおなじく成節的な子音である。

to:f（豆腐）、jaf（厄）、ifsa（戦）などの f を、単独で拍をなす成節的な子音 m、n、v と同じとみないで、奥舌狭母音 u をおぎなって CV 構造の音節とみなし、to:fu（豆腐）、jafu（厄）、ifusa と解釈する先行研究[9]がある。そのばあい、平行しておきている*gu>v、*bu>v、あるいは*u>v の変化を除外し、子音のみが変化した*ku>fu、*pu>fu の変化を想定することになるし、後続子音の流音、半母音の摩擦音化は、母音 u をとびこえた遠隔同化ということになる。*u をそのままにして*k、*p を f に変化させた要因、変化過程、他のフォネームや*u>v、*gu>v、*bu>v の変化の整合性などを合理的に説明しなければならない。

---

8 v は、先行子音 p、k の調音点、調音方法に影響をあたえて変更をもたらして摩擦音化させ、逆に p、k は、後続の v の声門の状態に影響をあたえて変更をもたらして無声音化させていて、相互同化がおきている。

9 かりまたしげひさ（1987）は、それまでの研究者の見解を整理したものである。

八重山諸方言、たとえば、第2章でのべる波照間島方言でも白保方言でも語頭で*u と結合した*k、*p が摩擦音化して ɸ であらわれる。ɸɸu（黒）、maɸɸa（枕）に語例をみると、宮古諸方言の*ku>f、*pu>f、あるいは、*kura>kvra>fra>ffa と類似の変化がおきているようにみえる。

*ku	波照間	白保
釘	ɸuN	ɸuN
黒	ɸɸu	ɸɸu
枕	maɸɸa	maɸɸa
海草	inɸu̥tsa	inɸu̥tsa

*pu	波照間	白保
二日	ɸsk'a ～ ɸɯ̥sɻk'a	ɸɯ̥tsɻk'a
二人	ɸtarɭ ～ ɸu̥tarɭ	ɸtari ～ ɸu̥tari
肺（ふく）	ɸu̥ku	ɸu̥ku
蓋	ɸu̥t'a ～ ɸt'a	ɸu̥t'a

波照間島方言のばあい、宮古諸方言にみられる語中音節の*gu、*bu の摩擦音化も明確にはみられない。また、語末の*mi、*ni の母音 i が弱化して撥音 N に変化しているが、宮古諸方言の m、n のような成節的な子音としては機能していない。したがって、波照間島方言と白保方言の ɸ も後続の母音 u が唇のまるめのない ɯ であらわれたり、無声音化して、成節的な子音のように調音されたりしても、成節的な子音として機能しているとはいえないだろう。

宮古諸方言の*ku>f、*pu>f と波照間白保方言の*ku>ɸu、*pu>ɸu は、共通祖方言にはさかのぼらない変化であり、音韻変化の要因、変化を条件づける音環境、変化の進行過程、後続の*r、*w、*j などの前後のフォネームにあたえた影響などにおおくの共通点を有するが、音韻体系内での当該フォネームの位置、他のフォネーム paradigmatic な関係、他の音韻変化との整合性などがことなる。宮古諸方言と波照間白保方言でおきた*k、*p の摩擦音化は、後述する「平行変化」である。

3.3 音韻変化の構造（3）

下里方言の s は、母音と結合して音節を形成する音節副音になることもできるが、そのほかに、他の母音や子音と結合せず単独で拍をなす成節的な子音として音節形成に参加する。成節的な子音 s は、*si、*su に由来し、成節的な子音 f、v とおなじように後続する r や w を同化させて摩擦音 s に変化させる。

sara（皿）、sata（砂糖）、kasa（笠）、fsa（草）、ifsa（戦）
sta（下）、sm（墨）、pas（橋）、mus（虫）
ssu（白）、ssagi:（白髪）、mussu（筵）、ssan（知らない）

成節的な子音 s を語末に有する名詞の格助辞 ju の融合形、係助辞 ja の融合形は、成節的な子音 f、v とおなじように助辞の頭子音 j を同化させて、s に変化させる。

juv+ju>juvvu（粥を）　　juv+ja>juvva（粥は）
kif+ju>kiffu（湯気を）　　kif+ja>kiffa（湯気は）
mus+ju>mussu（虫を）　　mus+ja>mussa（虫は）
is+ju>issu（石を）　　is+ja>issa（石は）

p、k と結合した下里方言の舌先母音 ɿ は、先に述べたように後続の子音*r、*w、*j を摩擦音化させる。これは成節的な子音 s とおなじである。

pˢɿsugaᶻɿ（広がり）、kˢɿsan（切らない）、pˢɿsa（手や足のひら）

pˢɿ、kˢɿ を語末に有する名詞の格助辞 ju の融合形、係助辞 ja の融合形は、成節的な子音 s とおなじく助辞の頭子音 j を同化させて、s に変化させる。

aspˢɿ+ju>aspˢɿsu（遊びを）　　aspˢɿ+ja>aspˢɿsa（遊びは）
sakˢɿ+ju>sakˢɿsu（先を）　　sakˢɿ+ja>sakˢɿsa（先は）

つよい呼気流のおしやりによって狭母音化した ɿ は、声道における主要なせばめが、舌先上面の舌べりと上歯茎の間にある舌先的母音だが、下里方言の子音 s、z とおなじ調音位置によってつくられる。ˢɿ の摩擦音的な韻質から、機能的には母音としてはたらく音節主音的な摩擦音 s とみることができる。無声子音の後の ˢɿ にかぎれば、その韻質は子音 s とおなじであり、無声音化したアロフォンが s に統合されたとみることもできる。

宮古大神島方言には、kf:（作る）、kffi（作れ）、kffan（作らない）の f のように破裂音 k と結合して音節主音として機能することのできる f がある。また、宮古伊良部島佐和田方言には、pl:ma（昼間）、bl:bl:gassa（クワズイモ）、ml:na（にら）のように破裂音 p、b、鼻音 m と結合して音節主音として機能するそり舌側面音の l がある。

大神島方言の f も、伊良部佐和田方言の l も、k、p、b、m と結合して音節主音になるだけでなく、llil（入れる）、tul（鳥）、pal（針）、fsa（草）、jaf（厄）、ifsa（戦）のように単独で 1 拍にかぞえられる成節的な子音として単語を構成する要素にもなるし、tulla（鳥は）、navvlla:l（すべっこい）、fo:（食う）、fi:（呉れる）のように音節副音になって母音と結合して音節を形成する。後続の r、w、j を同化させるという共通性ももっている。下里方言の ˢɿ を s のアロフォンとみれば、音節形成能力、後続する子音を同化させるなど、l、f との共通点をもったものということになる。

無声破裂音 p、k と結合している ɿ の摩擦音としての韻質、後続の r、j を同化させて摩擦音 s に変化させるという音節内でのふるまい、伊良部島佐和田、長浜方言や大神島方言にみられる音節主音的な l、f との共通点を重視して、ɿ を摩擦音 s のアロフォンとみることも可能なのである。そうすると、下里方言の s は、音節副音としての能力、成節的な子

音として単独で拍を形成する能力のほかに、音節主音として音節形成に参加する音節形成能力をあわせもつ子音ということになる。そして、下里方言のsは、伊良部島佐和田方言のl、大神島方言のfとおなじ音節形成能力をもつことになるのである。

pstu（人）、ksmu（肝）、pssara（平良・地名）、kssan（切らない）

下里方言には^{s}ɿのほかに古代日本語の母音*iに由来する^{z}ɿがある。この^{z}ɿは、b、gと結合してあらわれるほか、他のフォネームと結合せず単独であらわれ、^{z}ɿと相補分布的にあらわれる。そして、s、zと同じ調音位置でつくられる舌先母音ɿは、^{z}ɿzu（魚）、^{z}ɿzan（言わない）、^{z}ɿzara（鎌[10]）などにみるように後続の子音*r、*w、*jを摩擦音化させる。これを有声摩擦音zが音節主音として機能しているとみることも可能である。

ma^{z}ɿ+ju>ma^{z}ɿzu（米を）	ma^{z}ɿ+ja>ma^{z}ɿza（米は）
kab^{z}ɿ+ju>kab^{z}ɿzu（紙を）	kab^{z}ɿ+ja>kab^{z}ɿza（紙は）
mug^{z}ɿ+ju>mug^{z}ɿzu（麦を）	mug^{z}ɿ+ja>mug^{z}ɿza（麦は）

古代日本語の母音*iに由来する形式であること、他の母音との類似性と相互関係、音節主音としての機能、舌先化（あるいは摩擦音化）させた要因の緩和（呼気流のよわまり）によって摩擦のよわいアロフォンの存在などを重視して母音とみる従来の見解がある。

古代日本語の母音*iに対応する下里方言の形式が母音であるのか子音であるのか、ただちに決定はできないが、当該形式を検討するだけでなく、音韻体系内の位置、周辺方言との関係にも目をむけなければならない。

波照間島方言、白保方言の舌先母音ɿについてもおなじことがいえるのだが、波照間白保方言のばあい、舌先母音ɿの摩擦はよわく、したがって後続の子音j、wにあたえる影響もことなる。しかし、次の語例にみるように、後続の子音rを摩擦音化させていて、宮古諸方言の*i>ɿの変化と平行的におきたものであることがわかる。

	波照間	白保
虱	ssaN ～ saN	ssaN ～ saN
ふけ（しらが）	ssaga	ssaga
筵	――――	mussu

歴史的な系譜関係をもつ日本語、あるいは他の琉球語諸方言、隣接する諸方言の類似の言語現象と比較、対照しながら、当該方言の母音体系や子音体系が形成されてきた歴史的な過程を検討し、当該方言の母音体系、子音体系の現在の構造と体系をあきらかにしなければならないとかんがえる。

宮古諸方言の舌先母音については、Thomas Pellarrd（2007）が言語類型論の観点をふまえながら詳細に論じている。

---

10 沖縄島中南部および周辺離島の ʔirana、ʔirara（鎌）と同語源の語。

音声学の観点から一種の接近音と認め、類型論的にはいわゆる Fricative vowel に類似していると見て、舌先母音説に近い考えをとった。一方、音韻論の観点から母音よりひびき音の子音に類似していることを指摘し、半子音説に近い立場をとった。(略)
音素を個別に見るのではなく、音韻体系全体、また記述体系全体から見るべきであろう。Thomas (2007.PP18)

かりまた (2007) の記述や本稿の記述も Thomas (2007.PP18) にちかい考えをのべている。舌先母音については、八重山諸方言をも視野にいれて再検討したうえで、別の機会にくわしく論じたい。

4　系統類縁関係と音韻変化[11)]

近接する方言間の類似する音韻変化が共通祖方言に由来するものなのか、あるいは分岐後にそれぞれで類似の変化をとげた結果なのかを明確にしなければならないし、とおくへだたった方言間の類似の音韻変化がなんのつながりもないみせかけの一致なのか、あるいは、何か共通の理由による音韻変化なのかを明確にしなければならない。

複数の方言間の音韻変化を比較したり、音韻変化の相互関係や体系性を検討したりするにも (1) 対象となるフォネームの韻質、(2) 由来するフォネームの韻質、(3) 音韻変化の要因、(4) 変化を条件づける音環境、(5) 変化の進行過程、(6) 音韻体系内での当該フォネームの位置、(7) 他の音韻変化との関係・整合性などを具体的に検討することが必要である。そうすることで方言間の音韻体系や個々のフォネームの近似性の度合いがはかられ、方言間の類縁関係をあきらかにするためのてがかりをえることができるのである。

4.1　ホモロジーと相似変化

宮古八重山諸方言において語頭の半母音*w が破裂音 b に変化している。宮古八重山諸方言のつよい呼気流に対抗する唇でのふんばりが要因でおきた半母音の破裂音化*w>b は、後続の母音が a でも i でも e でも o でもおきていて、宮古諸島、八重山諸島の全域の方言にあまねくみられる。

bara (藁)、bata (腹)、butu (夫)、biː (亥)、biruN (酔う) (与那国島祖納)
bara (藁)、bata (腹)、butu (夫)、bɿː (亥)、biːruN (酔う) (竹富町波照間)
bara (藁)、bada (腹)、budu (夫)、bɿː (亥)、biːruN (酔う) (石垣市石垣)

---

11 琉球語におきた音韻変化には、狭母音化や同化のような内的要因による変化と、借用や大言語の影響など言語接触による外的要因による変化があるだろう。内的変化のばあいも、狭母音化や同化のように長い時間にすこしずつ進行する変化と、音位転換のように短い期間に進行する変化もあるだろう。

bara（藁）、bata（腹）、butu（夫）、bᶻɿ:（亥）、bjuːᶻɿ（酔う）（宮古島市下里）

しかし、*w>b は、奄美沖縄諸方言ではほとんどみられないので、奄美沖縄諸方言と宮古八重山諸方言が分岐したあとの変化であり、しかも宮古八重山諸方言の下位方言に分岐するまえにおきていたとかんがえる[12]。ことなる方言間の類似の現象が共通祖方言（宮古八重山祖方言）からひきついだ形式であるとき、それを「ホモロジー」(homology 歴史的相同）とよぶ。白保方言と波照間島方言は、きわめておおくの共通の形式をもつ。その共通の形式は、波照間島方言と白保方言が分岐する以前から有し、分岐したのちもかわらず保持されているものであれば、ホモロジーである。

ことなる方言のあいだにみられる類似の形式が共通祖先にさかのぼるものではなく、独立した下位方言で別々におきた変化によって形成されたものであるとき、その変化を相似変化とよぶ。相似変化には、「平行変化」と「収斂変化」とがある。由来する形式は祖方言にさかのぼるが、分岐後に、変化の要因、音環境、変化過程などを同じくして平行的に変化し、同じ形式に変化するばあいを平行変化[13]という。それに対して、収斂変化[14]は、由来する形式や変化の要因、変化過程などを異にしながらも、結果として類似の形式に変化するばあいをいう。

4.2 平行変化

波照間島方言、白保方言で語末に撥音 N の音挿入 adition がよくしられている。

	波照間	白保
鳩	pḁtoN	pḁtoN
歯	paN	paN
去年（こぞ）	ku̥tsɿN	ku̥tsɿN
粟	aN	aN
縄	naN	naN

しかし、波照間島方言だけにみられる音挿入と、白保方言だけにみられる音挿入とがあ

---

12 今後の宮古八重山諸方言の詳細な調査によって、w>b がホモロジーでなく、平行変化であるとみなければならないことをしめす現象がでてくる可能性はある。

13 八杉隆一ほか（2005）では平行進化を「生物の進化において、共通の祖先から分かれた子孫が、同様の傾向を示すこと」と定義している。

14 八杉隆一ほか（2005）では収斂を「系統の異なる複数の生物が、類似する形質を個別に進化させること。（略）系統学的には、収斂はホモプラシー（非相同）に含まれる。つまり、収斂は、系統解析の過程で、共通祖先から伝わった相同形質としては説明できない派生的形質状態の共有を説明するために想定される形質進化上の仮説の一つである。収斂と並行進化とのちがいは、後者が共通祖先から受け継がれた共通の遺伝的基盤を前提とする個別進化であるのに対し、前者が共通の遺伝的基盤を前提としない個別進化であるという点にある。」と定義している。

って、語末Nの音挿入は共通祖方言にさかのぼらない可能性がある。そうであるなら、語末への撥音Nの音挿入は、波照間島方言と白保方言に分岐したあとの平行変化である。

	波照間	白保
痣	adzaN	adza
屁	piN	pi:
根	ɲiN	ɲi:
胡麻	gumaN	guma
牛蒡	gumboN	gumbo:

	波照間	白保
額（ひたい）	ɸu̥te	ɸu̥teN
きのこ	naba	nabaN

沖縄島今帰仁村方言に*ki>tʒi、*gi>dʒi の破擦音化がみられ、沖縄島中南部諸方言にも*ki>tʃi、*gi>dʒi の破擦音化がみられる。しかし、今帰仁方言以外の北部諸方言では破擦音化はみられず、破擦音化は、共通祖先にさかのぼらず、それぞれの方言で個別に発生したものである。今帰仁方言と中南部諸方言の破擦音化は、由来する形式と変化後の形式、音環境、破擦音化の要因、変化の過程などにいたるまで同じであるとみとめられるので、平行変化である。

奄美沖縄諸方言で*e>ï>i の変化が起きていて、宮古八重山諸方言で*e>i の変化が起きている。沖縄島中南部諸方言の*e に由来する i をふくむ音節と宮古諸方言の*e に由来する i をふくむ音節はきわめて類似の形態をとる。しかし、宮古八重山諸方言のばあい、ï を経た明確な形跡がないことから、共通祖先にさかのぼらないとすれば、奄美沖縄諸方言と宮古八重山諸方言に分岐する以前に、この変化がおきていたとは想定できないことになる。しかし、このばあい、同じ形式（母音）がおなじ要因（呼気流のつよまり）によって狭母音化しているので、ふたつの変化は平行変化である。

波照間島方言と白保方言の語頭の*tsu は、歯茎前舌の破擦音が摩擦音化し、母音は歯茎前舌音との同化によって舌先母音 ɿ になっている。波照間島方言のばあい、語中*tsu の子音はおおくが破擦音 ts のままで、母音は ɿ に変化している。白保方言のばあい、一部に tsɿ がみられるが、おおくは母音が i であらわれ、子音も口蓋音化していて、tʃi になっている。波照間島方言と白保方言の語中の*tsu は、平行変化がおきているようにみえる。

語頭の*tsu	波照間	白保
綱	sɿn̥a ～ sn̥a	sɿn̥a ～ sn̥a
面	sɿr̥a ～ sr̥a	sɿr̥a ～ sr̥a
柄	sɿk'a ～ sk'a	sɿka ～ ska
顔(つら)	sɿr̥a ～ sr̥a	sɿr̥a ～ sr̥a

語中の*tsu	波照間	白保

五日	iska ～ isɻka	itska ～ itsɻka
夏	natsɻ	natʃi
松	mattsɻ	mattsɻ
ひとつ	pstutzɻ	pi̥titʃi̥ ～ pɻtitʃi̥
ふたつ	ɸt'a:tzɻ ～ ɸu̥t'a:tzɻ	ɸt'a:tʃi ～ ɸu̥t'a:tʃi
三つ	mi:tzɻ	mi:tʃi
四つ	ju:tzɻ	ju:tʃi
六つ	n̥:tzɻ、mu:tzɻ	n:tʃi ～ n:tʃi̥
七つ	nanatzɻ	nanatʃi～nanatʃi̥
八つ	ja:tzɻ	ja:tʃi
2月	niŋgotsɻ	niŋgatʃi
3月	saŋgotsɻ	saŋgatʃi

しかし、語末に*tsu をもつ単語を宮良當壯（1930）『八重山語彙』で確認してみると、niŋgwatsï、siŋgwatsï、saŋgwatsï、guŋgwatsï、ʃitsïgotsï、pḁtsïŋgwatsï、kuŋgwatsï、dzïŋgwatsï、dʒu:itsïŋgwatsï で記載されている。『八重山語彙』の tsï がかりまたの調査では tʃi に変化していたということになる。*tsu>tsɻ は、ホモロジーとして波照間白保祖方言にあったが、宮良當壯（1930）からかりまたの調査した 1990 年までのあいだに、白保方言において*tsu>tsɻ>tʃi と変化したものとかんがえられる。

祖方言からホモロジーとしてひきついだ形式が一方の方言においてあらたに発生した要因などによって変化したばあい、ふたつの方言間のちがいが平行変化によるものなのか、あらたな変化によってホモロジーから変化したものなのかの判別がむつかしいのではないだろうか。詳細かつ慎重な検討が必要だろう。

4.3 収斂変化

とおくはなれた方言間にみられる類似の音韻変化として、波照間島方言の有声子音の無声子音化と宮古大神島方言の無声子音化がしられている。波照間島方言や石垣島白保方言にみられる*g>k、*b>p、*d>t の無声子音化と宮古大神島方言の*g>k、*b>p、*d>t の無声子音化は、由来する形式を有声破裂音*b、*d、*g に限定すると、同じ変化が起きているようにみえる。

しかし、波照間島方言の無声子音化は、破裂音だけでなく、鼻音*m、*n、流音*r でもおきている。いっぽうで、波照間島方言の有声破裂音の無声子音化は、語頭音節ではみられず、第 2 音節以下のしかも先行音節の子音が無声子音のばあいに限定されている。

su̥pu（壺）、sḁpa（鱶）、kḁtʃi（風）、kḁtsɻ（舵）、su̥ti（袖）、kḁdu（角）
tḁɾe（盥）、pḁɾɻ（針）、pḁna（鼻）、kḁni（金属）、kḁma（竈）、sɻmḁu（肝）
basa:（芭蕉）、garas（烏）、bu:（麻）、iga:（烏賊）、nagabi（中指）、dʒin（銭）

波照間島方言のばあい、無声子音化する形式に条件があり、その条件を満たしたアロフ

ォンは無声子音化するが、条件をみたさないアロフォンは無声子音化しないので、有声子音と無声子音の対立がうしなわれるわけではない。また、無声破裂音*b、*d、*g の一部のアロフォンが無声子音化して p、t、k に統合して安定するが、無声子音化した r̥、n̥、m̥は、つよい呼気流をともなって発音されるときは無声子音化したアロフォンで実現するが、呼気流のよわい発話において容易に有声子音で実現される不安定なアロフォンである。

波照間島方言の無声子音化は、破裂音だけでなく、鼻音、流音にもみられること、無声子音および無声音化した母音に先行される音環境にかぎっておきていること、呼気流のよわい発話のばあい、r̥、n̥、m̥ が r、n、m であらわれることなどから、先行音節の無声子音のつよい呼気流が母音を無声音化させ、さらに後続の有声子音も無声音化させた、つよい呼気流のつよすぎによる音韻変化であるとかんがえる。波照間島方言の無声子音化は、つよい呼気流を背景にした進行同化で、しかも、調音点、調音方法の変化のない、無声音化だけの部分同化である。

大神島方言の無声子音化は、鼻音、流音ではおきておらず、有声破裂音に限定されている。そして、有声破裂音であれば、語頭でも語中でも無声子音化し、先行、後続の子音と母音の韻質もとわないのである。

turu（泥）、pasa（芭蕉）、kakam（鏡）、napi（鍋）、pu:（麻）、kati（風）、tin（銭）

大神島方言のばあい、結合する母音、単語内の位置に制限がなく、すべての有声破裂音が無声子音化して有声破裂音 b、d、g と無声破裂音 p、t、k が統合し、破裂音における無声子音と有声子音の対立がうしなわれ、子音体系もおおきく変化している。

大神島方言の無声子音化は、どのようにして実現したのであろうか。

大神島方言の舌先母音 ɿ のうち無声子音にはさまれてあらわれるアロフォン ˢɿ は、摩擦音 s と同じく摩擦がつよく、半子音とみなすことも可能である。そのばあい、後続する r、j などが摩擦音化してあらわれる。*ku>f、*pu>f、*gu>v、*bu>v などの摩擦音化や、それにともなう後続子音の摩擦音化もみられる。

kˢɿkɿ（月）、pˢɿtu（人）、pˢɿsara（平良）、ssam（虱）、passa（柱）
ffa（草）、maffa（枕）、ffu（黒）、pav（蛇）、avva（油）、ʋva（おまえ）

他の子音と結合しないであらわれるアロフォン ɿ と有声子音と結合したアロフォン ɿ は、摩擦がとてもよわいかまったくきかれないこともある。また、舌先母音 ɿ に r、j が後続するとき、舌先母音 ɿ の摩擦がよわいため、他の宮古諸方言のような摩擦音化がみられない。

ɿ:（飯）、ɿo（魚）、ɿara（鎌）、pɿki（髭）、pɿtaɿ（左）、mkɿ（右）、

大神島方言のばあい、かつて、呼気流のつよい時期があり、他の宮古諸方言と同様の変化をおこしたが、その後に呼気流がよわくなり、ɿ の摩擦もよわくなったものとかんがえる。大神島方言の有声破裂音の無声子音化は、この呼気流のよわまりと連動しておきたと

かんがえる[15]。呼気流のよわまりによって声門下圧が相対的にさがり、声道内の気圧との差がちぢまって声帯の力強い振動がえられなくなって、有声破裂音が無声破裂音に変化したのである。語頭、語中にかかわらず呼気流がよわまるので、いろいろな音環境の有声破裂音が無声子音化していて、波照間島方言の無声子音化とはことなるのである。

波照間島方言の無声子音化も大神島方言の無声子音化も、いずれも空気力学的な力が関与した音韻変化であるが、前者は呼気流のつよまりによって、後者は呼気流のよわまりによっておきている。また、前者は先行音節の無声子音のつよい呼気流が結合する母音を無声音化させ、さらに後続の有声子音をも無声音化させていて、同化という面もあわせもつのに対して、後者は先行、後続のフォネームにかかわりなくおきている。同化による無声音化があるし、同化によらない無声音化があるのである。

有声破裂音*b、*d、*g の一部のアロフォンに限定すれば、両者は同じ無声音化といえるが、そこに限定してみても、音環境も変化の要因もことなるし、音韻体系におよぼす影響の点でもおおきくことなる。無声子音化の全体をみると、両者にはおおきな違いがある。

ふたつの方言の無声音化は、共通の祖先（宮古八重山祖方言）には存在しておらず、それぞれの方言で個別におきた変化である。しかも、音韻変化の要因、音韻変化を条件づける音環境、変化の進行過程、音韻体系内での当該フォネームの位置、他の音韻変化との関係・整合性などがおおきくことなっていて、波照間島方言と大神島方言の無声音化は収斂変化である。

宮古諸方言にも両唇破裂音*p と軟口蓋破裂音*k の摩擦音化がみられるし、奄美沖縄諸方言、とくに沖永良部与論沖縄北部諸方言にも*p、*k の摩擦音化がみられる。ふたつの摩擦音化は、平行変化なのであろうか、収斂変化なのであろうか。

宮古諸方言のばあい、母音*u と結合した無声破裂音*p、*k が唇歯の摩擦音 f に摩擦音化し、他の母音と結合した*p、*k は摩擦音化していない。八重山諸方言のなかには石垣市石垣方言のように*pu、*ku が f をへて hu（ɸu）に変化している方言がおおい。宮古諸方言でもわかい世代では f が hu であらわれることもすくなくない。

無声破裂音*p、*k だけでなく、*u と結合した有声破裂音*b、*g もおなじように唇歯の摩擦音 v に変化していて、*pu>f、*ku>f の変化と*bu>v、*gu>v の変化が連動して平行的におきているし、原則として、語頭でも語中でもおなじように摩擦音化していて、音環境をとわない。ただし語中の*pu は琉球祖語の段階で ɸ をへて消失していたとかんがえられる。石垣市石垣方言では*bu、*gu が v をへて、w や b に変化しているようである。

f̬ju（冬）、f̬taːᶻɿ（二人）、toːf̬（豆腐）、f̬sa（草）、i̬fsa（戦）、jaf（厄）、ma̬ffa（枕）、kasavta（瘡蓋）、dzɹnavva（脳）、doːv（道具）、janavtsɿ（悪口）、toːvva（台所）

下地町与那覇

ɸuju（冬）、ɸu̥taːrɿ（二人）、maɸɸa（枕）、ɸu̥sa（草）、ɸɸa（蔵）、iɸu̥tsɿ（幾つ）、aba（油）、dzaba（脳みそ・髄油）、toːra（台所・トグラ）　　石垣市石垣

15 呼気流のよわまりによる破擦音の破裂音化もみられる。かりまた（1993）を参照。

それに対して、沖永良部与論沖縄北部諸方言の無声破裂音*p の摩擦音化は、結合した母音が*a、*o、*e のばあいに限定されている下位方言と、すべての音環境で摩擦音化している下位方言がある。また、与論島方言のように*p の摩擦音化していない方言もある。沖永良部与論沖縄北部諸方言の*k の摩擦音化は、結合した母音が*a、*o、*e のばあいにおきている下位方言があるし、同じく*a、*o のばあいにおきている方言がある。また、語中の*ka、*ko、*ke の摩擦音化は、後述するように、先行音節の母音も*a、*o、*e でなければならないという制約がある。

沖永良部与論沖縄北部諸方言の*p は、両唇摩擦音 ɸ を経て h に変化し、*k は、軟口蓋摩擦音 x を経て h に変化していて、両者は変化過程もことなる。宮古諸方言では*pu>f、*ku>f と並行的に*bu>v、*gu>v の摩擦音化がおきていたが、沖永良部与論沖縄北部諸方言では有声破裂音*b、*g の摩擦音化はみられない。

pana（鼻）、pana（花）、pai（針）、pu:（帆）、puɲi（骨）、pira（箆）、pi:（屁）
hadi（風）、hani（金）、ho:（皮）、ɸui（声）、ɸudu（去年）、çi:（毛）　与論町城

ᵖɸana（鼻）、ᵖɸai（針）、ᵖɸuni（骨）、ᵖɸu:（穂）、ᵖɸira（箆）、ᵖɸi:（屁）、ᵖɸi:（火）
hari（風）、ha:（皮）、hagami（鏡）、çi:（毛）、ɸumi（米）、ɸui（声）国頭村宇嘉

宮古諸方言と沖永良部与論沖縄北部諸方言とでおこった破裂音の摩擦音化は、由来する形式も音環境も変化の過程もことなるし、変化後の形式もことなっている。ふたつの方言グループでおきた摩擦音化も収斂変化である。

4.4　発生拘束

宮古諸方言で*o>u、*e>i、*i>ɿ の狭母音化をひきおこした呼気流のつよまりは、それと連動して*pu>f、*ku>f、*bu>v、*gu>v の破裂音の摩擦音化、*w>b の半母音の破裂音化もひきおこしている。その結果、舌先母音 ɿ が生成されたり、母音体系に再編が生じたりしているし、唇歯摩擦音 f、v と成節的な子音が生成され、半母音 w がなくなるか大幅に減じるなど子音体系にもおおきな再編が生じている。

呼気流のつよまりは、沖永良部与論沖縄北部諸方言においても*o>u、*e>ï>i の狭母音化をひきおこして母音体系の再編をひきおこしている。さらに、*ke>hi、(あるいは çi) *ko>hu、(あるいは ɸu)、*to>su、*te>ʃi、*po>ɸu、*pe>ɸi などの摩擦音化も連動してひきおこしている。また、呼気流のつよまりは、*o>u、*e>ï>i という韻質の変化をともなう狭母音化だけでなく、それ自体の韻質には変化のみられない母音*a、*u、*i にも影響をあたえていて、*ka>ha、*ta>sa、*pa>ɸa など、*a と結合した先行子音の摩擦音化や、*u、*i と結合した破裂音の喉頭音化*pu>p'u、*ku>k'u、*pi>p'i、*ki>k'i や喉頭破裂音の発生*u>ʔu、*i>ʔi など、おおくの音韻変化をひきおこす要因にもなっていて、奄美沖縄諸方言においても子音体系のおおきな再編をひきおこしている。

もちろん、琉球語の諸方言において呼気流のつよまり以外にも音韻変化の要因は存在する。個々の母音、子音の韻質が前後の母音、子音に影響をあたえて変化させる筋弾性的な

条件がつよく作用しておきるさまざまな同化があるし、リズム＝アクセント的な条件が作用しておきる音韻変化もある。聴覚的な類似性のゆえにおきた音韻変化や音位転換などの音韻変化もある。しかし、呼気流のつよまりは、狭母音化、破裂音の摩擦音化、半母音の破裂音化、無声破裂音の喉頭音化、有声子音の無声子音化など、一見して関連がなさそうにみえるさまざまな音韻変化に共通する要因としてはたらき、音韻変化に方向性をあたえ、下位方言ごとの音韻体系を形成するうえでの重要な要素になっている。

琉球語諸方言の呼気流のつよまりのようにおおくの音韻変化の要因になり、音韻変化の方向性に負荷をかけることを本報告では「発生拘束」とよぶことにする。琉球列島の諸方言を琉球語として統一し、琉球語の下位方言を琉球語たらしめる強力な要因としてはたらく発生拘束が呼気流のつよまりであり、琉球語諸方言の音韻体系の形成におおきく関与しているとかんがえる。

語頭で*k>h の変化のみられる喜界島の諸方言、沖永良部島の諸方言、与論島の諸方言では、語中でも*k>h の変化がおきている。同じく語頭で*k>h の変化のみられる沖縄島北部の諸方言でも語中での*k>h の変化がおきている。これら地域の語中の k>h の変化は、結合する母音が*a、*e、*o であればよかった語頭の*k>h とはことなり、*k に先行する音節の母音も*k と結合する母音も、いずれも*a、*e、*o でなければならない。語頭の*k>h と語中の*k>h とは、摩擦音化の条件にちがいがある。

奄美大島、加計呂間島の諸方言、徳之島の諸方言では、語頭では*k>h の変化のみられないのだが、語中では k>h の変化がおきている。これら地域では語頭と語中という音環境のちがいが重要な因子としてはたらいて、語頭の*k>h と語中の*k>h がかならずしも同じではないことがわかる。

奄美沖縄諸方言のこれら下位方言における語中の*k>h は、語頭の*k>h とはことなり、さまざまな姿であらわれ、発生拘束となる空気力学的な力の負荷のかかりかたにおおきなちがいのあることがわかる。奄美沖縄諸方言の個々の下位方言は、空気力学的な力が発生拘束となるという共通性を有するゆえに類似の音韻変化がみられ、結果として、類似の音韻体系を有するのだが、個々の下位方言ごとに発生拘束の負荷のかかりかた、変化を顕在化させるための条件のちがいや変更があって、個々の下位方言を他の下位方言から区別する特徴をうみだしていくのであろう。

奄美大島南部方言では、語中*k は摩擦音化して h のままのこっているのに対して、奄美大島北部方言では、語中の*k は摩擦音化したあと消失している。以下は、瀬戸内町諸鈍の語例。

*-aka　naha:（仲）、ʔaha:sa（赤さ）
*-ako　toho:（蛸）、joho:（櫂・イヤコに対応[16]）
*-ake　sëhë:（酒）、dëhë:（竹）、hatë:hë（畑）、sëhë:rjum（裂ける）
*-oko　koho:ro（心）、koho:not（九つ）、moho:（婿・モコに対応）
*-oke　wëhë:（桶）、

16 「櫂」をあらわす宮古島市下里方言の zzaku、トカラ列島宝島方言の jako など諸方言の比較から、祖形を*ijako と推定した。

瀬戸内町諸鈍方言や龍郷町瀬留方言などをみると、k をはさんだ前後の母音（*ake、*ako）が遠隔同化（ëhë、あるいは ë:、oho、あるいは o:）をおこしていて、奄美大島北部方言のばあい、母音の同化のあとに h が消失したとかんがえる。以下は、龍郷町瀬留の語例。

-*ake　　së（酒）、dë（竹）、hatë（畑）
-*oko　　ko:ro（心）、ko:notsï（九つ）、mo:（婿）
-*oke　　wë（桶）

沖永良部島方言、与論島方言では、語中の*k は摩擦音化し消失しているが、母音の同化はおきていない。以下は、与論町城の語例。

*-aka　　na:（仲）、ta:（鷹・サシバなど）、ʔa:sai（赤い）
-*ako　　taɸu（蛸）、jaɸu（櫂）
-*ake　　sai（酒）、dai（竹）、pattai（畑）
-*oko　　ku:ro（心）、ku:nuka（九日）、tu:ru（所）
-*oke　　ui（桶）

沖縄島北部諸方言でも語中で*k>h の変化はおきているが、母音の同化もおきておらず、h の消失もみられない。以下は、国頭村辺野喜の語例。

-*aka　　aha（赤）、naha（中）、sahaku neN（高くない）
-*ako　　saɸu（蛸）、gwe:ku（櫂）
-*ake　　raçi（竹）、haçiti（水をかけて）、saki（酒）、ɸataki（畑）
-*oko　　kuɸunuti（九つ）、muɸu（婿）
-*oke　　u:ki（桶）、uɸiti（起きて・オケテに対応）

沖縄島北部諸方言の語中の*k>h は、奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島の各方言のように規則的にみられるわけではなく、今帰仁村方言や名護市方言などでは条件がみたされていても摩擦音化していない単語があって、地域によって摩擦音化の度合いの変異もおおきい。しかし、語頭の*k>h は、語中のばあいにくらべると、ひろくみられる。沖縄島中南部諸方言のばあい、*k の摩擦音化は、語頭でも語中でもおきていない。

分岐するまえの奄美沖縄諸方言の祖方言において語中の*k>h が発生していたとみるなら、ホモロジーだが、沖縄島中南部諸方言でみられないこと、上にみたような下位方言ごとの変異がみられることなどから、語中の*k>h が祖方言にあったとはかんがえられない。奄美沖縄諸方言における語中の*k>h は平行変化である。

語中の*k>h は、変化後の形式に変異がみられるが、由来する形式、音環境、変化の要因がおなじである。変化後の形式の変異は、*k>h が完了したのちに奄美徳之島諸方言、沖永良部与論沖縄北部諸方言のそれぞれの下位方言グループであらたな条件が発生したり、

発生拘束となる呼気流が微妙によわまったり、さらにつよまったりして差異が生じて、ちがう方向に変化した結果ではないかとかんがえる[17]。

平行変化としての語中の*k>hの変化をひきおこす呼気流のつよまりが発生拘束として下位方言でも機能して、平行変化がみられる。奄美沖縄諸方言で進行する狭母音化、あるいは宮古八重山諸方言で進行する狭母音化も、それぞれの方言グループ内でおきた平行変化であり、呼気流のつよまりが発生拘束となっている。祖方言に存在したつよい呼気流は、下位方言に分岐したあとも保持され、それが発生拘束として発現することによって平行変化をひきおこすのだが、下位方言で狭母音化が実現するとき、下位方言によっては発生拘束の条件に変更が生じるものがでてきて、変化後の形式に変異があらわれたのであろうとかんがえる。

4.5 構造的拘束

宮古諸方言の狭母音化は、いずれもつよい呼気流が発生拘束になっている。*u>vの変化もつよい呼気流が要因になっている。しかし、*o>u、*e>iの変化は、語頭、語中、語尾のいずれの位置においても、結合する子音の韻質をとわない変化であるのに対して、*u>vの実現には制限がある。

*uは、*g、*b、*k、*pと結合したとき、vに変化し、さらに、先行子音と同化してv、fを生成させるのだが、*s、*ts、*dz、*rと結合するときには、*u>vの変化が実現されず、したがって先行子音をv、fに摩擦音化させない。逆に、先行子音との同化がおきて*su>s、*tsu>tsɳ、*dzu>dzɳに統合されたり、*ru>ʐɳに変化したりする。これもつよい呼気流が要因になっているが、先行子音の歯茎舌先音という韻質に優先された結果、v、fに変化せず、ʂɳ、ʐɳに変化したのである。同様に、鼻音*m、*nと結合した*uは、v、fにも、ʂɳ、ʐɳにも変化せず、そのままmu、nuであらわれたり、成節的なm、nであらわれたりする。鼻音m、nは、呼気流が鼻むろにぬけて、そこで共鳴がおきるため、口むろ内の呼気圧が十分にたかまらないという鼻音に特有の韻質に条件づけられ、uをvやʂɳ、ʐɳに変化させなかったのであろう。

さらに、*u>vは、*gu>v、*bu>v、*ku>f、*pu>fの変化だけでなく、*ura>vva、*gura>vva、*bura>vva、*kura>ffa、*pura>ffaのように後続子音の摩擦音化を誘導し拘束している。*u>vにともなって、先行子音を逆行同化させてvに統合するか、先行子音と相互同化してfに統合するかは、先行子音が有声子音なのか、無声子音なのかによって拘束されている。同時に、語頭子音が有声子音*g、*bであるか、無声子音*k、*pであるかという韻質が、後続する流音rや半母音j、wをvに進行同化させのか、fに進行同化させるのかを拘束している。

音節（あるいは音節連続）を構成する個々の形式であるフォネームが、それ以外の他の形式に対して発生負荷となり、逆にそれらによってひとつの構成要素が負荷を負っている

---

17 たとえば、奄美大島北部方言と南部方言のばあい、前者は1音節2拍の語を短く発音する傾向があるのに対して、後者は閉音節構造の語を発達させているという、リズム＝アクセントの違いが関与している可能性があるが、今後の検討課題である。

状態、すなわち、構造にしばられて発生拘束の実現／非実現が左右される。この構造的な拘束は、狭母音化とそれに伴う前後の子音変化のように、連動しておきる音韻変化をトータルに検討するばあいに重要である。

構造的拘束は、それを構成する要素のセットによって条件づけられるが、構成要素のそれぞれが音韻変化の過程において「条件づけるもの」と「条件づけられるもの」の関係になる。呼気流のつよまりがあっても構造的拘束の適用を疎外するあらたな条件の発生によって、あるいは、構成要素のひとつに変更が生じることによって、当該の音韻変化がひきおこされないで別の音韻変化が生じたり、音韻変化そのものがおきなかったりすることもあるのである。

宮古諸方言におきた*i>ɿ も、*u>v と同様に、*bi>bᶻɿ、*gi>gᶻɿ、*pi>pˢɿ、*ki>kˢɿ の発生拘束としてはたらくが、*i が ˢɿ になるか、ᶻɿ になるかは、先行子音が無声子音*p、*k か、有声子音*b、*g かに条件づけられている。同時に、*pira>pˢɿsa、*kira>kˢɿsa、*bira>bᶻɿza、*gira>gᶻɿza など後続する流音、半母音の摩擦音化を誘導し拘束している。つよい呼気流が発生拘束として狭母音化をおこすとき、*i が ˢɿ、あるいは、ᶻɿ になるのは、*i の前舌狭母音という韻質に条件づけられているのだが、それが破裂音*p、*b、*k、*g と結合したときにおきるのに、*m、*n と結合したときにおきないのは、*m、*n の鼻音としての韻質に条件づけられているからである。ここでも先行音節の子音の韻質が後続音節を s に変化させるか、z に変化させるか、あるいは変化をおこさせないかの構造的拘束の負荷としてはたらいているのである。

波照間島方言で有声子音の無声子音化には、先行音節に無声子音が存在し、先行音節の母音がつよい呼気流によって無声母音化するという条件があってはじめて実現する構造的拘束である。*b>p、*d>t、*g>k、*dz>ts のばあい、すでに存在していた*p、*t、*k、*ts と統合して安定した存在となるのだが、*m>m̥、*n>n̥、*r>r̥の変化が安定したフォネームとならずアロフォンのままとどまるのは、鼻音、流音の韻質、無声子音化した鼻音、流音がつねにつよい呼気流によってしか生成されないというフォネームとしての不安定さがあり、呼気流がよわまると有声の鼻音、流音で調音されるためであろう。ここにも構造的拘束を発現させた条件の変更（呼気流のよわまり）によって、予定されていた構造的拘束が負荷として機能しなかった例をみることができる。

構造的拘束のばあい、音節、あるいはその連続を構成するひとつの要素の消失、あるいは要素の韻質の変更、発生拘束となる呼気流量の変更などによって、特定の構造の変化をひきおこしたり、構造的拘束が発現しなかったりするのである。

狭母音化をひきおこした呼気流のつよまりは、発生拘束として琉球語の諸方言を琉球語として統一する音韻論的特徴をうみだし、音韻体系をつくりだした重要な要素である。しかし、下位方言のなかには、発生拘束、あるいは、それを実現にみちびく条件に少なからぬ変更が生じて、他の下位方言にはみられない音韻変化が生じ、他の方言とはことなる音韻論的な特徴を有するようになったものがある。

個々の方言、あるいは下位方言グループごとにことなる形式があらわれるのは、発生拘束を誘導する条件が個々の方言ごとに、あるいは、下位方言グループごとにことなっていたからである。その結果、個々の方言、あるいは下位方言グループは他のそれから区別されることになるのである。

つよい呼気流が発生拘束になっておおくの音韻変化がひきおこされ、その結果として生じたフォネームによって特徴づけられる宮古諸方言のなかにあって、大神島方言は、呼気流がよわまって発生拘束におおきな変更が生じている。摩擦のつよかった舌先母音の摩擦がなくなったり、破擦音が破裂音に変化したり、そして、有声破裂音が無声破裂音に変化したりしているのである。舌先母音ɿに後続する流音、半母音の摩擦音化もみられない。

しかし、それにもかかわらず、大神島方言が宮古諸方言の下位方言として区分されるのは、呼気流のよわまりというあらたな発生拘束の適用をうけないpˢɿtu（人）、kˢɿkˢɿ（月）、sakˢɿ（先）、mkˢɿ（道）などの語例に摩擦のつよい舌先母音ˢɿが存在したり、maffa（枕）、avva（油）などにみられる破裂音の摩擦音化の語例が保存されたりしているからである。また、無声破裂音pのなかにはpata（腹）、pupa（叔母）、pɿri（坐れ）など、半母音wから破裂音化したbが無声子音化されたものがふくまれ、宮古諸方言としての特徴をうしなっていないからである。

発生拘束として呼気流のつよまりによって、さまざまな音韻変化がおきたが、発生拘束の小さな変更、あるいは、発生拘束の発現に制約をくわえるあらたな条件の発生によって、その変化が完成しなかった下位方言や、途中から別の方向に向かった下位方言が大神島方言以外にも存在するとかんがえる。たとえば、宮古八重山諸方言にあって、*i>ɿを経て、さらにɿがiに変化して、ɿを有しなくなった与那国島方言にあっても、呼気流のつよかった時期におきた*w>b、*siro>*ssu>tzuなどの音韻変化が保存されている。

発生拘束が破裂音の摩擦音化、半母音の破裂音化、無声破裂音の喉頭音化、有声子音の無声子音化などの音韻変化にはたらいているとすれば、現段階では関連づけられていない、さまざまな音韻変化を関連づけて論じることが可能になる。すなわち、半母音化や摩擦音化は、呼気のつよまりによるばあい、逆に、呼気のよわまりによるばあい、あるいは、空気力学的な条件が積極的に関与せず、筋弾性的な条件によるばあいなどが想定されるが、その音韻変化が筋弾性的条件と空気力学的条件との相互作用によって発生していることがわかっているので、平行変化・収斂変化、あるいは構造的拘束の概念を導入することによって、さまざまな音韻変化をいっそう総合的、体系的に考察することが可能になる。

有声子音の無声子音化など、はげしい呼気流による音韻変化を特徴とする波照間島方言は、無声破裂音の有声子音化や有声破裂音の鼻音化、あるいは摩擦音化がみられる。波照間島方言を特徴づける音韻的特徴のおおくがはげしい呼気流を発生拘束や構造的拘束としているとすれば、波照間島方言の語中無声破裂音の有声子音化（*t>d、*k>g）や有声破裂音の鼻音化（*g>n）もつよい呼気流をその変化の要因にしている可能性がある。そして、おなじ変化が他の八重山諸方言でも平行変化的に存在しているとすれば、語中無声破裂音の有声子音化や有声破裂音の鼻音化の発生拘束、構造的拘束としてつよい呼気流をかんがえなければならない可能性はたかいだろう。

5　分岐と統合

早口であるとか、息づかいが荒いなどのさまざまな音声的な変種が特定の個人の発話にとどまり、集団を構成する成員にひろがっていないなら、それは個人的な特徴にすぎない

だろう。音声的な変種が1回きりのものなら、それも単なるいいまちがいとして訂正されて消えていくだろう。しかし、音声的な変種が特定の個人をこえて、集団の構成員の発話のなかにくりかえしあらわれるものになれば、その変異は個人的なものではなく、集団に繰り返しあらわれ、世代をこえてひきつがれる音韻として固定されるのだろう。あるいは、変化をひきおこす力（あるいは条件）がすでに集団に共有されていて、当該の変化が集団の構成員の発話に同時に発現したとしても、その変化がアロフォンのレベルにとどまり、安定的にひきつがれるフォネームとして定着しなければ、それも一過性のものとして消えていくことになるだろう。

変化の過程で可能性としてのいくつかの方向性のなかから特定の現象が選択的に固定される。そこで、可能性のひとつが決定される条件や要因が集団によってことなり、結果として変化の方向性がことなって、その形式がことなったものになると、ふたつの集団の言語は分岐したとみられるのだろう。複数の言語あるいは方言に分岐し、ことなる方向に変化しつづけながらも、祖方言を共通にし、下位方言グループにまとめられるのは、ホモロジーとなる音韻現象が保持されるからであり、発生拘束や構造的拘束を共通にすることによって平行進化がおきるからである。

比較歴史方言学的な音韻論にとって、問題になるのは分岐と音韻変化の関係である。先にのべたホモロジー、平行変化と収斂変化、発生拘束と構造的拘束は、分岐と音韻変化の関係を考慮し、琉球語諸方言の区分、下位方言間の系統関係をあきらかにするうえで重要なてがかりをあたえる。いっぽう、統合と音韻変化の関係は、下位方言間の影響、音韻変化の時間差や音韻変化の順序などをかんがえるとき、重要な要素になる。また、統合などによっておきた音韻変化も圧倒的な影響によっておきるのか、外的要因に呼応する内的な条件があるのかも重要な問題である。

沖縄島中南部諸方言のばあい、おそらく、有力な方言（首里、那覇の方言）が周辺方言に影響をあたえ、統合していっているとおもわれる。同じ現象が首里、那覇地域から中部や北部地域に移住した人々によって形成された屋取集落の方言が周辺の近接する集落の方言に影響をあたえたり、影響をうけたりしている。近年では標準語と琉球語諸方言とが接触することによる影響も想定しなければならない。同じ言語をはなす人々が移住して分裂した双方でそれぞれの変化をこうむることによってことなる特徴をもった下位方言に分岐する。そのとき、言語内的な理由による体系的な変化と、周辺方言からの影響による変化とがあるだろう。

波照間白保方言のばあい、波照間島方言と白保方言は、おおくの共通性をもつが、共通の現象は、それが平行変化によるものでなければ、ふたつの集団に分離する以前に有していたものであり、ホモロジーである。いっぽう、おなじ音韻体系をもつ方言話者集団が波照間島から白保に移住して分離し、波照間白保祖方言がふたつに分岐したのちに、一方の集団でおきた変化によるものである。宮古島方言においても同化せず au のまま残っている島の周辺地区の集落の方言と、同化して融合した平良市街地を中心にする地域の方言とがあるが、この現象も宮古島内部でおきた現象で、人々が宮古島に拡散したのちに発生したものであろう[18]。

---

18 同化した方言話者と同化しない方言話者が接触することによって影響をうけ、同化した

石垣島白保方言と波照間島方言が分岐したとみるなら、1874年に池間島から移住した宮古島西原集落の方言と移住元の池間島方言とのあいだでも方言が分岐したとみることができるだろうか。あるいは、1961年に宮古多良間村の水納島から宮古島市高野集落に移住した人々の方言と移住元の水納島方言とのあいだでも方言が分岐したとみることができるのだろうか。琉球国末期、あるいは明治初期に首里から地方に移住した人々の方言は、いつまで首里方言とよべるのか。首里方言としての特徴をうしなわなければ、いつまでも首里方言とよべるのか。首里方言を首里方言たらしめる特徴とはどんなものだろう。あるいは、波照間島方言を波照間島方言たらしめる特徴、白保方言を白保方言たらしめる特徴はどんなものだろう。波照間島方言を白保方言から区別する特徴とは何なのだろう。

何をもってふたつの方言が分岐したとみるのだろう。1個の単語の音声的な形式がちがえば、ふたつの方言は分岐したといえるだろうか。ふたつの方言が分岐したというためには、ちがいがどれほどの量になればよいのだろうか。ふたつの方言が分岐したというために、かならずなくてはならないものとはどんなものだろう。言語がすぐれて体系的な構造物であるとするなら、体系の変化、ちがいがみいだされなければならないのか。

上の問いにこたえられるような研究は、まだはじまったばかりで、ざんねんながら明確なこたえをもちあわせていない。のこされた課題はおおい。

---

oːをふくむ語を使用するようになる。このばあい、同化したoːを使用する方言が宮古島の中央方言である平良市街地の方言であったということも大きな理由であろう。ここで統合が進行しているとみることができる。

第２章　波照間白保方言の比較音韻論

1　はじめに

琉球語の狭母音化（*o>u、*e>i、*e>ï >i、*i>ɿ ）をひきおこしたつよい呼気流は、おおくの子音変化の要因にもなっている。呼気流の空気力学的な力がはたらいておきた音韻変化は、琉球語を日本語本土方言から区別するおおくの特徴をうみだしている。狭母音化と、それにともなう子音変化は、つよい呼気流によってひきおこされたものだが、琉球語におきた音韻変化は、かならずしもつよい呼気流によってのみおきているわけではなく、呼気流のよわまりによってひきおこされた音韻変化もみられる。また、呼気流のつよまりやよわまりといった空気力学的な力が積極的に関与せず、個々のフォネームをかたちづくる調音器官の筋肉的な運動の相互作用がおおきく関与しておきた同化assimilationもさまざまみられる。

波照間白保方言においても事情はおなじである。つよい呼気流は、波照間白保方言のおおくの音韻変化をひきおこしている。波照間白保方言は、よく知られるように、八重山諸方言のなかでもとくにつよい呼気流による有声子音の無声音化、摩擦音化などの音韻変化を特徴とする方言である。また、隣接同化、遠隔同化などによる母音変化や子音変化もいろいろみられるし、語末音挿入、語中音挿入などの音挿入 adition もみられる。語末の N 音挿入は、波照間白保方言を特徴づけるものとしてしられている。語例はすくないが、音位転換 metathesis もみられる。波照間島方言に子音の音位転換の例があり、白保方言に母音の音位転換がある。

波照間白保方言の母音変化と子音変化のおおくは、それが属する八重山諸方言とおなじ母音変化と子音変化がおきている。しかし、その音韻変化のありかたや実現のしかたの詳細にいたるまで他の八重山諸方言とおなじなのか、あるいは、他の八重山諸方言とどこがおなじで、どこごがことなるのか、波照間白保方言を他の八重山諸方言から区別する音韻的特徴は何で、それはどのように形成されたのなどについて詳しいことはまだ明らかになっていない。そこで、本稿では、波照間島方言と白保方言を対比させながら記述をおこなう。必要におうじて、適宜他の八重山諸方言、宮古諸方言など、他の琉球語諸方言と対比させて記述する。そのことによって、八重山諸方言のなかでの、あるいは、宮古八重山諸方言のなかでの波照間白保方言の位置づけをおこなうことにする。

記述は、母音と子音にわけておこなう。母音の変化は、狭母音化と同化（隣接同化と遠隔同化）による母音の変化にわけて行なう。子音の変化については、無声音化、有声音化、破裂音化、摩擦音化、破擦音化、鼻音化など多様な変化がみられるが、そのさまざまな音韻変化を記述し、それらがどのような条件、音環境のもとでおきているのか、その変化の要因は何かをさぐっていくことにする。また、音位転換や波照間白保方言を特徴づける語末の N 音挿入についても波照間島方言と白保方言とを比較しながら分析する。

それらのことをとおして、波照間島方言と白保方言が分岐する以前におきた音韻変化と、分岐後の 230 年のあいだにおきた音韻変化とを峻別し、どのような音韻変化が波照間島方言と白保方言におきたのかをみていく。本稿は、記述はまだ羅列的であり、現段階でのお

もいつきを十分な検証もできていない。他の八重山諸方言、あるいは宮古八重山諸方言でおきた音韻変化を詳細に記述していくうえでの、あるいは下位方言相互の比較研究をおこなううえでの準備的な作業である。

2　波照間白保方言の母音変化

波照間白保方言におきた母音変化には、*o>u、*e>i、*i>ɿ の狭母音化と*ao>oː、*au>oː、*ae>eː、*ai>eːなどの母音の相互同化や先行音節の母音 u、i による遠隔進行同化と後続音節の母音 a、u、i による逆行遠隔同化、などがみられる。狭母音化と同化によって音韻変化がおこると、あらたなフォネームの挿入、フォネームの統合、ずれなどの音韻体系の再編がひきおこされる。

波照間白保方言のつよい呼気流は、母音の韻質におおきな変化のみられない*u、*a にも作用している。*u と結合する先行子音や後続子音に変化をひきおこしたり、その結果*u が消失したりしている。また、*a 自身には韻質の変化はみられないが、つよい呼気流によって発生した無声音化したアロフォン ą̥ は、後続の子音に影響をあたえて無声音化させる要因ともなっている。そこで本稿では、韻質の変化をともなった*o>u、*e>i、*i>ɿ だけでなく、*u>u、*a>a も狭母音化を構成する要素としてあつかうことにする。

無声音化した母音のアロフォン i̥、u̥、ɿ̥、ą̥ は、つよい呼気流による空気力学的な条件がおおきく関与した進行同化によって後続の有声子音を無声音化させ、有声破裂音 b、d、g を p、t、k、有声破擦音 dz を ts にかえる。その結果、b、d、g の一部のアロフォンが p、t、k と統合され、フォネームの再編（ずれ）がおこなわれる。有声の鼻音 m、n、流音 r も無声音化させるが、一部の単語で r̥ が無声摩擦音の s、h に変化してフォネームの再編（ずれ）がおこなわれるが、m̥、n̥、r̥ は、つよい呼気流とともにあらわれるアロフォンのままであり、呼気流のよわいときには無声音化しない m、n、r であらわれる。母音の無声音化にともなう有声子音の無声音化については、3節の 3.1 無声音化の項でくわしくのべる。

2.1　波照間白保方言の狭母音化

波照間島方言も白保方言は、狭母音 i、u、舌先母音 ɿ だけでなく、広母音 a もみじか母音であれば無声音化したアロフォン i̥、u̥、ɿ̥、ą̥ を有する。なが母音 aː、iː、uː、eː、oː、ɿː は無声音化したアロフォンをもたない。無声音化したアロフォンは、無声子音にはさまれるときにあらわれるだけでなく、先行する子音が無声子音 p、t、k、ts、s、h であれば、後続する子音が有声子音であってもあらわれる。そのことによって後続子音が無声音化するが、それについては子音の項でのべる。

2.1.1　*o の狭母音化

波照間島方言、白保方言のいずれにおいても、他の琉球語諸方言とおなじく狭母音化によって、*o は円唇の奥舌狭母音 u に変化し、狭母音化のまえから存在した*u と統合され

ている。波照間島方言と白保方言とをくらべてみても、両者にめだったちがいはみられない。波照間島方言、白保方言ともに o のアロフォンとして ɷ があらわれるが、ɷ のあらわれる条件を特定できていない。

短母音の o もあらわれるが、母音の同化によって発生した o:が短母音化したものや、kwa>ko、gwa>go などの変化によって発生したものなど、語例はおおくない。

かりまた（2008）で詳述したように*o>u の変化は、琉球語諸方言全体にあまねくみられる。変化をみると、宮古八重山諸方言が各地の方言に分岐する以前に*o>u がおきていた可能性がたかい。*o>u は安定した変化で、波照間白保方言が分岐する以前におきたもので、ホモロジーとみるなら、少数ながらもみられる o をふくむ単語を説明できなければならない。

後述する*u、*i のばあい、つよい呼気流が狭い声道をながれることによって、先行する破裂音*p、*k を摩擦音化させたり、後続する流音 r を摩擦音化させたりするが、狭母音*u、*i とはことなり、*o は、先行、後続の子音を変化させていない。

2. 1. 1. 1　*o

語例はすくないが、*o の語頭音節での脱落がみられる[1)]。

語頭の*o	波照間	白保
うりずん[2)]	urɻdzɻN	urudʒiN ～ urudzɻN
顔（おもて）	mutʃi	mutʃi
大皿（おほざら）	budzara	bu:dzara
親指（おほ指）	bu:bɻ	bu:bi

2. 1. 1. 2　*ko

*o と結合する*k を h に変化させる沖永良部与論沖縄北部諸方言に対して波照間白保方言は、他の宮古八重山諸方言とおなじく語頭でも語中でも破裂音のままたもたれている。白保方言 tạ̥pa˥gu（煙草）、波照間島方言 de:guɲi（大根）、白保方言 deguɲi（大根）の k は有声音化して g になっている。有声音化については子音変化の項で詳述する。

語頭の*ko	波照間	白保
粉（こ）	ku:	ku:
今年	kṵ̥tusɻ	kutṵ̥ʃi̥ ～ kutṵ̥ʃi

1　２人称代名詞「汝、あなた」を波照間島方言、白保方言ともに da:というが、与論島方言の?ura、伊江島方言の?la:、宮古島下里方言の vva などから、波照間白保方言の da:は、語頭の u が脱落した語形であるとかんがえる。波照間島方言では daibjo:（癩病）、dakkjo:（らっきょう）などにみるように、語頭の r が d に変化していることも、語頭音脱落を裏づける。

2　『おもろさうし』に「おれつむ」「おれつみ」などの語形がみられ、語頭音節の母音を o と想定できるので、本稿では*o としておく。他の琉球語諸方言の語例を精査して確認したい。

去年（こぞ）	kụ̥tsɿN	kụ̥tsɿN
声	kui	kui
腰	kụ̥tsɿ	kụ̥tsɿ
こば	kụ̥pa	kụ̥pa
昆布	kubu	kubu
九つ	hạ̥k'onatsɿ[3]	kụ̥kunutʃi
九日	hạ̥konaga	kụ̥kunuka

語中の*ko	波照間	白保
箱	pạ̥ku	pạ̥ku
蛸	tạ̥ku	tạ̥ku
九つ	hạ̥k'onatsɿ	kụ̥kunutʃi
九日	hạ̥konaga	kụ̥kunuka
煙草	tạ̥kabu[4]	tạ̥pagu
大根	de:guɲi	deguɲi

波照間島方言の hạ̥konaga（九日）、hạ̥k'onatsɿ（九つ）は、白保方言の kụ̥kunuka（九日）、kụ̥kunutʃi（九つ）とおおきくことなる。白保方言の語形が周辺方言の影響によるものでなく、波照間島方言の hạ̥konaga、hạ̥k'onatsɿ が*kokonoka、*kokonotsu から変化した語形であるなら、この変化は、波照間島と白保方言が分岐した後の変化によるものである。

波照間島方言で語頭の k>h の変化の例は hakodzɿ（顎）の単語にみるように、数はすくないが、ないわけではない。hạ̥konaga の第 3 音節目の na は語末の母音 a の逆行同化による変化であろうか。語頭音節の母音が a であることの説明はまだできない[5]。

2. 1. 1. 3　*go

語頭の*go	波照間	白保
牛蒡	gumboN	gumbo:
胡麻	gumaN	guma
5月	guŋgotsɿ	guŋgatʃi

語中の*go

---

3 波照間島方言、白保方言で無声子音および無声音化した母音に後続する無声破裂音 k、t は、hạ̥k'onatsɿ（九つ）の k'のように喉頭音化したアロフォンであらわれる傾向がある。また、無声破擦音も喉頭音化したアロフォンであられることがある。喉頭音化した無声破擦音を tz、tʒ のようにかきあらわす。喉頭音化したアロフォンは話者によってもあらわれる頻度がことなるが、同一話者でも単語によって、あるいは個々の発話においてもあらわれ方がことなることがある。本研究報告では、それをいちいち記していない。

4 波照間島方言の tạ̥kabu は、子音の音位転換がおきている。音位転換の項を参照。

5 日本語で「七日」を「なのか」というのと同じく、同音連続をさける現象を想定することも可能だが、確定できない。

担桶（たご[6]）	ta:gu	taŋgu

2. 1. 1. 4　*so

波照間島白保方言では*so>su が一般的な変化だとおもわれるが、stutsɿ～sʝtutsɿ（ソテツ）、sʝra（梢）では*so>s、あるいは*so>sʝの変化がおきている。語頭音節におけるつよい呼気流による無声音化がおきるのと平行して、歯茎摩擦音 s との同化によって u が舌先母音 ɿ に変化したものと考える。舌先母音 ɿ は、かりまた（2008）で詳述したように、s と調音位置がほぼ同じである。おなじことが*kodzo>kʉ̥tsɿN（去年）の*dzo でもおきたとかんがえる。

語頭の*so	波照間	白保
ソテツ	stutsɿ ～ sʝtutsɿ	stutsɿ ～ sʝtutsɿ
梢（そら[7]）	sʝra	sʉ̥ra

語中の*so		
裾	ssu	ssu:
みそ	miʃu	mi:su: ～ mi:ʃu:
糞	ɸʉ̥tsu	ɸʉ̥tsu

2. 1. 1. 5　*dzo

語中の*dzo	波照間	白保
去年（こぞ）	kʉ̥tsɿN	kʉ̥tsɿN

2. 1. 1. 6　*to

語頭の*to	波照間	白保
樋	tuɿ	tui
十（とを）	tu:	tu:
鳥	tʉ̥ɾ̥ɿ	tʉ̥ɾ̥ɯ
年	tʉ̥tsɿ	tʉ̥ʃi
トマト	tomato	tamuto

語中の*to	波照間	白保
糸	itu	ittsu
一月（ひとつき）	pˢʝtuskɿN	pi̥tuʃi̥ki ～ pʝtuʃi̥ki
一人	pˢʝturɿ	pi̥turi
今年	kʉ̥tusɿ	kutʉ̥ʃi̥ ～ kutʉ̥ʃi

6 担桶には、「たんご」「たご」の２形が想定されるが、現段階では宮古八重山諸方言の祖形をどちらかに特定できない。

7 語源は不明だが、沖縄方言 su:ra、宮古島下里方言 sura などの語形から*sora を祖形と考えた。

鳩	pḁtoN	pḁtoN
ひとつ	pˢʲtutzɹ	pi̥titʃi̥ ～ pʲtitʃi̥
トマト	tomato	tamuto

波照間島方言のpˢʲtutzɹ（ひとつ）は、第2音節の母音がuで、この語形の祖形は*pitotsuだとかんがえる。白保方言のpi̥titʃi̥ ～ pʲtitʃi̥（ひとつ）は、第2音節の母音がiで、祖形は*pitetsuであろう。

*putetsu	t'ïːtzï	奄美市笠利佐仁、龍郷町瀬留
	t'iːtʒi	今帰仁村与那嶺、名護市幸喜
	tiːtʃi	那覇市楚辺、那覇市首里当蔵
*pitetsu	pˢʲtiːtsɹ	宮古島市下里、保良、伊良部
	pʲtiːdzɹ	石垣市大浜、真栄里
	pʲtitʃi	石垣市白保
	pi̥tiːdzɹ	石垣市新川（『石垣方言辞典』）
*pitotsu	t'uːtʒi	与那国島
	pˢʲtutzɹ	波照間島

奄美大島諸方言のt'ïːtzï、沖縄諸方言のt'ïːtʒiやtiːtʃiは、語頭の音節が消失しているが、第2音節が破擦音化していないことから、消失した語頭の音節は*puで、「おもろさうし」に記載されている「ふてつ」と同系の*putetsuが祖形であったろうとかんがえる。それに対して、宮古諸方言、および石垣島方言の祖形は、白保方言と同じ*pitetsuであろう。与那国島方言の祖形は波照間島方言とおなじ*pitotsuであろう。

これまでの資料から、奄美沖縄諸方言の*putetsu、宮古八重山諸方言の*pitetsu、与那国島方言、波照間島方言の*pitotsuの3系にわかれるであろうとかんがえる。ここで問題になるのは、波照間島方言と白保方言の語形がことなる理由である。波照間島方言と白保方言が分岐したのちに、それぞれでことなる変化をしたのだろうか。そうだとすると、奄美沖縄諸方言と宮古八重山諸方言と与那国島方言の語形のちがいが生じたのも1771年以降ということになる。そうでなければ、波照間島方言の語形が与那国島方言の影響をうけておきかわったか、白保方言が石垣島の周辺方言の影響をうけておきかわったかということになろうか。後者の可能性はあるだろう。

しかし、なぜおおくの琉球語諸方言の語形が日本語hitotsuと祖形を異にするのか、奄美沖縄諸方言と宮古八重山諸方言の祖形がそれぞれどのようにできたのか、それがことなる理由は何か、不明である。なぜ与那国島方言、波照間島方言の語形が他の宮古八重山諸方言とことなり、日本語hitotsuと祖形を共通にするのかも不明である。与那国島方言、波照間島方言の祖形*pitotsuが日本語と祖形を共通にする古形だとするなら、古形が周辺に分布する周圏分布をしめす例とみることも可能だろう。pˢʲturɹ（一人）、pˢʲtuskɹN（一月）などの語形の前要素pˢʲtu（ひと）との意味上の共通性にもとづく類推によってpˢʲtutzɹ（ひとつ）ができた可能性もあるだろう。それらが不明のままでは波照間島方言と白保方言の語形のちがいの解明も十分にはおこなえない。

波照間島方言 tomato（トマト）に半狭母音 o があらわれるのは、あたらしく流入した外来語だからであろう。いっぽい、白保方言の tamuto（トマト）は、語頭音節母音と語中音節母音が音位転換したものであろう。音位転換の項を参照。

2. 1. 1. 7　*do

語頭の*do	波照間	白保
泥	duru	duru
胴	du:	du:

語中の*do		
喉	nudu	nudu
戸（家戸[8]）	jadu	jadu ～ jadɷ
踵（あど）	adu	adu
口広甕[9]	bando:	bando:

2. 1. 1. 8　*no

語頭の*no	波照間	白保
喉	nudu	nudu
鑿（のみ）	nuN	nuN
蚤	nuN	nuN

語中の*no	波照間	白保
布	nunu	nunu
九つ	hak̥'onatsɿ	kuk̥unutʃi
九日	hak̥onaga	kuk̥unuka
角	ʃin̥o	sɿm̥u
昨日（きのふ）	sn̥u ～ sɿn̥u	sn̥u ～ sɿn̥u
火の神	pɿn̥akaN ～ pˢɿn̥akaN	pi̥nakaN
薪	ta:munu	tamunu
おかず（糧物）	kat̥ʃimunu	kat̥ʃimunu
斧（をの）	bunu	bu:nu

2. 1. 1. 9　*po

古代ハ行子音の p を保持する沖永良部与論沖縄北部諸方言にあっても*o と結合する*p は ɸ あるいは h に変化しているが、波照間白保方言のばあい、宮古諸方言のばあいとおなじく p を保持している。

---

8 『万葉集』744「夕さらば家戸開け設けて我待たむ」などの「やど」と同系の語で、jado を祖形とかんがえる。

9 語源は不明。「飯胴」か。今帰仁与那嶺 p'aNdo:、首里 haNdu:ga:mi。八重山新城方言 pandu。

語頭の*po	波照間	白保
星	pu̥su	pu̥tsu̥ ～ pu̥tsɿ
帆	pɷ:	pu:
骨	pu̥ɲ̥i	pu̥ɲ̥i

語中の*po		
大皿（おほ）	budzara	bu:dzara

2. 1. 1. 10　*bo

語中の*bo	波照間	白保
壷	su̥pu	su̥pu
カボチャ	kabutʃa	kabutʃa
かまぼこ	kḁm̥agu ～ kḁm̥agɷ	―――
牛蒡（ごばう）	gumboN	gumbo:

2. 1. 1. 11　*mo

語頭の*mo	波照間	白保
腿	mumu	mumu

語中の*mo	波照間	白保
肝	su̥m̥u～su̥m̥u～sɿm̥u	su̥m̥u
雲	ɸu̥moN	ɸu̥moN
紐	pˢɿm̥u	pi̥m̥u
薪	ta:munu	tamunu
霜月	sɿm̥usɿkɿ	―――
顔（おもて）	mutʃi	mutʃi
おかず（糧物）	kḁtʃimunu	kḁtʃimunu

2. 1. 1. 12　*jo

語頭の*jo	波照間	白保
手斧（よき）	jusɿ	jukki
夜中	junaga	junaga
夜	juru	juru
よだれ	judarɿ	judarɿ
四つ	ju:tzɿ	ju:tʃi
四人	jutarɿ	juttari
枝（よだ[10]）	juda	juda

10 沖縄諸方言、宮古諸方言の語形との比較から祖形を*joda と考えた。

2. 1. 1. 13　*ro

語頭の*ro	波照間	白保
六月	rukugotsɿ	rukugwatʃi
櫓（ろ）	du:	du:

語中の*ro		
黒	ɸɸu	ɸɸu
筵	―――	mussu

2. 1. 1. 14　*wo

語頭、語中において*w に後続する o は、狭母音かによって u に変化している。語頭では*w が破裂音化して b になっている。ただし、波照間島方言の uk'i（桶）、白保方言の ukki（桶）は w>b の例外である。語中では唇音性退化によって母音単独音節になり、先行音節の母音と同化している。

語頭の*wo	波照間	白保
斧（をの）	bunu	bu:nu
麻（を・苧）	bu:	bu:
おととい[11]	bututzɿ	bututtʃi ～ bututʃi
桶（をけ[12]）	uk'i	ukki

語中の*wo	波照間	白保
魚（いを）	ju:	ju:
十（とを）	tu:	tu:
竿（さを）	so:	so:
青い（あを）	ohaN	ɷhaN

2. 1. 1. 15　o をふくむその他の音節

	波照間	白保
急須[13]	dzok'a ～ dzo^{k}k'a	tʃukk'a

波照間島方言の hạ̥k'onaga（九日）の語中の na は、語末の ga の母音 a の遠隔逆行同化によって o（あるいは u）が a に変化したものであろう。

---

11 祖形を古代日本語の「をとつひ」「をととひ」のいずれにしても語頭は「を」である。
12 uk'i（桶）、ukki(桶)の語頭に b があらわれないのは、この単語が*w>b の変化がおわったあとに流入した可能性もある。地点数をふやして確認したい。
13 橋口満（2004）『鹿児島方言大辞典下巻』に「チョカ　名　茶瓶。」があるが、琉球語諸方言の当該の単語は、鹿児島方言から移入された語であると考える。そこで、琉球語の祖形を仮に*tʃoka と考えた。

白保方言の tamuto（トマト）は、新たに入ってきた外来語であるが、語頭音節の母音 o と第 2 音節めの母音 a が音位転換をおこしたものではないかと考える。

2. 1. 2　*e の狭母音化

前舌半狭母音*e は、波照間島方言、白保方言のいずれにおいても、他の宮古八重山諸方言とおなじく狭母音化によって、張唇の前舌狭母音 i に変化している。他の宮古八重山諸方言とおなじく中舌狭母音 ï を経た形跡はみられない。*e>i の変化にともなう先行、後続の子音の変化もない。

*e>i の変化の例外となるのは、波照間島方言 ɿːN（柄）、asajage（朝焼け）、juːjage（夕焼け）、白保方言 pˢʲɿn̥e（髭）である。asajage（朝焼け）、juːjage（夕焼け）は、日本語標準語からの影響の可能性があるが、他の 2 形についてその理由は不明である。

2. 1. 2. 1　*e

語頭の*e	波照間	白保
絵	iː	iː
海老	ibɿ	ibɿ ～ ibi
柄	ɿːN	iː

語中の*e		
声	kui	kui

2. 1. 2. 2　*ke

語頭の*ke	波照間	白保
毛	kiː	kiː
木	kiː	kiː
煙	kʲpusɿ ～ kʲpus	kʲpuʃi ～ kʲpuʃiN
今日（けふ）	kjuː	kjuː

語中の*ke	波照間	白保
酒	sa̯k'i	sa̯ki
竹	ta̯ki	ta̯ki
桶	uk'i	ukki
朝焼け	asajage	asajagi
夕焼け	juːjage	juːjagi
池	igi	――――
鱗（いりけ[14]）	irigi	irigi

14 宮古島市下里方言 iŋki、保良方言 iŋki の語形との比較から祖形を*irike と考える。

2. 1. 2. 3　*ge

語中の*ge	波照間	白保
髭	pi̥ŋ̊i	pˢɹn̥e
禿げ	pagi	pagi
影	kʲeː	keː

2. 1. 2. 4　*se

語中の*se	波照間	白保
綛（かせ）	kḁtʒi	kḁtʃi
汗	aʃi	aʃi
煙管	ki̥tsɹrɹ	ki̥tʃiri

2. 1. 2. 5　*dze

語中の*dze	波照間	白保
風	kḁtʒi	kḁtʒi

2. 1. 2. 6　*te

語頭の*te	波照間	白保
天	tʒiN	tiN
手	ʃiː	ʃiː
太陽	ʃi̥n̥a	ʃi̥t̥aˑ

語中の*te	波照間	白保
ソテツ	sɻtutsɹ ～ stutsɹ	sɻtutsɹ ～ stutsɹ
顔（おもて）	mutʃi	mutʃi
おかず（糧物）	kḁtʃimunu	kḁtʃimunu

2. 1. 2. 7　*de

語中の*de	波照間	白保
筆	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi
腕	udʒi	udi

2. 1. 2. 8　*ne

語頭の*ne	波照間	白保
根	ɲiN	ɲiː
柄杓[15]	ɲibu	ɲiːbuː

語中の*ne	波照間	白保

15 沖縄諸方言、奄美諸方言の語形との比較から祖形を*nebu と考えた。

骨	pu̥ɲi	pu̥ɲi
船	ɸu̥ɲi	ɸu̥ɲi ～ ɸɲi
金属（かね）	kḁɲi	kḁɲi
種	tḁɲi	tḁɲi
羽	pḁɲi	pḁɲi
脛	ʃi̥ɲi	ʃi̥ɲii
豚の餌箱[16]	to:ɲi	to:ɲi

2. 1. 2. 9　*pe

語頭の*pe	波照間	白保
屁	piN	pi:
イルカ[17]	pi̥tu	pi̥tu

語中の*pe		
蝿(はへ)	pʲe:	pʲe:
前（まへ）	mʲe:	mʲe:

2. 1. 2. 10　*be

語中の*be	波照間	白保
鍋	nabi	nabi ～ na:bi
汁鍋	ʃinabi	su:nabi
大しゃもじ	ibira	ibira（飯篦？）
昨夜[18]	jubi	ju:bi

2. 1. 2. 11　*me

語頭の*me	波照間	白保
目	miN	miN

語中の*me		
爪	ʃi̥mi	ʃi̥mi
亀	kḁmi	kḁmi
甕	kḁmi	kḁmi
豆	mami	mami
雨	ami	ami

16 語源について仲宗根政善（1983）は「田舟」としている。奄美大和浜方言 t'o:ni、今帰仁与那嶺方言 to:nï、宮古城辺保良方言 tauni などから祖形を*taune と考えた。
17 沖縄諸方言、宮古諸方言の語形との比較から祖形を*peto と考えた。
18「よべ九条より大納言殿いらせ給ひて候ひしが（とわずがたり）」の「よべ（昨夜）」および、他の琉球語諸方言の語形などから*jobe と考えた。

2.1.2.12　*re

語中の*re	波照間	白保
すだれ	――――	ʃ̥itari

2.1.3　*iの狭母音化

狭母音化をひきおこしたつよい呼気流は、破裂音*p、*b、*k、破擦音*ts、*dz、摩擦音*s、流音*rと結合する張唇前舌狭母音*iを舌先母音ɿに変化させるが、すべてのiを変化させているわけではなく、変化しないでiのままのものがある。母音単独音節の*i、語頭で鼻音*m、*nと結合した*iは変化せずiであらわれる。語中で鼻音*m、*n、破裂音*gと結合した*iは、消失して撥音Nがあらわれる。

*iがɿに変化することによって、*iは、iとɿに分裂される。ɿの発生（分裂）は、あらたなフォネームとしての母音体系へのわりこみでもある。

2.1.3.1　*i

語頭の*iは、これまでえられた資料のなかで波照間島方言のɿ〜ᶻɿ（飯）をのぞいて、iのままである。語中の*iは、aに後続するばあい、相互同化によってeになっているが、u、oに後続するばあい、変化しないでiのままである。

語頭の*i	波照間	白保
飯(いひ)	ɿ 〜 ᶻɿ	iː
飯椀	ɿːmaːrɿ	iːmagari
大しゃもじ	ibira	ibira（飯箆？）
石臼	iʃoːʃi	iʃiuʃi
息	is 〜 isɻ	is 〜 isɻ
糸	itu	ittsu
甍（いらか）	iraga	inaga
五つ	issɿ	iʃʃi
五日	iska 〜 isɻka	itska 〜 itsɻka
動物	iʃ̥m̥usɿ	isɻm̥us
犬	iN	inu
烏賊	iga	iga
鱗（いりけ）	irigi	irigi
杵（稲搗き？）	inasɻkɿ	inaʃ̥iki
魚（いを）	juː	juː

波照間島方言、白保方言のjuː（魚）は与那国島方言のijuと類似の語形で、同じようにしてできたとみるなら、*iwo>ijo>iju>juːの変化過程を経て生じた語形であろう。

juː、ijuは、他の宮古八重山諸方言とはことなる。宮古島市下里方言ɿzu、保良方言ɿzuは、語頭の舌先母音ɿの影響でw、あるいはjがzに摩擦音化してできたものであり、石

垣市新川方言 idzu、小浜島方言 idzu、竹富島方言 idʒu は、下里方言などの ɿzu から舌先母音の摩擦がよわまって i になり、摩擦音 z が破擦音になってできた語形であろう。

語中の*i	波照間	白保
六日	muiga	muiga、muika
米	mɛ	mɛ
大根	deːguɲi	deguɲi
まな板	mantsa	manitsa

2. 1. 3. 2　*ki

無声破裂音*k と結合した*i は、波照間島方言のばあい語頭でも語中でも舌先母音 ɿ に変化している。白保方言のばあい、語頭では ɿ に変化しているが、語中では ɿ があらわれる語もあるが、i であらわれる語がおおくなっている。

波照間島方言、白保方言の sṵm̥u～sṵm̥u、sṵm̥u（肝）の語頭音節で u があらわれるのは、後続音節の母音 u の遠隔逆行同化によるものであろう。また、波照間島方言、白保方言の k̥itsɿrɿ、k̥itʃiri（煙管）の語頭音節で ki-となっているのは、この単語が ki>sɿ の変化後にとりいれられた単語である可能性がある。

*i と結合した*i は、語頭では摩擦音化して s になっているが、語中では、k であらわれる単語もあるが、摩擦音 s、あるいは、破擦音 ts（白保方言では tʃ）であらわれる単語がある。摩擦音化と破擦音化については「3. 4　摩擦音化」および「 3. 5　破擦音化」で詳述する。

語頭の*ki	波照間	白保
着物（きぬ）	sʝn̥u	sʝn̥u
昨日	sn̥u ～ sʝn̥u	sn̥u ～ sʝn̥u
肝	sṵm̥u ～ sṵm̥u	sṵm̥u
傷	kʝsɿ	kʝsɿ
煙管	k̥itsɿ rɿ	k̥itʃiri

語中の*ki	波照間	白保
息	is ～ isʝ	is ～ isʝ
手斧（よき）	jusʝ	jukk i
動物	iʃ̥im̥usɿ	isʝm̥us
神酒[19]	mɿsɿ	―――
垣根	k̥atsɿ	k̥atʃiˑ
箒（ほうき）	poːtsʝ ～ poːtsɿ	poːʃ̥i ～ poːʃi
杵（稲搗き？）	inasʝkɿ	inaʃ̥ki
一月（ひとつき）	pstuskɿN	p̥ituʃ̥ki ～ pʝtuʃ̥ki

19 「神酒 misï」（『石垣方言辞典』）。

月	sɧk'eN	skiN ～ sɧkiN
霜月	sɧm̥usɧkɩ	――――
ついたち	skɩdatsɩ ～ sɧkɩdatsɩ	ʃi̥kidatʃi̥、ʃi̥kitatʃi̥
天気	ω:sɧkɩ ～ ω:skɩ	oʃi̥ki
碾き臼	――――	pi̥kiuʃi

波照間島方言の「月」は宮良當壯（1930）『八重山語彙』では[sĩkĩŋ]となっている。sɧk'eNは、宮良當壯（1930）以降のあたらしい語形か。

2.1.3.3　*gi

これまでの調査で語頭に*giをふくむ単語がえられていない。語中の*giは、koŋgi（桑の木）の1例をのぞいて母音が消失して撥音Nに変化している[20]。

語中の*gi	波照間	白保
釘	ɸuN	ɸuN
足（はぎ）	paN	paN
麦	muN	muN
フクギ（福木）	ɸu̥koN	ɸu̥kuN
桑の木	koŋgi	koŋgi

2.1.3.4　*si

語頭の*siは、波照間島方言、白保方言いずれもsɩによく対応している。

語中の*siも波照間島方言、白保方言いずれもsɩに対応しているが、白保方言では語頭にくらべると、ʃi、tʃiであらわれる語例がふえている。

語頭の*si	波照間	白保
島	sɧm̥a ～ sm̥a	sɧm̥a ～ sm̥a
舌	sɧt'a ～ st'a	sɧta ～ sta
小便（しばり）	sɧparɩ	sɧparɩ
肉（しし）	sɧsɩ	sɧsɩ
虱	ssaN ～ saN	ssaN ～ saN
ふけ（しらが）	ssaga	ssaga
汁鍋	ʃinabi	su:nabi
汁椀	su:ma:rɩ	su:magari
4月	sɩŋgotsɩ	ʃiŋgwatʃi
しめ縄	ʃi̥m̥idzɩna、ʃi̥p̥idzɩna	spidzɩna、ʃi̥p̥idzɩna
7月	ʃi̥tsɩgotsɩ	ʃi̥tʃiŋgatʃi
霜月	sɧm̥usɧkɩ	――――

20 『八重山語彙』に「saŋ（鷺）」（白保・竹富）がある。

波照間島方言ʃi̥m̥idzɿna〜ʃi̥p̥idzɿna（しめ縄）、白保方言 spidzɿna〜ʃi̥p̥idzɿna（しめ縄）で sɿ になっていないのは、第 2 音節めの母音 i の逆行同化によるよるものだろう。波照間島方言ʃi̥tsɿgotsɿ（7 月）、白保方言ʃiŋgwatʃi（4 月）、ʃi̥tʃiŋgatʃi（7 月）は、標準語の影響だろうか。

語中の*si	波照間	白保
虫	musɿ	musɿ
牛	usɿ	usɿ
箸[21]	masɿ	――――
動物	iʃi̥m̥usɿ	isʲm̥us
石臼	iʃo:ʃi	iʃiuʃi
橋	pḁtsɿ	pḁtʃi
腰	ku̥tsɿ	ku̥tsɿ
年	tu̥tsɿ	tu̥ʃi
櫛	ɸu̥tsɿ	ɸu̥tʃi
箸	――――	pḁtʃi
昔	mugasɿ	mugaʃi
今年	ku̥tusɿ	kutu̥ʃi̥ ～ kutu̥ʃi
下駄（あしだ）	ast'a ～ asʲt'a	aʃidʒa
星	pu̥su	pu̥su
筵	――――	mussu
煙	ki̥pusʲ ～ ki̥pus	ki̥puʃi ～ ki̥puʃiN
膝（つぶし）	su̥pusɿN	sʲpusɿN ～ su̥pusɿN
柄杓（さし？）	sḁtʃi	sḁtʃi

波照間島方言、白保方言の pu̥su（星）で sɿ になっていないのは、語頭音節の母音 u の遠隔進行同化によるものであろう。汁鍋ʃinabi（汁鍋）、su:nabi（汁鍋）、su:ma:rɿ（汁椀）、su:magari（汁椀）の su:（汁）は、mus˥su（筵）と同じくʃiru＞sɿru＞ssu＞su:と変化した結果であろう。

2. 1. 3. 5　*tsi

語頭、語中の*tsi は、波照間島方言、白保方言いずれも tsɿ によく対応している。

語頭の*tsi	波照間	白保
血	dzɿ:	dzɿ:
乳（ち）	dzɿ:	sɿ:

21 『沖縄語辞典』me:ʃi（箸）、ume:ʃi（御箸）、宮古島市下里方言 umjas（箸）などから*mihasi（御箸）あるいは*omihasi（御御箸）を祖形と考えた。

釣針（ち）	dzɿ:	――――
近い	skahaN	skahaN

語中の*tsi	波照間	白保
口	ɸu̥tsʝ	ɸu̥tʃi～ɸu̥tsɿ
道	mitʃi	mitʃi
蜂	pa:tsɿ	padzɿ
血管（血の道）	dzɿnumitsɿ	dzɿ:numitsɿ
7月	ʃi̥tsɿgotsɿ	ʃi̥tʃiŋgatʃi
8月	pḁtsɿgotsɿ	pḁtʃiŋgatʃi
ついたち	skɿdatsɿ ～ sʝkɿdatsɿ	ʃi̥kidatʃi̥、ʃi̥kitatʃi̥

2.1.3.6　*dzi

語頭、語中の*dziは、波照間島方言、白保方言いずれもdzɿによく対応している。ただし、語頭に*dziをふくむ単語は1例しかえられていないし、語中の語例もすくない。語例をふやして検討したい。

語頭の*dzi	波照間	白保
字	dzɿ:	dzɿ:

語中の*dzi		
舵（かぢ）	kḁtsɿ	kḁtsɿ
匙（さじ）	sadʒi	sadʒi
頂（つじ？）	sɿdzɿ	dʒiN
肘	pi̥tsʝ	pi̥tsʝ
クジラ	gudzɿra	gudzɿra
麹	go:dzɿ	ko:dzɿ

語中のdzがtsであらわれているのは、語頭の無声子音の進行同化による無声音化によるものである。

2.1.3.7　*ni

これまでの調査でえられた*niをふくむ語例はすくない。語頭音節では*niは変化せず、語中音節では母音iが消失して撥音Nになっている。*ni>Nの変化は、後述する鼻音mとiの結合した*miの母音iが消失して撥音Nに変化しているのと似るが、調査をすすめて語形をふやし検討したい。

語頭の*ni	波照間	白保
肉	ɲiku	ɲiku
2月	ɲiŋgotsɿ	ɲiŋgatʃi

12月[22]	dʒuːɲiŋgotsɿ	dʒuːɲiŋgwatʃi
語中の*ni		
蟹	kaN	kaN
海胆	uN	uN[23]

2.1.3.8 *pi

語頭の*pi	波照間	白保
火	pˢʲ、pˢɿ	piː
昼	pˢʲsu	pi̥ru
紐	pˢʲm̥u	pi̥m̥u
手のひら	ʃiːnu pˢʲsa	ʃinu pˢʲsa
昼	pˢʲsu	pi̥ru
肘	pi̥tsɿ	pi̥tsɿ
火の神	pʲn̥akaN～pˢʲn̥akaN	pi̥nakaN
髭	pi̥n̥i	pˢʲn̥e
左	pi̥nari	pi̥tari
ニンニク	pi̥ru	pi̥ru
樋（ひ）	bɿN	biː
一月（ひとつき）	pˢʲtuskɿN	pi̥tuʃi̥ki ～ pʲtuʃi̥ki
ひとつ	pˢʲtutzɿ	pi̥titʃi̥ ～ pʲtitʃi̥
一人	pˢʲturɿ	pi̥turi
碾き臼	――――	pi̥kiuʃi
炎（火花）	pˢʲbana	pibana
樋（急須の口）	bɿN[24]	biː

語中の*pi	波照間	白保
飯（いひ）	ɿ ～ ʐɿ	iː
飯椀	ɿːmaːrɿ	iːmagari
おとつい	bututzɿ	bututtʃi ～ bututʃi
灰（はひ）	pʲeː	pʲeː
樋（とひ）	tuɿ	tui

2.1.3.9 *bi

語中の*bi	波照間	白保
紙（かび）	kḁpɿ	kḁpi
茄子	nasʲpi ～ naspi	naʃi̥pi

---

22 語中だが、複合語なので、語頭音節のばあいと同じく ni>N の変化がおきていない。
23 uN の語形のほかに kḁtsɿ という語形もある。
24 ɿ の舌先の摩擦は宮古より弱い。

海老	ibɿ	ibɿ～ibi
あくび	agobɿ	akubɿ
親指（おほ指）	buːbɿ	buːbi
中指	nagabɿ	nagabɿ、nagabi

2. 1. 3. 10　*mi

*mi は語頭音節では変化せず mi であらわれるが、語中音節では*mi>N の変化がおきていて、語頭音節と語中音節でことなる。

語頭の*mi	波照間	白保
果肉（実）	miː	miː
道	mitʃi	mitʃi
水	midzɿ	midzɿ
味噌	miʃu	miːsuː ～ miːʃuː
神酒	mɿsɿ	―――
三人	mitarɿ	mittari
三つ	miːtzɿ	miːtʃi

語中の*mi	波照間	白保
網	aN	aN
鑿（のみ）	nuN	nuN
蚤	nuN	nuN
波	naN	naN
鋏	pḁtsaN	pḁtsaN
虱	ssaN ～ saN	ssaN ～ saN
鏡	kaŋgaN	kaŋgaN
雷	kannarɿ	kannari
火の神	pˢʐ̩n̥akaN ～ pʐ̩n̥akaN	pi̥nakaN

宮古島市下里方言や保良方言などの宮古諸方言では語頭の*mi も語末の*mi も母音 i が消失して成節的な子音 m になっている。語頭 mi の母音 i の消失は波照間白保方言にはみられない。また、波照間白保方言の語末の N も宮古諸方言のような成節的な子音 m であった可能性もあるが、そのような形跡はない。

mtsʐ（道）、msu（味噌）、mnu（蓑）、midzɿ（水）、miːtsɿ（三つ）、mitʃaːɿ（三人）、mim（耳）、num（蚤）、am（網）、nam（波）、ssam（虱）（下里方言）

2. 1. 3. 11　*ri

これまでの調査で語頭音節に*ri のあらわれる語例がなかった。波照間島方言では語中の*ri>rɿ の変化がおきている。白保方言では*ri>rɿ の変化もみられるが、ri であらわれ

る語例がすくなくない。ri があらわれる語例のうち、『八重山語彙』で確認できる語は、murï、kannarï のように ï（=ɿ）であらわれている。『八重山語彙』以降の変化なのか、発音のゆれなのか、用例をふやして検討したい。

流音に後続する ɿ は摩擦のよわいアロフォンである。宮古諸方言では r が消失して*ri>ɿ の変化がおきているが、波照間白保方言では r の消失はみられない。

語中の*ri	波照間	白保
蟻	arɿ	arɿ
針	pa̤ɿ	pa̤ri
椀（まかり）	ma:rɿ	magari
丘（もり）	murɿ	muri
鳥	tṳɿ	tṳrɯ
雷	kannarɿ	kannari
一人	pˢʐturɿ	pi̤turi
二人	ɸtarɿ ～ ɸṳtarɿ	ɸtari ～ ɸṳtari
三人	mitarɿ	mittari
四人	jutarɿ	juttari
小便（しばり）	sʐparɿ	sʐparɿ
陰嚢（ふぐり）	ɸu:rɿ	ɸu:ri
実（なり[25]）	na:rɿ	na:rɿ
鱗（いりけ）	irigi	irigi
左	pi̤nari	pi̤tari
のこぎり	nugɿrɿ	nugiri

2. 1. 3. 12　*wi

これまでの調査で語頭の*wi の語例がえられていないし、語中の*wi の語例も 1 例だけである。

語中の*wi	波照間	白保
地震（なゐ）	nʲe:	nʲe:

2. 1. 4　*u の狭母音化

*n、*b、*m、*j、*r と結合した*u は、円唇の奥舌狭母音 u であらわれる。*s、*ts、*dz と結合した*u は、舌先母音 ɿ であらわれる。*k、*p と結合した*u は、u であらわれるが、母音が消失してあらわれることもある。

狭母音化をひきおこしたつよい呼気流は、*u、および、*u と結合する先行子音、あるいは*u に後続する子音の調音上の特徴に影響をあたえている。*u が*p、*k と結合するときは、子音を摩擦音化させ、*b、*g と結合するときは、その子音を摩擦音化

25 他の琉球語諸方言などの語例との比較から*nari を祖形と考えた。

させたあとで、破裂音化させたり、接近音に変化させたりしている。*s、*ts、*dz と結合すると、舌先摩擦音、舌先破擦音との同化によって舌先母音に変化している。*u は、結合する子音の韻質によって、自らは調音上の特徴にめだった変化をひきおこしていないが、先行・後続の子音に影響をあたえているようにみえる。宮古諸方言にみられるような*u>v の変化がおきていた可能性もかんがえられる。

2.1.4.1 *u

語頭の*u	波照間	白保
臼	usɿ	uʃi
腕	udʒi	udi
牛	usɿ	usɿ
馬	umaN	mma
瓜（胡瓜）	urɿN	uruN
上唇	————	oːsʲpa
天気	ɷːsʲkɿ ～ ɷːskɿ	oʃi̥ki

白保方言の oːsʲpa（上唇）、koŋgi（桑の木）、波照間島方言のʃi̥tsɿgotsɿ（七月）、pḁtsɿgotsɿ（八月）、および、首里方言ʔwaːtʃitʃi（『沖縄語辞典』）、宮古島市下里方言 ʊaːtsɿkɿ などの語形から、波照間島方言 ɷːsʲkɿ（天気）、白保方言の oʃi̥ki（天気）、祖形を*uwatsuki とかんがえる。

語中の*u	波照間	白保
麹（かうじ）	goːdzɿ	koːdzɿ
豚の餌箱[26]	toːɲi	toːɲi
芭蕉（ばせう）	basaː	basaː
石臼	iʃoːʃi	iʃiuʃi
碾き臼	————	pi̥kiuʃi

語中の u は、波照間島方言 goːdzɿ（麹）、白保方言 koːdzɿ（麹）、および、toːɲi（田舟（たうね））では先行母音と相互同化し、波照間島方言、白保方言 basaː（芭蕉）では語末音脱落によって消失している。

2.1.4.2 *ku

語頭の*ku は、一部に ku あるいは gu のあらわれる語例があるが、おおくは規則的に摩擦音化して ɸu あるいは ɸ であらわれる。後続の母音は消失しているか、無声音化した u̥ であらわれるが、唇のまるめがよわまって ɷ̥であらわれることもある。波照間島方言の agobɿ（あくび）、ɸu̥koN（ふくぎ）の語中の音節が*ku であったと想定されるにもかかわらず、

26 語源について仲宗根政善（1983）は「田舟」としている。奄美大和浜方言 t‘oːnï、今帰仁与那嶺方言 t‘oːni、宮古島保良方言 tauni などから祖形を*taune と考えた。

母音がoであらわれていることから、ホモロジーとして祖方言にあったuが、分岐後にoに変化したとかんがえたい。同様に*oに由来する母音がoであらわれている語例も、*o>uの変化ののちに、oに変化したのではないかとかんがえる。ただし、uがoに変化した要因は特定できていない。

波照間白保方言では成節的な子音は発達しておらず、ɸを成節的な子音とみなくてよい。音韻論的には、ɸɸのようにɸが連続するときは促音として、それ以外は、母音uをおぎなう。

語中の*kuは、一部にɸに変化しているものもあるが、おおくはkuであらわれる。

語頭の*ku	波照間	白保
釘	ɸuN	ɸuN
黒	ɸɸu	ɸɸu
倉	ɸɸa	kura
雲	ɸumoN	ɸumoN
口	ɸutsɻ	ɸutʃi
糞	ɸutsu	ɸutsu
草	ɸutsa	ɸutsa
櫛	ɸutsɻ	ɸutʃi
クジラ	gudzɻra	gudzɻra
9月	kuŋgotsɻ	kuŋgatʃi

語中の*ku	波照間	白保
枕	maɸɸa	maɸɸa
海草	inɸutsa	inɸutsa
脈	mjagu	mjaku、(meku方言研)
6月	rukugotsɻ	rukugwatʃi
百	pja:gɷ	pja:gu
二百	nipja:gu	――――
あくび	agobɻ	akubɻ
肉	ɲiku	ɲiku
肺（ふく[27]）	ɸuku	ɸuku
フクギ（福木）	ɸukoN	ɸukuN

2.1.4.3　*gu

語中の*gu	波照間	白保
台所	to:ra	to:ra
陰嚢（ふぐり）	ɸu:rɻ	ɸu:ri

27 他の琉球語諸方言、九州方言などの語例との比較から*pukuを祖形と考えた。

ɸuːrɿ（陰嚢(ふぐり)）が沖縄那覇市楚辺方言などの ɸugui と同系語であったとすれば、あるいは、その祖形を*puguri とみるなら、宮古諸方言におきたような*gu>v>ʋ の変化のあとに、さらに u になって先行音節に吸収されたのではないかとかんがえられる。しかし、語例がすくないので、語例をふやして検討したい。

2.1.4.4 *su

波照間島方言、白保方言のいずれも*s と結合する u は ɿ に変化している。奥舌母音*u の舌先母音 ɿ への変化は、狭母音化ではない。舌先母音が歯茎前舌と硬口蓋でのせばめを特徴とし、歯茎摩擦音 s と調音位置がちかいので、*su>*s ɿ の変化は s との同化とみたほうがよいであろう。

*su>sɿ の変化の例外となる、波照間島方言、白保方言のʃi̥n̥i（脛）、白保方言の naʃi̥pi（茄子）は後続音節の母音 i の影響で i になったもので、遠隔逆行同化の例である。

語頭の*su	波照間	白保
巣	sɿː	sɿː
煤	sʲsʲ ～ sʲsɿ ～ ssɿ	sʲsʲ ～ sʲsɿ ～ ssɿ
裾	ssu	ssuː
唇（すば）	sʲpa ～ spa	sʲpa ～ spa
脛	ʃi̥n̥i	ʃi̥n̥i
すだれ	――――	ʃi̥tari

語中の*su	波照間	白保
茄子	nasʲpi～naspi	naʃi̥pi
カラス	garasɿ	garasɿ
囲炉裏	sʲk'a～sk'a	sk'a
臼	usɿ	uʃi
石臼	iʃoːʃi	iʃiuʃi
碾き臼	――――	pi̥kiuʃi

2.1.4.5 *tsu

波照間島方言、白保方言のいずれも*ts と結合する u は ɿ に変化している。この変化も s と結合する u のばあいと同じく、狭母音化ではなく、舌先母音が歯茎前舌と硬口蓋でのせばめを特徴とし、ts と調音位置がちかいので、*tsu>*tsɿ の変化も歯茎破擦音 ts との同化とみたほうがよいであろう。ただ、白保方言では語中で tʃi であらわれる例がおおい。

語頭で u と結合した ts は摩擦音 s に変化している。語中でも u と結合した ts が摩擦音 s に変化している例がみられるが、語頭のばあいに比較するとすくない。摩擦音化については、子音の摩擦音化の項を参照。

*su>sɿ の変化の例外となる、波照間島方言、白保方言の su̥pu（壷）、su̥ru（腱・つる）は、後続音節の母音 u の影響で u になったものであろう。波照間島方言、白保方言のʃi̥m̥i（爪）、ʃi̥pi（尻・つべ）、白保方言の naʃi̥pi（茄子）は後続音節の母音 i の影響で i になっ

たものであろう。いずれも遠隔逆行同化の例である。

語頭の*tsu	波照間	白保
綱	sʝn̥a ～ sn̥a	sʝn̥a ～ sn̥a
面	sʝr̥a ～ sr̥a	sʝr̥a ～ sr̥a
柄	sʝk'a ～ sk'a	sʝka ～ ska
月	sʝk'eN	skiN ～ sʝkiN
顔(つら)	sʝr̥a ～ sr̥a	sʝr̥a ～ sr̥a
角	ʃi̥n̥o	sʝm̥u
月経	sʝkɿnamuN	sʝkɿnumunu
ついたち	skɿdatsɿ ～ sʝkɿdatsɿ	ʃi̥kidatʃi̥ ～ ʃi̥kitatʃi̥
壷	su̥pu	su̥pu
腱（つる）	su̥r̥u	su̥r̥u
膝（つぶし）	su̥pusɿN	sʝpusɿN ～ su̥pusɿN
爪	ʃi̥m̥i	ʃi̥m̥i
尻（つべ）	ʃi̥pi	ʃi̥pi

語中の*tsu	波照間	白保
一月（ひとつき）	pˢʝtuskɿN ～ pˢʝtusʝkɿN	pi̥tuʃi̥ki ～ pʝtuʃi̥ki
二日	ɸsk'a ～ ɸu̥sʝk'a	ɸu̥tsʝk'a
五日	iska ～ isʝka	itska ～ itsʝka
天気	ɷ:sʝkɿ ～ ɷ:skɿ	oʃi̥ki
二十日	pask'a ～ pasʝk'a	patska ～ patsʝka
夏	natsʝ	natʃi
松	mattsɿ	mattsɿ
ひとつ	pstutzɿ	pi̥titʃi̥ ～ pʝtitʃi̥
ふたつ	ɸt'a:tzɿ ～ ɸu̥t'a:tzɿ	ɸt'a:tʃi ～ ɸu̥t'a:tʃi
三つ	mi:tzɿ	mi:tʃi
四つ	ju:tzɿ	ju:tʃi
五つ	issɿ	iʃʃi
六つ	n̥:tzɿ、mu:tzɿ	n:tʃi ～ n:tʃi̥
七つ	nanatzɿ	nanatʃi～nanatʃi̥
八つ	ja:tzɿ	ja:tʃi
九つ	hạk'onatsɿ	ku̥kunutʃi
ソテツ	sʝtutsɿ ～ stutsɿ	sʝtutsɿ ～ stutsɿ
杵（稲搗き？）	inasʝkɿ	inaʃi̥ki
１月	sagotsɿskɿN	ʃoŋgwatʃi̥ʃi̥ki
２月	niŋgotsɿ	niŋgatʃi
３月	saŋgotsɿ	saŋgatʃi
4月	sɿŋgotsɿ	ʃiŋgwatʃi

5月	guŋgotsɿ	guŋgatʃi
6月	rukugotsɿ	rukugwatʃi
7月	ʃ̥itsɿgotsɿ	ʃ̥itʃiŋgatʃi
8月	pḁtsɿgotsɿ	pḁtʃiŋgatʃi
9月	kuŋgotsɿ	kuŋgatʃi
10月	dzɿŋgotsɿ	dʒiŋgwatʃi、dʒuŋgwatʃi
11月	dʒu:itʃigotsɿ	dʒu:itʃiŋgwatʃi
12月	dʒu:niŋgotsɿ	dʒu:niŋgwatʃi
霜月	sʒm̥usʒkɿ	――――
おとつい[28]	bututzɿ	bututtʃi ～ bututʃi

『八重山語彙』では白保方言の月の呼び方は、「niŋgwatsï」「sïŋgwatsï」「saŋgwatsï」「guŋgwatsï」「rugugwatʃi」「ʃitsïgotsï」「pḁtsïŋgwatsï」「kuŋgwatsï」「dzïŋgwatsï」「dʒu:itsïŋgwats」のように記載され、語末の*tsu が「tsï」と記載されている。『八重山語彙』の調査された時期から狩俣が調査をした 2006 年のあいだに tsï（＝tsɿ）から tʃi に変化したとかんがえたほうがよいのか、調査をすすめて再検討したい。

波照間島方言 bututzɿ、白保方言 bututʃi の祖形を古代日本語の「をとつひ」とするか「をととひ」とするかはただちに断定できない。小林隆（2006）は、多良間村塩川方言 bututsï:、大浜町（現石垣市）平得方言 butuzï、白保方言 bututsï、竹富町波照間富嘉方言 bututsï の語例から先島方言（宮古八重山諸方言）の祖形を「をとつひ」としている。小浜島方言 butudi、与那国島方言 butudi は、「をとつひ」とみることができるかもしれない。しかし、八重山諸方言のなかには「をととひ」に由来する語形をもつ下位方言があるし、宮古諸方言も「をととひ」に由来する語形をもつ下位方言がおおい。

bududui	石垣市新川方言、大浜方言
bututui	石垣市真栄里方言
bututu	竹富島方言
bututuɿ	宮古島市下里方言、保良方言、伊良部島伊良部方言

多良間島をのぞく宮古諸方言の祖形は「をととひ」であろう。奄美沖縄諸方言でも那覇市楚辺方言 'utti:、今帰仁村与那嶺方言 'utt'i:、奄美市笠利佐仁方言 'uttï などがあって、これらの祖形は「をととひ」である。

波照間島方言 bututzɿ、白保方言 bututʃi の祖形を「をとつひ」とするなら、これらの地域の祖形が他の地域が「をととひ」系であるのとことなる理由を説明しなければならない。小林隆（2006）は「をとつひ」系の語形のみられるのは、周辺に古形が分布する周圏分布の例としている。八重山諸方言全体の詳細な分布を調査し、多良間島方言をふくめ八重山諸方言の下位区分、「をとつひ」系と「をととひ」系が混在する理由をあきらかにしなければならないだろう。

---

28 『八重山語彙』では波照間島も白保も bututʃi で記載されている。

2. 1. 4. 6　*dzu

これまでの調査では語頭に*dzu をふくむ単語をえられていない。語中の語例もすくないが、波照間島方言、白保方言のいずれも*dz と結合する u は ɿ に変化している。この変化も s、ts と結合する u と同じく、狭母音化ではなく、歯茎破擦音 dz との同化とみたほうがよいであろう。祖方言において「づ（*du あるいは*dzu）」と「ず（*dzu あるいは*zu）」を区別していたことをしめすものはみつかっていない。

語中の*dzu	波照間	白保
水（みづ）	midzɿ	midzɿ
しめ縄	ʃi̥midzɿna、ʃi̥pidzɿna	spidzɿna ～ ʃi̥pidzɿna
傷（きず）	kʲsɿ	ki̥tsɿ

2. 1. 4. 7　*nu

語頭の*nu	波照間	白保
布	nunu	nunu

語中の*nu		
着物（きぬ）	sʲn̥u	sʲn̥u
犬	iN	inu

2. 1. 4. 8　*pu

語頭の*pu は規則的に摩擦音化して ɸu あるいは ɸ であらわれる。後続の母音は消失しているか、無声音化した u̥であらわれるが、唇のまるめがよわまって ɯ̥であらわれることもある。波照間白保方言では成節的な子音は発達しておらず、ɸ を成節的な子音とみなくてよい。音韻論的には、ɸɸ のように ɸ が連続するときは促音として、それ以外は、母音 u をおぎなう。

語中の*pu は、祖方言の段階ですでに摩擦音化、有声音化、唇音退化していて、*p が消失して母音単独音節になっていて、先行音節の母音と融合している。

語頭の*pu	波照間	白保
筆	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi
二日	ɸsk'a ～ ɸɯ̥sʲk'a	ɸɯ̥tsʲk'a
ふたつ	ɸt'a:tzɿ ～ ɸu̥t'a:tzɿ	ɸt'a:tʃi ～ ɸu̥t'a:tʃi
二人	ɸtarɿ ～ ɸu̥tarɿ	ɸtari ～ ɸu̥tari
袋	ɸu̥kuru	ɸu̥kuru
肺（ふく）	ɸu̥ku	ɸu̥ku
フクギ（福木）	ɸu̥koN	ɸu̥kuN
蓋	ɸu̥t'a ～ ɸt'a	ɸu̥t'a
冬	ɸɸi	ɸɯ̥ju ～ ɸɯju

語中の*pu

今日（けふ）	kju:	kju:
昨日（きのふ）	sn̥u ～ sɟn̥u	sn̥u ～ sɟn̥u

2. 1. 4. 9　*bu

語中の*bu	波照間	白保
昆布	kubu	kubu
畦（あぶし）	abusɿ	abuʃi
膝（つぶし）	sʉ̥pusɿN	sɟpusɿN ～ sʉ̥pusɿN
油	aba	aba
コブシメ	kuʃi̥mi	kuʃi̥m̥i
蛇（ハブ）	pḁku	pḁku
煙	ki̥pusɟ ～ ki̥pus	ki̥puʃi ～ ki̥puʃiN
柄杓（さし？）	nibu	ni:bu:
冬瓜（しぶり）	sɟpurɿN	sʉ̥puruN

kuʃi̥mi（コブシメ）が沖縄那覇市楚辺方言などの kubuʃimi と同系であり、その祖形を*kobusime とみるなら、語中の*bu が宮古諸方言におきたような*bu>v>ʋ の変化のあとで、u になって先行音節に吸収されたのではないかとかんがえられる。

2. 1. 4. 10　*mu

語頭の*mu	波照間	白保
村	mura	mura
昔	mugasɿ	mugaʃi
六日	muiga	muiga、muika
麦	muN	muN
虫	musɿ	musɿ
筵	―――	mussu

語中の*mu

動物	iʃi̥m̥usɿ	isɟm̥us

2. 1. 4. 11　*ju

語頭の*ju	波照間	白保
湯	ju:	ju:
夕焼け	ju:jage	ju:jagi

語中の*ju

眉	maju	maju

2. 1. 4. 12　*ru

語中の例しかえられていないが、*r と結合した u は、u のままである。波照間島方言の kʷitsɿrɿ（煙管）、白保方言の kʷitʃiri（煙管）は先行音節の母音の影響をうけた遠隔進行同化によって ɿ、i になっているのであろう。波照間島方言の pˢʒsu（昼）では、先行音節の舌先母音 ɿ の隣接進行同化によって摩擦音化（r＞s）がみられる。su:ma:rɿ（汁椀）、su:magari（汁椀）などでも*siru（汁）＞ssu＞su:の変化がおきたのであろう。

語中の*ru	波照間	白保
煙管	kʷitsɿrɿ	kʷitʃiri
夜	juru	juru
猿	saru	saru
腱（つる）	suru	suru
昼	pˢʒsu	piru
ニンニク	piru	piru
汁鍋	ʃinabi	su:nabi
汁椀	su:ma:rɿ	su:magari
杓子（汁？）	supɛ:	――――

石垣市大川方言（『八重山語彙』）で sarï（猿）、sarï（申）、pï:rï（昼）、sïrï（汁）などのように ï（＝ɿ）になっているのとことなる。石垣市新川方言では、parï（針）、turï（鳥）、kannarï（雷）などのように r と結合した*i も ï に変化していて、*ru と*ri が rï に統合されている。その点も波照間島方言、白保方言は石垣市新川方言とことなる。

波照間島方言と白保方言の摩擦音化*ru＞ru、*ri＞rɿ は、子音*ts、*k と母音*u、*i の韻質が重要な要素の同化である。おなじ破擦音でも結合する母音が*i であった*tsi のばあい、語頭でも語中でも狭母音化して*tsɿ になっているが、摩擦音化はおきていない（「2. 1. 3. 4　*si」を参照）。

	波照間	大浜	下里
夜	juru	jurï	juɿ
柄	sʒka	tsʒka	tsʒka
口	ɸʷtsʒ	ɸʷtsɿ	ftsɿ
道	mitʃi	mitsɿ	mtsɿ
松	matsɿ	matsɿ	matsɿ

石垣市新川方言、同大浜方言、宮古島市下里方言、同保良方言では、語頭でも語中でも*tsu＞tsɿ、*tsi＞tsɿ の変化がおきていて、*tsu と*tsi が統合されている。

2. 1. 4. 13　*dʒu あるいは dʒipu（その他）

	波照間	白保
10月	dzɿŋgotsɿ	dʒiŋgwatʃi、dʒuŋgwatʃi

2.1.5　*a の狭母音化

狭母音化をひきおこしたつよい呼気流も a の韻質にはおおきな変化をもたらしていない。しかし、広母音*a でも無声子音に後続する位置で a を無声音化させている。無声音化した ḁはアロフォンとして存在するが、後続の有声子音を無声子音化させている。つよい呼気流をともなって発せられるときは、無声音化したアロフォン ḁであらわれるが、呼気流がよわまって発せられるときは無声音化しない a であらわれる。

波照間白保方言のつよい呼気流は、広母音 a と結合した有声子音を無声子音化させる。a と結合した無声子音が有声子音化してあらわれているし、a と結合した接近音 w も破裂音 b に変化（破裂音化）していている。これらの子音変化についてはそれぞれの子音変化の項でのべる。

2.1.5.1　*a

語頭の*a	波照間	白保
畦（あぶし）	abusɿ	abuʃi
油	aba	aba
踵（あど）	adu	adu
汗	aʃi	aʃi
痣	adzaN	adza
蟻	arɿ	arɿ
アダン	andaɲi	andaɲibura
あおさ（海草）	asa	asa
秋	aːsɿ	aki
朝焼け	asajage	asajagi
あした	atza	atza ～ attza
あさって[29]	asu̥t'u	aʃi̥t'u
網	aN	aN
青い（あを）	ohaN	ɷhaN

2.1.5.2　*ka

語頭の*ka	波照間	白保
風	kḁtʒi	kḁtʒi
笠	kḁtza	kḁtza
垣根	kḁtsɿ	kḁtʃi·

29 『八重山語彙』では波照間島方言、白保方言ともに asïtu。石垣市大浜方言 asï̥tu、平得 asï̥tu、真栄里 aʃi̥tu、黒島 aʃi̥t'u。与那国島方言 asatti。

綛（かせ）	kạ̥tʒi	kạ̥tʃi
舵（かじ）	kạ̥tsɿ	kạ̥tsɿ
紙（かび）	kạ̥pɿ	kạ̥pi
甕	kạ̥m̥i	kạ̥m̥i
亀	kạ̥m̥i	kạ̥m̥i
竈	kạ̥m̥a	kạ̥m̥a
雷	kannarɿ	kannari
蟹	kaN	kaN
バッタ[30]	kạ̥taN	kạ̥taN
カボチャ	kabutʃa	kabutʃa
皮（かは）	ka:	ka:
瓦(かはら)	ka:ra	ka:ra
包丁（刀）	kạ̥t'ana	kạ̥t'ana
おかず（糧物）	kạ̥tʃimunu	kạ̥tʃimunu
麹	go:dzɿ	ko:dzɿ
カラス	garasɿ	garasɿ
萱	gaja	gaja
かまぼこ	kạ̥m̥agu～kạ̥m̥agɷ	――――
影	kʲe:	kɛ:
井戸	kʲe:	ke:
屋敷	hạ̥ko˙	kạ̥ko˙
顎	hạ̥kotzɿ	kạ̥kotzɿ、hạ̥kotzɿ

語中の*ka	波照間	白保
屏風	na:ɸu̥k'u	nakaɸu̥ku ～ nagaɸu̥ku
二日	ɸsk'a ～ ɸɯ̥sʝk'a	ɸɯ̥tsʝk'a
三日	mɿ:ga	mikka
四日	ju:ga	ju: ga、jukka
五日	iska ～ isʝka	itska ～ itsʝka
六日	muiga	muiga、muika
七日	naŋga	naŋga、nanuka
八日	ja:ga	ja:ga、ja:ka
九日	hạ̥konaga	ku̥kunuka
二十日	pask'a ～ pasʝk'a	patska ～ patsʝka
柄	sʝk'a ～ sk'a	sʝka ～ ska
烏賊	iga	iga
中指	nagabɿ	nagabɿ、nagabi

30 語源は不明だが、宮古諸方言、石垣四箇方言などの kata と同系の単語で、祖形を kata と考えた。

夜中	junaga	junaga
庭（め中？）	mina·ga、mina·	minaga、menaga
昔	mugasɿ	mugaʃi
椀（まかり）	ma:rɿ	magari
肋骨[31]	jattabuɲi	jagatabuɲi
甍	iraga	inaga
火の神	pʝn̥akaN ～ pˢʝn̥akaN	pi̥nakaN
急須	dzok'a ～ dzoᵏk'a	tʃukk'a
椀（総称）	ma:rɿ	magari

2. 1. 5. 3　*ga

語頭の*ga	波照間	白保
鎌[32]	gakkja	gakke:

語中の*ga		
鏡	kaŋgaN	kaŋgaN
羽釜	paŋgama	paŋgama
ふけ（しらが）	ssaga	ssaga

2. 1. 5. 4　*sa

語頭の*sa	波照間	白保
酒	sa̰k'i	sa̰ki
猿	sa̰ru	sa̰ru
草履（さば）	sa̰paN	sa̰pa
皿	sara	sara
匙	sadʒi	sadʒi
柄杓	sa̰tʃi、nibu	sa̰tʃi、ni:bu:
３月	saŋgotsɿ	saŋgatʃi
竿（さを）	so:	so:

語中の*sa	波照間	白保
あおさ（海草）	asa	asa
笠	ka̰tza	ka̰tza
草	ɸṵtsa	ɸṵtsa
鋏	pa̰tsaN	pa̰tsaN
海草	inɸṵtsa	inɸṵtsa

31 語源は不明だが、宮古平良下里方言の jakatabuɲi と同系の単語と考えた。
32 語源は不明だが、宮良當壯（1930）は「鉤」としている。石垣市大川 gagï、竹富町黒島 gaki、同町新城 gakï、同町小浜 ga:kï、同町波照間 gakkja。以上『八重山語彙』より。

朝焼け	asajage	asajagi

2. 1. 5. 5　*dza

語中の*dza	波照間	白保
痣	adzaN	adza
小皿	kudzara	ku:dzara
大皿（おほ）	budzara	˩bu:dzara

2. 1. 5. 6　*ta

語頭の*ta	波照間	白保
蛸	tḁku	tḁku
煙草	tḁkabu	tḁpagu
竹	tḁki	tḁki
種	tḁɲi	tḁɲi
薪	ta:munu	tamunu
豚の餌箱	to:ɲi	to:ɲi

語中の*ta	波照間	白保
綿	bata	bata
腹（わた）	bata	bata～batta
股	mata	mata
肩	kḁta	kḁta
蓋	ɸu̥t'a～ɸt'a	ɸu̥t'a
包丁（刀）	kḁt'ana	kḁt'ana
ついたち	skʲdatsʲ ～ sʲkʲdatsʲ	ʃi̥kidatʃi̥、ʃi̥kitatʃi̥
ふたつ	ɸt'a:tzʲ ～ ɸu̥t'a:tzʲ	ɸt'a:tʃi ～ ɸu̥t'a:tʃi
二人	ɸtarʲ ～ ɸu̥tarʲ	ɸtari ～ ɸu̥tari
三人	mitarʲ	mittari
四人	jutarʲ	juttari
まな板	man˩tsa	manitsa

2. 1. 5. 7　*da

語中の*da	波照間	白保
枝（よだ）	juda	juda
太陽	ʃi̥ɲa	ʃi̥ta·
左	pi̥nari	pi̥tari
すだれ	――――	ʃi̥tari
肌	――――	pḁta

2. 1. 5. 8　*na

語頭の*na	波照間	白保
菜（野菜）	naN	naN
七つ	nanatzɿ	nanatʃi̥
鍋	nabi	nabi～naː bi
縄	naN	naN
屏風	naːɸu̥k'u	nakaɸu̥ku ～ nagaɸu̥ku
夏	natsʝ ～ nats	natʃi
七日	naŋga	naŋga、nanuka
茄子	nasʝpi ～ naspi	naʃi̥pi
実（なり）	naːrɿ	naːrɿ
きのこ[33]	naba	nabaN

語中の*na	波照間	白保
七つ	nanatzɿ	nanatʃi̥
花	pḁ̃n̥a ～ pḁn̥a	pḁ̃n̥a ～ pḁn̥a
綱	sʝn̥a ～ sn̥a	sn̥a ～ sʝn̥a～ʃi̥n̥a
夜中	junaga	junaga
雷	kannarɿ	kannari
包丁（刀）	kḁt'ana	kḁt'ana
庭（め中？）	mina·ga、mina·	minaga、menaga
炎（火花）	pˢʝbana	pibana
汁鍋	ʃinabi	suːnabi
杵（稲搗き？）	inasʝkɿ	inaʃi̥ki
まな板	mantsa	manitsa

2. 1. 5. 9　*pa

語頭の*pa	波照間	白保
刃	paN	paː、paN（方言研）
葉	paː	paː
橋	pḁtsɿ	pḁtʃi
鋏	pḁtsaN	pḁtsaN
蜂	paːtsɿ	padzɿ
二十日	pask'a ～ pasʝk'a	patska ～ patsʝka
８月	pḁtsɿgotsɿ	pḁtʃiŋgatʃi
羽	pḁn̥i	pḁn̥i
花	pḁ̃n̥a ～ pḁn̥a	pḁ̃n̥a ～ pḁn̥a
浜	pḁm̥a	pḁm̥a
鳩	pḁtoN	pḁtoN

33 語源は不明だが、他の方言との比較から naba を祖形と考えた。

柱	pa̤ra̤	pa̤ra̤
禿げ	pagi	pagi
蛇（ハブ）	pa̤ku	pa̤ku
羽釜	paŋgama	paŋgama
口広甕[34]	bando:	bando:
蝿	pʲe:	pʲe:
灰	pʲe:	pʲe:
畑	pi̤te:gi	pi̤tegi

語中の*pa	波照間	白保
皮（かは）	ka:	ka:
縄（なは）	naN	naN
瓦（かはら）	ka:ra	ka:ra

2. 1. 5. 10　*ba

語頭の*ba	波照間	白保
芭蕉	basa:	basa:

語中の*ba	波照間	白保
草履（さば）	sa̤paN	sa̤pa
小便（しばり）	sɻparɿ	sɻparɿ
きのこ	naba	nabaN
こば	kṳpa	kṳpa
炎（火花）	pˢɻbana	pibana

2. 1. 5. 11　*ma

語頭の*ma	波照間	白保
眉	maju	maju
股	mata	mata
睾丸（まら）	mara	mara
豆	mami	mami
松	mattsɿ	mattsɿ
米	mɛ	mɛ
椀（総称）	ma:rɿ	magari
まな板	mantsa	manitsa
今[35]	mana	mana

34 語源は不明。「飯胴」か。今帰仁与那嶺 p'aNdo:、首里 haNdu:ga:mi。八重山新城方言 pandu。
35 nama 波照間、竹富島、鳩間島、石垣大浜。manama 鳩間島。mana 波照間島、白保。以上『八重山語彙』から。

語中の*ma

山	jama	jama
わな	jama	jama
浜	pa̤ma̤	pa̤ma̤
竈	ka̤ma̤	ka̤ma̤
島	sɟma̤ ～ sma̤	sɟma̤ ～ sma̤
胡麻	gumaN	guma
羽釜	paŋgama	paŋgama
かまぼこ	ka̤ma̤gu～ka̤ma̤gɷ	――――

2. 1. 5. 12　*ja

語頭の*ja	波照間	白保
山	jama	jama
わな	jama	jama
戸（家戸）	jadu	jadu ～ jadɷ
八つ	ja:tzɿ	ja:tʃi
八日[36]	ja:ga	ja:ga、ja:ka
薬缶	jak'oN	jakk'oN
来年	ge:N	eN ～ jeN

語中の*ja	波照間	白保
萱	gaja	gaja
朝焼け	asajage	asajagi
夕焼け	ju:jage	ju:jagi

2. 1. 5. 12　*ra

語中の*ra	波照間	白保
村	mura	mura
睾丸（まら）	mara	mara
皿	sara	sara
小皿	kudzara	ku:dzara
大皿（おほ）	budzara	bu:dzara
藁	bara	bara
クジラ	gudzɿra	gudzɿra
カラス	garasɿ	garasɿ
油	aba	aba

36 古代日本語「やうか」。石垣市大川 jauka（『八重山語彙』）。宮古島市保良 jauka。宮古島市下里 jo:ka。

虱	ssaN ～ saN	ssaN ～ saN
ふけ（しらが）	ssaga	ssaga
手のひら	ʃiːnu pˢɻsa	ʃinu pˢɻsa
梢（そら）	sɻra	su̥ra
柱	pḁra	pḁra ～ pḁra
甍	iraga（甍）	inaga
瓦	kaːra	kaːra
台所	toːra	toːra
倉	ɸɸa	ku̥ra
大しゃもじ	ibira	ibira（飯箆？）

2. 1. 5. 13　*wa

語頭の*wa	波照間	白保
綿	bata	bata
藁	bara	bara
腹（わた）	bata	bata

語中の*wa	波照間	白保
茶碗	sabaN	tʃabaN
あおさ（海草）	asa	asa
上唇	oːspa ～ oːsɻpa	oːspa ～ oːsɻpa
天気	ɷːsɻkɿ ～ ɷːskɿ	oʃi̥ki

asa の祖形は何か。龍郷町瀬留方言 osa、与論町麦屋西区 osa、今帰仁村与那嶺方言 aːsa、宮古島下里方言 aːsa など、他の琉球語諸方言などの語例との比較から祖形を*awasa と考える。奄美方言では*nawa（縄）＞no、*kawa（皮）＞ko のように*awa＞o の変化があり、沖縄諸方言、宮古諸方言、八重山諸方言では、*nawa（縄）＞naː、*kawa（皮）＞kaːのように*awa＞aːの変化がおきているからである。

しかし、「砂糖」を瀬留方言で sato、与那嶺方言で sata、下里方言 sata などにみられるように、沖縄諸方言、宮古諸方言などで*au の u が消失して a になることがあるので、*awosa＞ausa＞asa の変化も想定できないわけではないが、語末以外での*au＞a の変化を確認できていない。

2. 1. 5. 14　*tʃa（その他）

	波照間	白保
カボチャ	kabutʃa	kabutʃa
茶碗	sabaN	tʃabaN

2. 1. 5. 15　*pja（その他）

	波照間	白保

百	pja:gɷ	pja:gu

2. 1. 5. 16　*gwa（その他）

波照間島方言のɲiŋgotsɿ（２月）、saŋgotsɿ（３月）などのgoはgwaから変化したものである[37]。いっぽう、白保方言のɲiŋgatʃi（２月）、saŋgatʃi（３月）のgaはgwaが唇音退化して直音化したものであろう。白保方言のばあい、『八重山語彙』には「niŋgwatsï」や「saŋgwatsï」のように記載されていて、1930年以降におきた変化であるとかんがえる。

	波照間	白保
１月	sagotsɿskɿN	ʃoŋgwatʃi̥i̥ki
２月	ɲiŋgotsɿ	ɲiŋgatʃi
３月	saŋgotsɿ	saŋgatʃi
４月	sɿŋgotsɿ	ʃiŋgwatʃi
５月	guŋgotsɿ	guŋgatʃi
６月	rukugotsɿ	rukugwatʃi
７月	ʃi̥tsɿgotsɿ	ʃi̥tʃiŋgatʃi
８月	pḁtsɿgotsɿ	pḁtʃiŋgatʃi
９月	kuŋgotsɿ	kuŋgatʃi
10月	dzɿŋgotsɿ	dʒiŋgwatʃi、dʒuŋgwatʃi
11月	dʒu:itʃigotsɿ	dʒu:itʃiŋgwatʃi
12月	dʒu:ɲiŋgotsɿ	dʒu:ɲiŋgwatʃi

2. 1. 5. 17　*kwa（その他）

	波照間	白保
桑の木	koŋgi	koŋgi

2. 2　波照間白保方言の母音の同化

波照間白保方言にみられる母音の同化には、隣接同化と遠隔同化がある。母音同士の隣接同化は、相互同化だけしか確認できていない。母音間の遠隔同化には進行同化と逆行同化がみられる。遠隔同化が他の八重山諸方言にもみられるかどうか確認していない。調査をすすめたい。

---

37 平山輝男（1988）に「/'wa/のほかにもCwaの拍が認められる。（略）これらの拍は、話者や発話状況によってはCoの拍と交替することがある」とあるが、語例はことなるが、同じ現象があらわれ、gwa＞goの変化が進行中なのであろう。koŋgi（桑の木）、o:sɻpa（上唇）もgwa＞goと平行的に*kwa＞ko、*uwa＞wa＞oの変化がおきているようだ。語例がすくなく、kwa＞ko、*uwa＞wa＞oが祖方言でおきた変化なのか平行変化なのか、確定できない。gwa＞goは分岐後の変化であろう。

2.2.1　隣接同化

波照間白保方言のばあい、隣接同化による母音変化には、相互同化のタイプだけがみられる。語中の*wo、*wi は、波照間白保祖方言の段階で唇音退化によって母音単独音節になっていて、先行音節の母音と同化している。同じく*pi、*pe、*pu も、波照間白保祖方言の段階で摩擦音化、有声音化、唇音退化して母音単独音節になっていて、先行音節と同化している。

2.2.1.1　二重母音*au の相互同化

	波照間	白保
麹（かうじ）	goːdzɽ	koːdzɽ
門（じゃう）	dzoː	dzoː
棒（ばう）	boː	boː
牛蒡（ごばう）	gumboN	gumboː
箒（はうき）	poːtsɽ	poːʃi̥
豚の餌箱	toːɲi	toːɲi

2.2.1.2　二重母音*ao の相互同化

竿（さを）	soː	soː
青い（あを）	ohaN	ɷhaN

二重母音*au、*ao は、いずれも相互同化によって oː に変化している。この同化は、波照間島方言、白保方言ともにみられる。*au>oː、*ao>oː は祖方言でおきた変化であろう。

2.2.1.3　二重母音*ae の相互同化

蝿（はへ）	pʲeː	pʲeː
南（はへ？）	pʲeː	pʲeː
前（まへ）	mʲeː	mʲeː

2.2.1.4　二重母音*ai の相互同化

灰（はひ）	pʲeː	pʲeː
盥（たらひ）	tare̥̥	tare̥̥
地震（なゐ）	nʲeː	nʲeː
米（まい）	mɛː	mɛː

波照間島方言、白保方言ともに二重母音*ae が相互同化によって eː に変化している。また、*ai が eː、あるいは、ɛː に変化している[38]。1988 年の波照間島方言の調査、1990 年

[38]平山輝男（1988）は、宮良當壯（1930）が前舌半広母音 ɛː でかきあらわした母音を中舌半広母音/ë/[ë]と記述している。

/këE/[kë:]卵。/pëE/[pë:]鍬。/mëE/[më:]鍬。

上村幸雄（1997）は、この母音について「標準語/ai/に対応する舌先的母音/ɜ̈ /が存在

の白保方言の調査ではe:とε:の区別は混同されながらも区別されていたが、2006年、2007年の調査では区別が失われ、e:であらわれた。e:とε:の区別がどのようにして生じたのか確定できない。上にあげた単語のほかにe:、ε:のあらわれるものには以下の単語があった。

	波照間	白保
影	kʲe:	ke:
井戸	kʲe:	ke:
鍬	pε:	kan̥apε:
卵	kε:	kε:

さらに『八重山語彙』にε:のあらわれる語例は、以下のものがある。e:のあらわれる語例はε:のあらわれるものよりおおくみられる。詳しくは『八重山語彙』を参照。

白保方言

bʲe:〜bε:（芽）、ʔjε:nuŋ（南京虫）、nε:（苗）、sε:nama（川蝦）、jasε:（椰子）

波照間島方言

sakasɻkε:（盃）、sε:（采）、mugε:（胃）、asɻkε:（シャコガイ？）、tε:（松明）、pε:ro（追剥）、pε:（汁用の杓子）、

これらの単語を他の八重山諸方言、あるいは、琉球語諸方言の対応語形と比較しながら検討しなければならない。

2.2.1.5　二重母音*oiの相互同化

樋（とひ）	tuɻ	tui

2.2.1.6　二重母音*euの相互同化

今日（けふ）	kju:	kju:
芭蕉（ばせう）	basa:	basa:
昨日（きのふ）	sn̥u 〜 sɻn̥u	sn̥u 〜 sɻn̥u

2.2.1.7　*uwaの同化

天気（上つき）	ω:sɻkɻ 〜 ω:skɻ	oʃ̥ki
上唇	――――	o:sɻpa 〜 o:spa

する。この母音もこれまで中舌的な音色ゆえに中舌母音と誤認されてきたが、観察すればわかるように、舌がたいそう前によった母音である」としている。わずかに中舌的な音色をともなう前舌の半広母音ε:を中舌の半広母音とみたのであろうか。もし、そうでなければ、宮良（1930）の前舌半広母音のε:が中舌半広母音ëに変化し、また、前舌半広母音ε:（上村（1997）のɜ̈）にもどったことになる。ɜ̈は上村の作字で、非IPAの記号。

2.2.2　遠隔同化

波照間白保方言のばあい、遠隔同化による母音変化には、遠隔進行同化と遠隔逆行同化のふたつのタイプがみられる。奄美諸方言にみられた遠隔相互同化はみられない。

2.2.2.1　遠隔進行同化

波照間白保方言の遠隔進行同化には、後続音節の母音 u によるもの、母音 i によるもののふたつがある。

2.2.2.1.1　u の同化

*si>sɿ、*ri>rɿ の変化がおおくの語例でみられるが、波照間島方言の pu̥su（星）、juru（夜）、白保方言の pu̥su（星）、uruN（瓜）、juru（夜）では先行音節の母音 u の影響をうけて後続音節の母音 ɿ が u に変化している。

	波照間	白保
星	pu̥su	pu̥tsu̥ ～ pu̥tsʮ
瓜類	urɿN	uruN
夜	juru	juru

2.2.2.1.2　i の同化

*tsi>tsɿ、*tsu>tsɿ、*ki>tsɿ の変化がおおくの語例でみられるが、波照間島方言の mitʃi（道）、iʃ̥im̥usɿ（動物・いきむし）、白保方言の mitʃi（道）、k̥itʃiri（煙管）では先行音節の母音 i の影響をうけて後続音節の母音 ɿ が u に変化している。

	波照間	白保
道	mitʃi	mitʃi
煙管	k̥itsɿrɿ	k̥itʃiri、k̥iʃ̥ɾɯ
動物	iʃ̥im̥usɿ	isʮm̥us

血管（血の道）は、dzɿnumitsɿ（波照間島）、dzɿ:numitsɿ（白保）なので、mitʃi（道）を単独で使用するばあいだけで進行同化がおきたのか、標準語の影響なのかをただちに断定できないが、他にも進行同化の語例がみられるので、ここにふくめた。

2.2.2.2　遠隔逆行同化

波照間白保方言の遠隔逆行同化には、後続音節の母音 a によるもの、母音 u によるもの、母音 i によるもののみっつがある。

2.2.2.2.1　a の同化

波照間島方言 pʮn̥akaN～pˢʮn̥akaN（火の神）、hak̥onaga（九日）、白保方言 pi̥nakaN（火の神）では後続母音 a の影響で先行母音 u が a に変化している。語頭音節の母音が a になっていることの理由は不明である。白保方言の ku̥ku˥nuka（九日）が周辺方言からの影響や借用などによるものでなければ、hak̥onaga（九日）の遠隔逆行同化は、白保方

言が分岐したあとに波照間島方言でおきた変化である。

	波照間	白保
火の神	pɻn̥akaN ～ pˢʝn̥akaN	pi̥nakaN
九日	ha̰konaga	ku̥kunuka

2.2.2.2.2　u の同化

*tsu>sɿ、*ki>sɿ の変化がおおくの語例でみられるが、波照間島方言、白保方言の su̥pu（壺）、su̥ˡ̥ru（腱）、su̥m̥u（肝）では後続音節の母音 u の影響をうけて先行音節の母音 ɿ が u に変化している。

	波照間	白保
壺	su̥pu	su̥pu
腱（つる）	su̥r̥u	su̥r̥u
肝	su̥m̥u～su̥m̥u～sɿm̥u	su̥m̥u

2.2.2.2.3　i の同化

*tsu>sɿ、*su>sɿ の変化がおおくの語例でみられるが、波照間島方言、白保方言のʃi̥m̥i（爪）、ʃi̥pi（尻）では後続音節の母音 i の影響をうけて先行音節の母音 ɿ が i に変化している。

	波照間	白保
爪	ʃi̥m̥i	ʃi̥m̥i
尻（つべ）	ʃi̥pi	ʃi̥pi
脛	ʃi̥n̥i	ʃi̥n̥i
髭	pi̥n̥i	pˢʝn̥e

遠隔進行同化の語例も、遠隔逆行同化の語例もすくない。語例をふやしたいが、条件がきびしくなかなかみつからないかもしれない。波照間島方言、白保方言の両方でおなじ単語におなじ遠隔同化のみられるものもあるが、どちらかの方言にだけみられる単語もある。この遠隔同化は、波照間白保祖方言でおきたものではなく、したがって語形が同じであってもホモロジーではなく、同じ音環境でおきた平行変化だとかんがえる。

3　波照間白保方言の子音変化

波照間白保方言の子音変化には、有声子音の無声音化、無声子音の有声音化、半母音*w の破裂音化、破裂音の摩擦音化、摩擦音の破擦音化*s>ts、破裂音の鼻音化*g>N、*d>n がある。

3.1 無声音化

有声子音の無声音化は、破裂音、破擦音、鼻音、流音でおきている。破裂音 b、d、g、破擦音 dʒ は、無声音化した結果、もとから存在した p、t、k、tʃと統合され、安定したフォネームとして波照間島方言、白保方言の音韻体系のなかに位置している。有声子音の無声音化は、語頭音節に無声子音があり、語頭音節の母音も無声音化するという音環境においておこる変化で、つよい呼気流による無声性が後続の母音、子音を無声音にかえる進行同化である。波照間白保方言の有声子音の無声音化は、一定の条件でおこるものであり、無声音化しない b、d、g も存在するので、破裂音、破擦音に有声／無声の音韻的対立がうしなわれるわけではない。

いっぽう、無声音化した鼻音 n̥、m̥、流音 r̥ は、つよい呼気流をともなって発音されるときには無声子音化したアロフォンで実現するが、呼気流のよわい発話においては容易に有声子音で実現される不安定なアロフォンであり、フォネームとしては m、n、r である。

3.1.1 *b>p

	波照間	白保
草履（さば）	sḁpaN	sḁpa
唇（すば）	sɟpa ～ spa	sɟpa ～ spa
煙草	tḁkabu	tḁpagu
壷	su̥pu	su̥pu
紙（かび）	kḁpɿ	kḁpi
煙	ki̥pusɟ	ki̥puʃi ～ ki̥puʃiN
尻（つべ）	ʃi̥pi	ʃi̥pi

3.1.2 *d>t

	波照間	白保
下駄（あしだ）	ast'a ～ asɟt'a	aʃidʒa
太陽（てだ）	ʃi̥na	ʃi̥ta·
左	pi̥nari	pi̥tari
すだれ	———	ʃi̥tari
肌	———	pḁta

3.1.3 *dʒ>tʃ

語中の有声破擦音の無声音化*dʒ>tʃ 、あるいは、*dz>ts も先行音節の子音が無声子音で母音も無声音化しているときにかぎられている。ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi（筆）では破裂音の破擦音化もおきている。

	波照間	白保
風	kḁtʒi	kḁtʒi

舵（かぢ）	kạ̥tsɿ	kạ̥tsɿ
去年（こぞ）	kṵ̥tsɿN	kṵ̥tsɿN
傷	kʝsɿ	kị̥tsɿ
筆	ɸtʃi ～ ɸṵ̥tʃi	ɸtʃi ～ ɸṵ̥tʃi

3. 1. 4　*m>m̥

語中の*m>m̥の変化は、先行音節の子音が無声子音のときにかぎられ、しかも先行音節の母音が無声音化していることも条件としてなければならない。語中の*mi は、母音が消失して撥音 N になっている。そこでは無声音化は観察できない。

	波照間	白保
浜	pạ̥m̥a	pạ̥m̥a
島	sʝm̥a ～ sm̥a	sʝm̥a ～ sm̥a
紐	pˢʝm̥u	pị̥m̥u
肝	sṵ̥m̥u～sṵ̥m̥u～sʝm̥u	sṵ̥m̥u
雲	ɸṵ̥moN	ɸṵ̥moN
紐	psm̥u	pị̥m̥u
霜月	sʝm̥usʝkɿ	―――――
爪	ʃị̥m̥i	ʃị̥m̥i ～ ʃị̥mi
亀	kạ̥m̥i	kạ̥m̥i
甕	kam̥i	kạ̥m̥i
動物	iʃị̥m̥usɿ	isʝm̥us

3. 1. 5　*n>n̥

語中の*n>n̥の変化は、先行音節の子音が無声子音のときにかぎられ、しかも先行音節の母音が無声音化していることも条件としてなければならない。語例は 1 例しかえられていないが、語中の*ni は、母音が消失して撥音 N になっている。そこでは無声音化は観察できない。語中*nu の語例も 1 例しかえられていない。用例をふやして検討したい。

	波照間	白保
花	pạ̥n̥a	pạ̥n̥a
綱	sʝn̥a ～ sn̥a	sn̥a～sʝn̥a～ʃị̥n̥a
昨日（きのふ）	sn̥u ～ sʝn̥u	sn̥u ～ sʝn̥u
角	ʃị̥n̥o	sʝm̥u
九つ	hạ̥k'onatsɿ	kṵ̥kunutʃi
九日	hạ̥konaga	kṵ̥kunuka
火の神	pʝn̥akaN ～ pˢʝn̥akaN	pị̥nakaN
骨	pṵ̥ŋ̥i	pṵ̥ŋ̥i
船	ɸṵ̥ŋ̥i	ɸṵ̥ŋ̥i ～ ɸŋ̥i
金属（かね）	kạ̥ŋ̥i	kạ̥ŋ̥i

種	taṇi	taṇi
羽	paṇi	paṇi
脛	ʃiṇi	ʃiṇi ～ ʃiṇi

3.1.6 *r>ṛ

	波照間	白保
柱	paṛa	paṛa
盥（たらい）	taṛe	taṛe
昼	pssu	piṛu
針	paṛɿ	paṛi·
頬（つら）	sɻṛa ～ sṛa	sɻṛa ～ sṛa

3.1.7 *g>ṇ

これまでの調査で語中 g の無声音化の確実な例はえられていない。波照間島方言 piṇi（髭）、白保方言 pˢɻṇe（髭）を*g の無声音化とみなすことも可能だが、このばあい、*g の鼻音化*g>ŋ（*ge>ŋi>ni）が先行していたとかんがえられる。無声音化が先行し、祖方言からあった*k と統合されていれば、*k も同様に鼻音化しているはずで、*k>ṇを想定しなければならないが、そのような例はまだみられない。

	波照間	白保
髭	piṇi	pˢɻṇe

*i と結合した*b、*dʒ が無声音化して*b>p、*dʒ>tʃの変化がおきているのとことなって、語中の*gi は、ɸuN（釘）、muN（麦）にみるように無声音化せず、撥音 N に変化していて、そこでも無声音化はみられない。語中の*mi が aN（網）、nuN（蚤）、naN（波）のように母音 i が消失して撥音 N に変化し無声音化していないのに似る。『八重山語彙』にみられる白保方言の ʃiṇi（杉）は、*gi>N の例外となるものだが、*gi>ni の例となるものである。ʃiṇi（杉）が八重山諸方言の祖語にさかのぼらず、あらたに流入した可能性があるが、piṇi(髭）とともに*gi>N の要因や変化過程をかんがえるうえで参考になる[39]。

同じく語中の*ga も下にしめした例にみるように N の語中音挿入（g の前鼻音化）があって、無声音化していない。波照間島方言、白保方言ともに、語中*g は無声音化するまえに、鼻音化、前鼻音化していたとみるのがよいかもしれない。この現象がどれくらい他の八重山諸方言にみられるのか現段階では不明だが、波照間白保方言の位置づけをみるうえで興味深い。

---

39 語例はすくないが piṇi（髭）から*ge>ŋe を想定でき、子音*g のみが鼻音化した*ŋi、*ŋu、*ŋa が先行した可能性もある。しかし、*ma、*me、*mu、*mo、*na、*ne、*no の m、n は無声音化するので、鼻音 m、n の無声音化とその時期（順序）とあわせて再検討しなければならない。

	波照間	白保
鏡	kaŋgaN	kaŋgaN
羽釜	paŋgama	paŋgama

3.1.8　*m>p

下にあげる波照間島方言、白保方言の*m>p の変化の語例ʃi̥p̥idzɭna（しめ縄）では、語頭の無声子音ʃの進行同化によって第２音節めの m も無声子音化するのだが、m の母音への出わたりの唇の開放に際して、p に似た破裂音が観察されることがある。鼻音 m の調音のために口蓋帆がさがって鼻腔への通路があけられることによって口腔内圧はたかまらないのが通常だが、口腔内に若干のこった呼気が m̥の両唇の開放にともなって聞こえる微弱な p として漏れきこえ、それがフォネームとして固定されたものとかんがえられる。しかし、得られた語例が１例だけなので、類例をさがして検討したい。

	波照間	白保
しめ縄	ʃi̥m̥idzɭna、ʃi̥p̥idzɭna	spidzɭna、ʃi̥p̥idzɭna

3.2　有声音化

波照間島方言、白保方言ともに、語中の無声破裂音*k、*p、*t の有声音化がおきている。ただし、*p、*t が有声音化している語例がすくなく、用例をふやして検討したい。

3.2.1　*k>g

波照間島方言、白保方言ともに、*a、*u、*o、*e と結合した語中の*k は、有声音化して g に変化している。先行音節の母音には*a、*u、*o、*i がみられる[40]。いっぽう、波照間島方言、白保方言ともに、*i と結合した*k は、語中にかぎらず語頭でも s、あるいは ts に変化していて、有声音化していない。

	波照間	白保
三日	mɭ:ga	mikka
四日	ju:ga	ju:ga、jukka
六日	muiga	muiga、muika
七日	naŋga	naŋga、nanuka
八日	ja:ga	ja:ga、ja:ka
九日	hḁkonaga	ku̥kunuka
烏賊	iga	iga

40 これまでの調査で先行音節に*e をもつ語例はなかった。さらに調査をすすめて確認したい。

夜中	junaga	junaga
庭（め中？）	mina·ga、mina·	minaga、menaga
昔	mugasɿ	mugaʃi
椀（まかり）	ma:rɿ	magari
肋骨[41]	jattabuɲi	jagatabuɲi
甍	iraga	inaga
屏風	na:ɸu̥k'u	nakaɸu̥ku ～ nagaɸu̥ku
朝焼け	asajage	asajagi
夕焼け	ju:jage	ju:jagi
池	igi	――――
鱗[42]	irigi	irigi
煙草	tḁkabu	tḁpagu
大根	de:guɲi	deguɲi
脈	mjagu	mjaku、(meku 方言研)
百	pja:gɷ	pja:gu
二百	nipja:gu	――――
あくび	agobɿ	akubɿ
煙草	tḁkabu[43]	tḁpagu
大根	de:guɲi	deguɲi

語中の*k は、先行音節の子音が無声子音で母音も無声音化している単語のばあい、有声音化していない。

	波照間	白保
柄	sɻk'a ～ sk'a	sɻka ～ ska
二日	ɸsk'a ～ ɸu̥sɻk'a	ɸu̥tsɻk'a
五日	iska ～ isɻka	itska ～ itsɻka
二十日	pask'a ～ pasɻk'a	patska ～ patsɻka
箱	pḁku	pḁku
蛸	tḁku	tḁku
酒	sḁk'i	sḁki
竹	tḁki	tḁki
肺（ふく[44]）	ɸu̥ku	ɸu̥ku
フクギ（福木）	ɸu̥koN	ɸu̥kuN

41 語源は不明だが、宮古島市保良方言の jakatabuɲi と同系の単語と考えた。
42 宮古島市下里方言 iɳki、保良方言 iɳki、伊良部方言 iɳki の語形との比較から祖形を*irike と考える。那覇市首里当蔵方言などで?iritʃi となって、第３音節めに tʃi があらわれるのは、第２音節めの母音 i の進行同化によって口蓋音化、破擦音化したためだとかんがえる。
43 波照間島方言の tḁkabu は、子音の音位転換がおきている。音位転換の項で詳述する。
44 他の琉球語諸方言、九州方言などの語例との比較から*puku を祖形と考えた。

6月	rukugotsɿ	rukugwatʃi
急須	dzok'a～dzo^{k}k'a	tʃukk'a
肉	ɲiku	ɲiku

語頭音節でも数は少ないが有声音化した破裂音の例をみることができる。この単語は、波照間白保方言にかぎらず、他の琉球語諸方言でも有声音化しているのをみることができる。波照間白保方言の語中の有声子音化とは別の要因をかんがえなければならないかもしれない。

	波照間	白保
カラス	garasɿ	garasɿ
萱	gaja	gaja
クジラ	gudzɿra	gudzɿra

3.2.2　*p>b

語頭の*p は、*u と結合するばあいをのぞいて p のままであるが、語中の*p は、はやい時期（宮古八重山祖方言の想定も可能）に摩擦音化して、有声音化、唇音退化して消失して、母音単独音節になっている。*p>ɸ>w>ϕ（ゼロ）。そのために、語中の*p の有声音化は語例がすくない。以下は語中語中の*p は有声音化されて保存されている数すくない例である。形容詞語幹、あるいは造語成分としての「大（おほ）」は、有声音化しない方言にあっても p、あるいは摩擦音化した h（ɸ）が保存されている。

	波照間	白保
大皿（おほ）	budzara	bu:dzara
親指（おほ指）	bu:bɿ	bu:bi

3.2.3　*t>d

	波照間	白保
ついたち	skɿdatsɿ ～ sʒkɿdatsɿ	ʃi̥kidatʃi̥、ʃi̥kitatʃi̥

3.2.4　*ts>dz

	波照間	白保
血	dzɿ:	dzɿ:
乳（ち）	dzɿ:	sɿ:
釣針（ち）	dzɿ:	――――
蜂	pa:tsɿ	padzɿ
血管（血の道）	dzɿnumitsɿ	dzɿ:numitsɿ

3.3.　破裂音化

波照間白保方言は、他の八重山諸方言、および宮古諸方言とおなじく、半母音 w の破裂音化がみられる。

	波照間	白保
綿	bata	bata
藁	bara	bara
斧（をの）	bunu	bu:nu
麻（を・苧）	bu:	bu:
おととい	bututzɿ	bututtʃi ～ bututʃi
桶（をけ）	uk'i	ukki

ただし、語中の*w は、破裂音化するまえに母音間で消失している。

	波照間	白保
茶碗	sabaN	tʃabaN
あおさ（海草）	asa	asa
上唇	o:spa ～ o:sʝpa	o:spa ～ o:sʝpa
天気	ω:sʝkɿ ～ ω:skɿ	oʃi̥ki
魚（いを）	ju:	ju:
十（とを）	tu:	tu:

日本語では語中の*pa も摩擦音化、有声音化して w になるが、波照間白保方言では語中の w は破裂音化するまえに唇音退化によって消失している。

	波照間	白保
皮（かは）	ka:	ka:
縄（なは）	naN	naN
瓦（かはら）	ka:ra	ka:ra

調査でえられた語例のなかで破裂音化した語中 w の例が 1 例だけあった。波照間島方言 sabaN（茶碗）、白保方言 tʃabaN（茶碗）は、語中*wa、*pa の唇音退化がおわったあとに借用され、その後に*w>b がおきたものとかんがえられる。

3.4 摩擦音化

波照間白保方言の子音の摩擦音化には、破裂音の摩擦音化 k>h、p>h、k>s、t>s、流音の摩擦音 ɸ への変化 r>ɸ、流音の摩擦音 s への変化*r>s がある。いずれの摩擦音化もそれがあらわれる条件に制限がある。

3.4.1　*k>h

*k>h の変化は、k に u が後続するときにおおくあらわれている。*ku>ɸu は、語頭では、いくつかの例外をのぞいて、規則的にあらわれている。いっぽう、語中では1例をのぞいて摩擦音化していない。また、語例はすくないが、語頭で広母音 a と結合した*k が摩擦音化した*ka>ha がみられる。

3.4.1.1　*ku>ɸu

*ku>ɸu は他の八重山諸方言、あるいは宮古諸方言と類似の変化である。ただし、宮古諸方言では唇歯摩擦音 f に変化し、しかも f は成節的な子音としてふるまう。波照間白保方言で ɸ が成節的な子音としてふるまっているとはいえない。加治工真市（1984）には波照間島方言と黒島方言の*ku が唇歯摩擦音 f であったことを記述している。くわしくは加治工（1984）を参照。

> ウ段音においてもカ行子音は音韻変化を起こしてハ行子音化する。その際、ハ行子音音は両唇音[F（=ɸ）]になる方言と、唇歯音[f]になる方言に分かれる。（略）（括弧内は狩俣の補い）
>
> [fu̥tʃiri]（薬）波、[fu̥ʃiru]（薬）黒

狩俣は、波照間島方言、白保方言で唇歯音 f を観察できなかったが、*ku>f(u)>ɸu の変化が進行しているのだろう。八重山諸方言にも*ku>f があったのだが、それが宮古八重山祖方言にホモロジーとして存在していたものが、個々の下位方言で両唇摩擦音に変化する方言がでてきたのかだろうか。あるいは宮古八重山諸方言で平行変化として進行したのだろうか。現段階では確定できない。波照間白保方言で成節的な子音が発達していないことを重視すれば、*ku の摩擦音化は平行変化であるのだが、調査対象地点をふやして検討したい。

語頭の*ku	波照間	白保
雲	ɸu̥moN	ɸu̥moN
口	ɸu̥tsɻ	ɸu̥tʃi ～ ɸu̥tsɻ
櫛	ɸu̥tsɿ	ɸu̥tʃi
釘	ɸuN	ɸuN
黒	ɸɸu	ɸɸu
糞	ɸu̥tsu	ɸu̥tsu
草	ɸu̥tsa	ɸu̥tsa
櫛	ɸu̥tsɿ	ɸu̥tʃi
倉	ɸɸa	ku̥ra
クジラ	gudzɻra	gudzɻra
9月	kuŋgotsɿ	kuŋgatʃi

語中の*ku

語中の*ku>ɸu は、2 例をのぞくと摩擦音化していない。宮古諸方言で jaf (厄)、maffa (枕)、ifsa (戦) のように語中でも摩擦音化しているのとことなる。宮古諸方言でも語中のばあいの語例をふやして、語中での摩擦音化がどの程度進行しているのか検討をすすめていく必要があるだろう。

	波照間	白保
枕	maɸɸa	maɸɸa
海草	inɸu̥tsa	inɸu̥tsa
脈	mjagu	mjaku、(meku 方言研)
6月	rukugotsɿ	rukugwatʃi
百	pja:gɷ	pja:gu
二百	nipja:gu	―――
あくび	agobɿ	akubɿ
肉	ɲiku	ɲiku
肺 (ふく[45])	ɸu̥ku	ɸu̥ku
フクギ (福木)	ɸu̥koN	ɸu̥kuN

3.4.1.2 *ka>ha

	波照間	白保
屋敷	hḁko·	kḁko·
顎	hḁkotzɿ	kḁkotzɿ、hḁkotzɿ

3.4.2 *p>h

*p>h の変化は、*p と*u が結合して音節を形成するときに限ってあらわれる変化で、*pu>ɸu である。*o、*e、*i、*a と結合した*p は、無声の両唇破裂音としての特徴をよく保存している。*pu>ɸu は、語頭では規則的にあらわれている。いっぽう、語中では、琉球語祖語、あるいは宮古八重山祖方言の段階で摩擦音化、有声音化、唇音退化によって消失し、母音 u の単独音節になっているとかんがえる。しかも、*pu に由来する語中の母音単独音節の u も先行母音と融合している。

*pu>ɸu も*ku>ɸu と同じく他の八重山諸方言、あるいは宮古諸方言と類似の変化である。*ku>ɸu のばあいと同じく*pu に由来する ɸu も f を経た形跡はなく、成節的な子音としてふるまっている様子もない。波照間白保方言をふくむ八重山諸方言の*pu>ɸu も宮古諸方言の*pu>f とはホモロジーではなく、平行変化である。

語頭の*pu	波照間	白保
筆	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃ i
二日	ɸsk'a～ɸɯ̥sʝk'a	ɸu̥tsʝk'a

45 他の琉球語諸方言、九州方言などの語例との比較から*puku を祖形と考えた。

ふたつ	ɸt'a:tzɿ ～ ɸu̥t'a:tzɿ	ɸt'a:tʃi ～ ɸu̥t'a:tʃi
袋	ɸu̥kuru	ɸu̥kuru
二人	ɸtarɿ ～ ɸu̥tarɿ	ɸtari ～ ɸu̥tari
肺（ふく）	ɸu̥ku	ɸu̥ku
フクギ（福木）	ɸu̥koN	ɸu̥kuN
蓋	ɸu̥t'a ～ ɸt'a	ɸu̥t'a
冬	ɸɸi	ɸ ju ～ ɸɯju

語中の*pu	波照間	白保
今日（けふ）	kju:	kju:

3.4.3 *r>ɸ

波照間島方言、白保方言のいずれにおいても、*u に後続する位置の*r が摩擦音化して無声の両唇摩擦音*ɸ に変化している。

	波照間	白保
黒	ɸɸu	ɸɸu
倉	ɸɸa	ku̥r̥a
枕	maɸɸa	maɸɸa

3.4.4 *r>s

波照間島方言、白保方言のいずれにおいても、*i に後続する位置の*r が摩擦音化して無声摩擦音*s に変化している。

	波照間	白保
手のひら	ʃi:nu pˢ̥ɿsa	ʃinu pˢ̥ɿsa
虱	ssaN ～ saN	ssaN ～ saN
ふけ（しらが）	ssaga	ssaga
昼	pssu	pi̥r̥u
筵	————	mussu
汁鍋	ʃinabi	su:nabi
汁椀	su:ma:rɿ	su:magari

3.4.5 *ku>ɸu、*pu>ɸu

ɸu̥tsɿ（櫛）、ɸu̥moN（雲）、ɸu̥kuru（袋）などの単語をみると、*ku>ɸu、*pu>ɸu の変化がおきていて、*k が ɸ に、*p が ɸ に変化しているようにみえる。*k>ɸ、*p>ɸ の変化は、先述したように*a、*e、*o、*i と結合した*k、*p のばあいにはおきておらず、奥舌母音 u と結合したときにだけみられるものである。

*p>ɸ の変化は、宮古諸方言の*p>f とおなじ、あるいは、類似の変化であろう。波照間白保方言の当該の音声の現在の韻質は両唇摩擦音で、沖縄方言などの*p>ɸ>h に似る

が、*p>ϕ が奥舌狭母音 u と結合したときにかぎっておこっていること、*k>ϕ の変化と平行しておきていることなどをかんがえると、波照間白保方言の*k>ϕ、*p>ϕ の変化は、宮古諸方言の*k>f、*p>f と類似の変化なのである。また、宮古諸方言には、有声破裂音の摩擦音化*gu>v、*bu>v が*k>f、*p>f と平行しておきている。波照間白保方言の無声破裂音 k、p の摩擦音化がどのような変化であったのかをみるために、ϕϕa、maϕϕa や aba（油）、wa:（おまえ）、to:ra（別棟の台所）などの単語などといっしょに、宮古諸方言の単語と比較しながらみてみる。

	波照間	白保	石垣市登野城	平良下里
倉	ϕϕa	kurḁ	ϕϕa	ffa
枕	maϕϕa	maϕϕa	maϕϕa	maffa
油	aba	aba	aba	avva
台所	to:ra	to:ra	to:ra	to:vva
おまえ	da:	da:	wa:	vva
道具	doŋgu	doŋgu	doŋgu	do:v
ハブ	pḁku	pḁku	pabu	pav
昆布	kubu	kubu	kubu	kuv

3.4.5.1　宮古諸方言の*ku、*pu、*bu、*gu

宮古島市平良下里方言では、*u をふくむ*gu、*bu も、はじめに*u が v に変化したのち、先行子音*b、*g が v の影響をうけた逆行同化によって、調音位置と調音方法の変更があって、b は両唇破裂音から唇歯摩擦音 v へ、g は軟口蓋破裂音から唇歯摩擦音 v へと変更が生じ、*u に由来する v と融合して、*gu>v、*bu>v の変化が完了している。v に後続する*r、*w、*j は、v の完全進行同化によって調音位置、調音方法の変更が生じて摩擦音化し、v に変化している。

*ura>vra>vva（おまえ）

*gu >gv >v　　*bu >bv >v　　*bura >vra >vva
do:v（道具）、kuv（昆布）、avva（油）、kuvva（脹脛・こぶらに対応）

宮古島市下里方言の*ku>f も、*pu> f も、*u から変化した v が先行子音*p、*k を調音位置、調音方法に変化を生じさせて唇歯の摩擦音 f に変化させ、逆に、*p、*k は、後続の v を無声音化させて相互同化がおこり、f に融合したとかんがえる。*ku、*pu に由来する f は、後続する*r、*w、*j を完全進行同化させて無声摩擦音 f に変化させる。

*ku>kv>f　　*pu>pv>f　　*kura>kvra>fra>ffa

3.4.5.2　波照間白保方言の*ku、*pu、*bu、*gu

語例は、すくないが、語中の*gu は消失している。*gu の消失がどのような過程を経た

か直ちに断定はできないが、ɸu:rɿ（陰嚢（ふぐり））の祖形を*puguri と考え、to:ra（台所）の祖形を*togura と考えるなら、宮古諸方言の*gu>v>ʋ ような摩擦音化を想定することは可能であろう。語例をふやして再検討しなければならない。

語中の*gu	波照間	白保
台所	to:ra	to:ra
陰嚢（ふぐり）	ɸu:rɿ	ɸu:ri

kuʃi̥mi（コブシメ）が沖縄那覇市楚辺方言などの kubuʃimi と同系の語形であったとすれば、あるいは、その祖形を*kobusime とみるなら、宮古諸方言におきたような*bu>v>ʋ の変化のあとに、さらに u になって先行音節に吸収されたのではないかとかんがえられる。しかし、kuʃi̥mi（コブシメ）以外に*bu が摩擦音化した確実な語例がみつかっていない。

aba（油）も宮古島市下里方言の avva のような摩擦音化をへたとかんがえることも可能である。しかし、下里方言の kuv（昆布）、avs（畦）、pav（蛇）、kivs（煙）にくらべると、波照間白保方言では語中の bu を保存している語がおおい。

語中の*bu	波照間	白保
油	aba	aba
コブシメ	kuʃi̥mi	kuʃi̥mi̥
昆布	kubu	kubu
畦（あぶし）	abusɿ	abuʃi
蛇（ハブ）	pḁku	pḁku
煙	ki̥pusɿ ～ ki̥pus	ki̥puʃi ～ ki̥puʃiN

宮古島市下里方言や保良方言の*ku>f、*pu>f と*bu>v、*gu>v は、平行的におきている変化だが、波照間島方言、白保方言では*pu>ɸu、*ku>ɸu の摩擦音化はみられるものの、*bu、*gu の摩擦音化は明確な形ではみとめられない。*ku、*pu、*bu、*gu の摩擦音化は、宮古八重山諸方言の祖方言にさかのぼらない変化である。

3.4.6 *k>s

*i と結合した語頭の*k は摩擦音化して、*ki>sɿ の変化がおきている。先行音節が無声音化しない語中の音環境では*ki>sɿ の変化がおきているが、先行音節が無声音化する音環境では*k が破擦音化した*ki>tsɿ の変化と、破擦音化も摩擦音化もない母音変化のみがみられる。

波照間白保方言をふくむ宮古八重山諸方言において*k と結合した*i は、舌先母音ɿ に変化し、*kɿ は口蓋音化しない。沖縄中南部諸方言にみられる*ki>tʃi の破擦音化や金武方言にみられる*ki>ʃi の摩擦音化が後続母音 i の逆行同化によるものであり、波照間白保方言の*ki>sɿ、あるいは語中での*ki>tsɿ などの摩擦音化や破擦音化とは、まったくことなる変化で、波照間白保方言の軟口蓋破裂音 k の摩擦音化、破擦音化と、沖縄中南部諸方

言や金武方言のそれとは収斂変化であろうとかんがえる。

おそらく、宮古諸方言に典型的にみられる舌先母音化が波照間島方言でも白保方言でもおきていたとかんがえる。舌先母音が無声破裂音に後続するとき、*pi>pˢɿ、*ki>kˢɿ のように摩擦音をともなって（あるいは摩擦音そのものとして）あらわれる。そのうちの kˢɿ は、破裂音につづいて摩擦音があらわれる破擦音に類似する調音であるが、舌先母音 ˢɿ の影響によって調音点が前舌歯茎の位置に移動して t となり破擦音化したとのではないかとかんがえる。さらに呼気流のつよい語頭で摩擦音化したのではないだろうか。語中の無声音化した音節に後続する位置で破擦音 ts であられたり、破裂音 k であらわれたりするのは無声音化した音節で呼気流がおおく消費されるからではないだろうか。

語頭	波照間	白保
着物（きぬ）	sʝn̥u	sʝn̥u
肝	sʷm̥u～sɯm̥u～sʝm̥u	sʷm̥u
昨日	sn̥u ～ sʝn̥u	sn̥u ～ sʝn̥u
傷[46]	kʝsɿ	kʝsɿ
煙管[47]	kʲtsɿrɿ	kʲtʃiri

語中	波照間	白保
手斧（よき）	jusʝ	jukki
息	is ～ isʝ	is ～ isʝ
動物	iʃm̥usɿ	isʝm̥us
神酒[48]	mɿsɿ	――――
垣	kat̥sɿ	kat̥ʃi˙
箒（ほうき）	poːtsʝ ～ poːtsɿ	poːʃ̥i ～ poːʃi
月	sʝk'eN	skiN ～ sʝkiN
ついたち	skɿdatsɿ ～ sʝkɿdatsɿ	ʃ̥kidatʃ̥i、ʃ̥kitatʃ̥i
碾き臼	――――	pʲkiuʃi
杵（稲搗き？）	inasʝkɿ	inaʃ̥ki
霜月	sʝm̥usʝkɿ	――――
鱗（いりき）	irigi	irigi
天気	ωːsʝkɿ ～ ωːskɿ	oʃ̥ki
一月（ひとつき）	pˢʝtuskɿN	pʲtuʃ̥ki ～ pʝtuʃ̥ki

3.4.7　*ts>s

*u と結合した語頭の破裂音*ts の摩擦音 s への変化がみられる。語中でも*u と結合し、

---

46 *ki が破擦音化してに tʃi になる首里方言、今帰仁方言にあって、「傷」は、kizi（『沖縄語辞典』）、kizi（『沖縄今帰仁方言辞典』）のように破擦音化していない。

47 波照間島方言、白保方言で「煙管」が ki であらわれるのは、ki>s の変化後に流入した語である可能性がある。

48 「神酒 misï」（『石垣方言辞典』）。

かつ、母音が無声音化したアロフォンであらわれる音環境の*ts が摩擦音 s に変化している。語末で*u と結合した*ts は摩擦音化していない[49]。この破擦音の摩擦音化は、波照間島方言と白保方言に共通にみられ、ホモロジーであろうとかんがえる。また、語例はすくないが、*i と結合した破裂音*ts の摩擦音 s への変化はみられない[50]。

語頭の*tsu	波照間	白保
綱	sɟn̥a ～ sn̥a	sɟn̥a ～ sn̥a
面	sɟr̥a ～ sr̥a	sɟr̥a ～ sr̥a
柄	sɟk'a ～ sk'a	sɟka ～ ska
月	sɟk'eN	skiN ～ sɟkiN
顔(つら)	sɟr̥a ～ sr̥a	sɟr̥a ～ sr̥a
角	ʃi̥n̥o	sɟm̥u
月経	sɟkɿnamuN	sɟkɿnumunu
ついたち	skɿdatsɿ ～ sɟkɿdatsɿ	ʃi̥kidatʃi̥ ～ ʃi̥kitatʃi̥
壷	su̥pu	su̥pu
腱（つる）	su̥r̥u	su̥r̥u
膝（つぶし）	su̥pusɿN	sɟpusɿN ～ su̥pusɿN
爪	ʃi̥m̥i	ʃi̥m̥i
尻（つべ）	ʃi̥pi	ʃi̥pi

語中の*tsu	波照間	白保
一月（ひとつき）	pˢɟtuskɿN ～ pˢɟtusɟkɿN	pi̥tuʃi̥ki ～ pɟtuʃi̥ki
二日	ɸsk'a ～ ɸu̥sɟk'a	ɸu̥tsɟk'a
五日	iska ～ isɟka	itska ～ itsɟka
天気	ɷːsɟkɿ ～ ɷːskɿ	oʃi̥ki
二十日	pask'a ～ pasɟk'a	patsɟka
五つ	issɿ	iʃʃi
杵（稲搗き？）	inasɟkɿ	inaʃi̥ki
霜月	sɟm̥usɟkɿ	―――

*a と結合した語頭の破裂音*tʃの摩擦音 s への変化がみられる。語中では摩擦音化していない。しかし、語頭、語中の例いずれも１例のみで、しかもあたらしくとりいれられた単語である。調査を続行して用例をふやし、検討したい。

	波照間	白保
茶碗	sabaN	tʃabaN
カボチャ	kabutʃa	kabutʃa

49 母音変化の「2. 1. 4. 5　*tsu」を参照。。
50 母音変化の「2. 1. 3. 5　*tsi」を参照。。

3.4.8　*t>s

現在までの調査でえられた語例は2例だけだが、語頭で*eと結合した破裂音*tの摩擦音sへの変化がみられる。語中で*eと結合した*tは、破擦音tʃに変化している。「3.5.3. *t>tʃ」の項を参照。

	波照間	白保
手	ʃiː	ʃiː
太陽（てだ）	ʃi̥na	ʃi̥ta˞

3.5　破擦音化

波照間白保方言において、無声摩擦音*sの破擦音tsへの変化と、無声軟口蓋破裂音*kの破擦音tsへの変化がみられる。*kは、破擦音化して破擦音tsになり、さらに摩擦音化してsに変化している。

3.5.1　*s>ts

波照間白保方言において、無声摩擦音*sの破擦音tsへの変化は、語中ではみられるが、語頭ではみられない。破擦音化している*sは、*oと結合したのが1例、*eと結合したのが2例、*iと結合したのが6例、*aと結合したのが4例である。*uと結合した*sの破擦音化した例はえられていない。破擦音化した語中の例はいずれも先行音節の子音が無声子音で母音も無声音化したものばかりである。先行音節の母音が無声音化しない語ではsは破擦音化していない。「2.1.1.4　*so」「2.1.2.4　*se」「2.1.3.4　*si」「2.1.4.4　*su」「2.1.5.4　*sa」の項も参照。

語中の無声音化した母音に後続する位置でのみ破擦音化しているところに破擦音化の要因をさぐる鍵があるのだろう。周辺方言の例もふくめて検討したい。

		波照間	白保
*so	糞	ɸu̥tsu	ɸu̥tsu
*se	綛（かせ）	kḁtʒi	kḁtʃi
	煙管	ki̥tsɿrɿ	ki̥tʃiri
*si	橋	pḁtsɿ	pḁtʃi
	腰	ku̥tsɿ	ku̥tsɿ
	年	tu̥tsɿ	tu̥ʃi
	櫛	ɸu̥tsɿ	ɸu̥tʃi
	箸	masɿ	pḁtʃi
	柄杓	sḁtʃi	sḁtʃi
*sa	笠	kḁtza	kḁtza

草	ɸu̥tsa	ɸu̥tsa
鋏	pḁtsaN	pḁtsaN
海草	inɸu̥tsa	inɸu̥tsa

3.5.2 *d>dʒ

破擦音化 d>dʒ は、波照間島方言の語例が２例だけである。なお、ɸtʃi～ɸu̥tʃi（筆）の例は、破擦音化したあとに無声音化したのか、無声音化したあとに破擦音化したのか、確定できない。さらに調査をすすめ、語例をふやして検討したい。

	波照間	白保
筆	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi	ɸtʃi ～ ɸu̥tʃi
腕	udʒi	udi

3.5.3 *t>tʃ

現在までの調査でえられた破擦音化*t>tʃのみられる語例は、2例だけである。いずれも*e と結合した語中の*t の例である。語頭で*e と結合した*t は、摩擦音 s に変化している。さらに調査をすすめ、語例をふやして検討したい。

	波照間	白保
おかず（糧物）	kḁtʃimunu	kḁtʃimunu
顔（おもて）	mutʃi	mutʃi

3.6 鼻音化

波照間白保方言のばあい、*gi>N、*g>n、*d>n などの有声破裂音*g、*d が鼻音化している語例がわずかながらみられる。

3.6.1 *g>n

これまでの調査でえられた語例はすくないが、波照間島方言でも白保方言でも*i と結合した*g は鼻音化し、*gi>*ŋi の変化がおき、さらに語末の母音 i が脱落して撥音 N に変化している。*gi>*ŋi は、先行音節に無声子音 p、k があってもおきていて、無声音化に先行している。*ŋi>N は、*mi>N と平行的におきた語末の音脱落であろう。撥音 N は無声音化しにくいようである。

3.6. 1. 2 *gi>N

	波照間	白保
釘	ɸuN	ɸuN
麦	muN	muN
足	paN	paN

フクギ	ɸu̥koN	ɸu̥kuN

3.6. 1. 2 *g>n̥

髭（ひげ）の語形をみると、軟口蓋破裂音 g の鼻音 n への変化がさきにあって、そののちに語頭の無声子音 p の進行同化による鼻音の無声音化がおきたことがわかる。無声音化がさきにおきていれば、pi̥ki のような語形ができていて、鼻音化（有声音化をふくむ）はおきにくかったとかんがえられるからである。

	波照間	白保
ひげ	pi̥n̥i	pˢɭn̥e

3.6. 1. 2 *g>ŋg

語中の有声の軟口蓋破裂音 g の前に撥音 N（ŋ）の音挿入がみられる。これは、厳密には鼻音化とはいえないが、鼻音化したのち前鼻音化して、撥音 N の音挿入にいたった可能性もあるので、ここにあげておく。

	波照間	白保
鏡	kaŋgaN	kaŋgaN
羽釜	paŋgama	paŋgama
道具	doŋgu	doŋgu

3.6.2 *d>n

波照間島方言のʃi̥n̥a（太陽）、pi̥nari（左）、tsɲn̥iN（孵る）の語例では有声破裂音*d の鼻音 n への変化がみられる。*t>n の変化の確実な例がみられないことから、*d>n が先行し、そののちに n が無声音化したとかんがえる。白保方言では*d>n がみられないので、波照間島方言と白保方言が分岐したあと、波照間島方言でのみ*d>n がおきたであろうとかんがえる。

白保方言では同じ単語の*d が無声音化して t であらわれているが、有声破裂音 d の無声音化は、波照間白保祖方言にさかのぼるホモロジーではなく、分岐後の平行変化であろう。ホモロジーであれば、波照間島方言でもʃi̥ta や pi̥tari などの語形であらわれるはずだからである。

	波照間	白保
太陽[51]（てだ）	ʃi̥n̥a	ʃi̥ta˙
左	pi̥nari	pi̥tari
孵でる[52]	tsɲn̥iN	――――

51 「太陽」の語源は、「天道てんだう」であろう。

52 石垣市大浜方言 sïdiN（孵る）（『八重山語彙』）、宮古島市下里方言 sdiɳ。いずれも卵が孵化したり、蛇や蚕、蟹などが脱皮したりすることをあらわす動詞。

涙	nanda	nada

3.6.3　*r>n あるいは*n>r

語源が不明だが、波照間島方言と白保方言とを対比させたとき、つぎの語では*r>n、あるいは、*n>r の変化がおきているようにみえる。

	波照間	白保
鉈	jamakaṇasɿ	jamaŋgaraʃi

3.6.4　鼻音化のまとめ

同じ鼻音化でも*g>n と*d>n とでは様相がことなっている。*g>n は波照間島方言でも、白保方言でもおきているが、*d>n は波照間島方言でしかみられない。*gi>N は、語末の母音 i の脱落のまえに*g>n の鼻音化が先行している。鼻音化は、無声音化に先行していて、*gi>*ŋi>N は、波照間白保祖方言にさかのぼるホモロジーである可能性がたかい。

*gi>*ŋi>N は結合する母音が前舌狭母音 i であり、*g>n と*d>n は先行音節の母音が前舌狭母音 i、あるいは、奥舌狭母音 u である。全体として鼻音化の現象をしめす語例がすくないので断定はできないが、せまい声道を特徴とする狭母音をながれるつよい呼気流が鼻音化の要因ではないかとおもわれる。波照間白保方言のおおくの音韻変化の要因になっている空気力学的な力が発生拘束となって、鼻音化もひきおこしたのではないだろうか。鼻音化の要因の再検討は今後の重要な課題である。

4　その他の音韻変化

波照間島、白保方言ともにつぎの語末音挿入と語中音挿入がある。

4.1　語末音挿入

語末に成節的な鼻音（撥音）が挿入される語末音挿入が波照間島方言、白保方言ともにみられる。語末 N 音挿入は、波照間白保方言の特徴としてしられるが、以下にしめすように、波照間島方言、白保方言ともに共通にみられる単語と、波照間島方言だけにみられる単語とがある。数はすくないが白保方言の単語にだけ語末の N 音挿入のみられる単語もある。

語末に N 音挿入のみられる単語の分布から、N 音挿入は、波照間白保祖方言の段階に発生したものではなく、波照間島方言と白保方言とが分岐したあとに、それぞれの方言で発生した平行変化ではないかとかんがえる。N 音挿入をひきおこす要因を共通に有したまま分岐し、分岐後に発現したのであろう。

4.1.1　波照間白保方言共通の語末 N 音挿入

	波照間	白保
バッタ	kạ̥taN	kạ̥taN
鳩	pạ̥toN	pạ̥toN
歯	paN	paN
刃	paN	pa:、paN（方言研）
去年（こぞ）	kụ̥tsɿN	kụ̥tsɿN
肛門	ʃi̥pinumiN	ʃi̥pinumiN
粟	aN	aN
菜（野菜）	naN	naN
縄	naN	naN
瓜（胡瓜）	urɿN	uruN
膝（つぶし）	sụ̥pusɿN	sɻpusɿN ～ sụ̥pusɿN
アダン	andaɲi	andaɲibura

4.1.2　波照間島方言の語末 N 音挿入

	波照間	白保
草履（さば）	sạ̥paN	sạ̥pa
痣	adzaN	adza
屁	piN	pi:
貝（蜷）	minaN	mi:na
根	ɲiN	ɲi:
蝸牛	stamiN～sɻtamiN	stami～sɻtami
胡麻	gumaN	guma
牛蒡	gumboN	gumbo:
さつまいも	agaN	aŋgaN、aŋga
樋（ひ）	bɿN	bi:
馬	umaN	mma
柄	ɿ:N	i:

4.1.3　白保方言の語末 N 音挿入

	波照間	白保
額（ひたい）	ɸụ̥te	ɸụ̥teN
きのこ	naba	nabaN
再来年	mi:tʃi	mi:tʃiN

4.2　語中 N 音挿入

	波照間	白保
鏡	kaŋgaN	kaŋgaN
羽釜	paŋgama	paŋgama
道具	doŋgu	doŋgu

鉈	jamakạ̥nasɿ	jamaŋgaraʃi
小刀[53]	ʃigu	ʃiŋguː
2月	niŋgotsɿ	niŋgatʃi
4月	sɿŋgotsɿ	ʃiŋgwatʃi
5月	guŋgotsɿ	guŋgatʃi
7月	ʃi̥tsɿgotsɿ	ʃi̥tʃiŋgatʃi
8月	pạ̥tsɿgotsɿ	pạ̥tʃiŋgatʃi
9月	kuŋgotsɿ	kuŋgatʃi
10月	dzɿŋgotsɿ	dʒiŋgwatʃi、dʒuŋgwatʃi
11月	dʒuːitʃigotsɿ	dʒuːitʃiŋgwatʃi
12月	dʒuːniŋgotsɿ	dʒuːniŋgwatʃi
涙	nanda	nada
アダン	andaɲi	andaɲibura
蚊	gandzaN	gadzaN

4.3 語中促音挿入

	波照間	白保
三人	mitarɿ	mittari

4.4 音位転換

子音の音位転換 metathesis が波照間島方言に1例、母音の音位転換が波照間島方言に1例、白保方言に1例みられた。

4.4.1 子音の音位転換

つぎは、語中の b と k がいれかわった子音の音位転換である。この変化は波照間島方言にみられ、白保方言にはみられない。白保方言の tạ̥paˀgu が周辺方言からの影響でなければ、波照間島方言と白保方言が分岐したあとの変化なのであろう。この単語は、外国語由来の単語で、日本祖語、あるいは琉球語祖語にまではさかのぼらない。

	波照間	白保
煙草	tạ̥kabu	tạ̥pagu

4.4.2 母音の音位転換

つぎは、語頭音節の母音 o と語中の a がいれかわった母音のみの音位転換の例である。波照間島方言の sagotsɿskɿN（1月）は、ʃogwatsɿskɿN（正月月（しょうがつつき））の語頭音節の母音 o と第2音節の母音 a が音位転換した語形であろう。白保方言の tamuto（トマト）は、あた

53 語源は不明。『石垣方言辞典』ʃiŋgu、『沖縄語辞典』ʃiːgu。座間味村阿嘉方言ʃeːgu。

らしくはいってきた外来語で、この音位転換も、波照間島方言と白保方言が分岐したあとの変化なのであろう。あるいは、波照間島方言にも同様の音位転換がおきたが、標準語形として tomato がはいっているのかもしれない。周辺方言で調査して確認したい。

	波照間	白保
1月	sagotsɿskɿN	ʃoŋgwatʃi̥i̥ki
トマト	tomato	tamuto

4.5　その他の音韻変化

つぎの単語では、語中の b が k に変化している。語頭音節の無声子音と無声音化した母音による進行同化がはたらいているとかんがえられるので、*b>g を想定すべきかもしれないし、無声音化が先におきていたとするなら、*p>k を想定することもできるだろう。

	波照間	白保
蛇（はぶ）	pḁku	pḁku

この変化と類似した変化が沖縄島北部の伊江島方言でみられる。

kuni（船）、kuda（札）、kubui（獣の陰嚢・ふぐり）、kukunjuN（含む）

*p>k の変化は、唇でつくる破裂音*p が奥舌母音 u とむすびついたとき、軟口蓋破裂音 k に変化するもので、pu を発音するときの口のかまえ（声道の形）と ku を発音するときの口のかまえ（声道の形）が似ていること、したがって、声の聞こえが似てくることによっておこった変化であろう。伊江島方言で*p>k の変化がみられ、*b>g の変化がみられないことから、b の無声音化が先行していた可能性がたかいとかんがえる。波照間島方言や白保方言だけでなく他の八重山諸方言でも類例をふやせるよう調査をすすめたい。

第３章　竹富町波照間島方言と石垣市白保方言の形容詞

1　はじめに

音韻研究にくらべて文法研究は容易ではない。音韻研究にくらべると、文法研究は、おおきくおくれている。話者の高齢化と減少、方言を有しない若年層の増加、標準語の圧倒的な影響のもとで琉球語諸方言はおおきく変容し、消滅の危機に瀕している。そんななかで、方言継承のための重要なやくわりをになう文法を総合的かつ詳細に記述し、研究をすすめていくことは急を要する。文法的な意味をふくめた文法の比較研究が容易ではなかったとしても、早急におこなわなければならない重要な課題である。琉球語諸方言の文法的な側面の比較研究は、音韻的な特徴による比較研究にあつみをもたせ、琉球語の多様性を再確認し、琉球語研究の可能性をひろげるだろう。

1771 年の波照間島からの移住は、波照間島方言と白保方言が分岐する契機となったが、白保方言は石垣島の周囲の方言の影響がすくなく、波照間島方言の特徴をよく保存している。両方言の音韻的な特徴には類似する点がおおく、両方言を波照間白保方言と総称することが可能である。

第 2 章でくわしくみたように、波照間島方言と白保方言は、おおくの点で一致するものの、ふたつの方言のあいだでことなるものもみられた。分岐後の変化のなかには、一方が周辺方言や標準語からの影響によって変化したものもある。同じ形式を有していて、分岐前の形式を保持するホモロジーのようにみえたもののなかには、分岐した後も発生拘束となる音韻変化の要因を共通にもつことによって、ふたつの方言で同じ変化がおきた平行変化によるものもあった。

文法的な形、文法的な機能や意味などのなかにも、音韻変化にみられたような平行変化や収斂変化、発生拘束や構造的拘束で説明されるような現象がみられるのだろうか。波照間島方言と白保方言の文法の詳細な比較研究をおこなうことは、音韻変化の比較と同様に興味ぶかいことをおしえてくれるにちがいないし、琉球語諸方言の比較歴史文法論は、おおくのことをおしえてくれるにちがいない。

本研究報告では、波照間島方言と白保方言の波照間島方言と白保方言の形容詞の代表形をとりあげ、ふたつの方言の比較をとおしてえられた新たなかんがえをのべる。

2　波照間白保方言の形容詞語尾

琉球語諸方言を形容詞の形のつくりかたの面からみると、奄美沖縄諸方言全体に「サ連用形」に存在動詞「aN（有る）」がくみあわさってできた「サアリ型活用」の形容詞がみられ、八重山石垣市新川方言や登野城方言も[takasa:N]（高い）、[asasa:N]（浅い）などのように「サアリ型活用」の形容詞がみられる。いっぽう、おおくの宮古諸方言では[takakaɲ]（高い）、[asakaɲ]（浅い）のように「ク連用形」に存在動詞「aɲ（有る）」がくみあわさってできた「クアリ型活用」の形容詞がみられる。クアリ型形容詞は宮古諸島と

奄美大島の北の笠利町と龍郷町の北半分に分布している。笠利町と龍郷町はクアリ型とサアリ型が並存している。宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する多良間島方言は、takasja:l（高い）などのようにサアリ型形容詞であり、形容詞活用に関していえば、石垣市新川方言などと同じである。

宮古八重山諸方言を宮古諸方言と八重山諸方言に区分する特徴のひとつとして、形容詞の活用のしかたのちがいがあげられると考え、かりまた（2000）は、多良間島方言を八重山諸方言の下位方言とみるのがよいのではないかという提案をした。また、かりまた（2003）では、八重山諸方言のなかでも波照間島方言や黒島方言には、takahaN（高い）、skahaN（近い）などの語形がみられ、その語尾にあらわれる haN がクアリ型形容詞のものであるとかんがえられること、これまで八重山諸方言の形容詞はサアリ型であろうとみられていたが、波照間島方言、黒島方言以外の地域の方言の形容詞の調査と研究がいそがれることをのべた。そして、クアリ型形容詞とサアリ型形容詞の分布は、八重山諸方言の下位区分の再検討だけでなく、宮古八重山諸全体の下位区分を再検討するうえで重要な要素であることも指摘した。

本章では、波照間島方言と白保方言の形容詞の代表形を比較する。波照間島方言と白保方言の比較の結果、クアリ型形容詞とサアリ型形容詞の分布が八重山諸方言を下位区分するうえで、重要な要素のひとつになりうることを再確認した。

2.1　語尾-haN と語尾-saN

波照間白保方言の形容詞の語尾は、基本的には、amahaN（甘い）、mahaN（おいしい）、dzahaN（にがい）などにみるような、-haN である。この語尾には、amaha:N、dza:ha:N などのように-ha:N であらわれることもしばしばである。これは音声的なアロフォンとみてよいものであろう（資料では amaha(:)N dza(:)ha:N のように表記することがある。）波照間島方言の形容詞語尾にあらわれる-h-は、帯気音もやわらかく、声門の有声摩擦音 ɦ に聞こえることがしばしばあった。なお、両方言の単語の語尾がともに-ha(:)N になるのは、76 語のうち、39 語である。どちらか一方の方言で-ha(:)N になるのは 13 語である。

白保方言の kut̬ʃi̥saN（苦しい）、ʃi:saN（すっぱい）、ba:ʃaN（はずかしい）、sa̠ni̥saN（たのしい）、nuguriʃaN（おそろしい）、ko:saN（くすぐったい）、pi:ʃaN（さむい）、pirigiʃaN（つめたい）、busaN（おおきい）、mitʃi̥saN（ふとい）、tu:saN（とおい）、mi:saN（あたらしい）の 12 語が語尾に-saN があらわれている。いっぽう、波照間島方言の darusa:N（だるい）、na:guriʃa:N（かなしい）、hago:saN（くすぐったい）、nurusa:N（ぬるい）の 4 語が語尾に-saN があらわれている。語尾に-saN をもつ単語は、白保方言の方がおおく、白保方言と波照間島方言で語尾に-saN をもつ単語で重なるものはみつかっていない。

語尾にあらわれる-haN と-saN の関係をどうかんがえたらよいであろう。

平山輝男編著（1988）で波照間島方言の形容詞についての記述がある。そこで波照間島方言の形容詞は、サアリ系（＝サアリ型形容詞）に分類されている。以下に引用するように語幹末に h があらわれることを指摘している。また、takahaN（高い）の代表的な活用形が例文とともにあげられていて、その活用形にも h があらわれている。しかし、サアリ系の形容詞に h があらわれることの理由についてはふれられていない。

波照間方言の形容詞はｓ語幹（サアリ系）によって構成されているが、不変化部末尾音は-h-で実現する。

沖縄島方言にみられるように s>h の変化がおきて、石垣市市街地（四箇）方言のような-sa:N 語尾が-haN 語尾に変化したのであろうか。一部の saN 語尾は変化しないでのこったものなのであろうか。

2.2　語尾-haN と語尾-saN の比較

語尾に-haN をもつ語と-saN をもつ語とを比較してみると、つぎのことがわかる。語尾に haN をもつ語は、語幹部分に音声的なちがいをもつものがみられるものの、両方言で共通する単語がおおい。

	波照間	白保
あらい	arahaN	arahaN
こまかい	kum̥ahaN	kum̥ahaN
ひらたい	pˢɭsahaN	pˢɭsahaN
ひろい	pˢɭsohaN	pˢɭsohaN
せまい	spahaN	spahaN
たかい	takahaN	takahaN
かわいそう	sɭm̥uitahaN	sɭm̥uttahaN～sɭm̥utahaN
かわいい	sndarahaN	ʃindarahaN
くらい	ɸu̥ha(:)N	ɸɸahaN

いっぽう、語尾に-saN をもつ語は、白保方言で 12 語、波照間方言で 4 語とすくなく、しかも両方言に重なる語はみられない。

以上のことから、語尾に haN をもつ語は、ふたつの方言が分岐する以前から共通にもっていたもので、語尾に saN をもつ語は、ふたつの方言が分岐したのちにそれぞれの方言で独自に獲得したものであることが想定できる。語尾の saN は h>s の音韻変化がおきてできたものなのであろうか。

2.3　語尾-sahaN

形容詞語尾の-haN と-saN をかんがえるうえで重要なてがかりをあたえてくれるものとして、白保方言、波照間島方言ともに、pantasahaN（忙しい）、sabissaha(:)N（さみしい）などのような、語尾にあらわれる-saha(:)N がある。これらの語尾の分布状況をみてみよう。

両方言ともに、語尾に-saha(:)N をもつ語はすくなく、つぎの２語である。pantasahaN（いそがしい）が「繁多な、煩多な」に由来しているとすれば、日本語のナ形容詞に対応するあたらしい語である。ナ形容詞をサアリ活用の形容詞でとりこんだ方言から、さらに、haN 語尾にしてとりこんだものであろう。

	波照間	白保
むずかしい	musɹ̥k'assahaN	mutsɹ̥kasahaN
いそがしい	pa̤ntasahaN	pantasahaN

白保方言の形容詞が語尾に-haN をもつ語があらわれ、波照間島方言の形容詞が語尾に-saha(:)N をもつ語があらわれるばあい、両方言間に単語の重なりはほとんどみられない。その逆のばあい、すなわち、白保方言の形容詞が語尾に-saha(:)N をもつ語があらわれ、波照間島方言が語尾に-haN をもつ語があらわれるのは1例もない。

	波照間	白保
ほそい	batsɹ̥sahaN〜batssahaN	gumahaN
ふるい	ɸurusahaN	ɸu:haN
あたたかい	no:saha:N	nogohaN
だるい[1]	ɷ:maha:N、darusa:N	o:mahaN
さびしい	sɹ̥karaha(:)N、sabissaha(:)N	sɹ̥karahaN

白保方言の形容詞の語尾に-saN、あるいは、-ʃaN があらわれる語は、波照間島方言では-saha(:)N になってあらわれている。このばあいも、逆の現象、すなわち、白保方言の形容詞の語尾に-saha(:)N をもつ語があらわれ、波照間島方言の形容詞の語尾に-saN、あるいは、-ʃaN がもつ語があらわれるのは1例もない。

	波照間	白保
さむい	pi:ʃaha:N	pi:ʃaN
おかしい	ba:ʃaha(:)N	ba:ʃaN
くるしい	ku̥ᵗsɹ̥saha:N	ku̥tʃi̥saN
まずい	ɲi:ʃahaN	ɲi:ʃaN
たのしい	sa̤ɲiʃaha(:)N	sa̤ɲisaN
ふとい	mitsɹ̥sahaN	mitʃisaN
おおきい	busahaN	busaN
とおい	tusahãN	tu:saN
あたらしい	mi:sahaN	mi:saN

2.4 その他

白保方言の attsahaN（厚い、暑い）も、atsɹ̥sahaN から変化したもののようにもみえるが、波照間島方言の atsɹ̥haN〜atsahaN（厚い）とくらべると、前後の母音の遠隔同化によって tsɹ̥ が tsa となり、さらに、natʃi〜nattʃi（夏）の語例にみるように破擦音のまえ

---

1 波照間島方言にみられる saN 語尾形容詞に darusaN（だるい）があるが、波照間方言、白保方言のいずれにも o:mahaN（だるい）、ɷ:maha:N があるので、darusaN は、saN 語尾形容詞をもつ方言から波照間島方言に借用されたものではないかとかんがえられる。

に促音が発生して attsahaN となった可能性を想定できる。

同様に、波照間島方言、白保方言の両方にみられる jassahaN（安い）、jassahaN（易しい）も遠隔同化による母音変化の可能性がある。jasɹ̥haN>jasahaN>jassahaN。

	波照間	白保
厚い	atsɹ̥haN～atsahaN	attsahaN
暑い	attsaha:N	attsahaN
安い	jassahaN	jassahaN
易しい	jassaha(:)N	jassahaN
おもしろい	mussaha(:)N	mussahaN

mussahaN（おもしろい）も umuʃiruhaN>umusɹ̥ɾ̥uhaN>umussuhaN>umussahaN のような遠隔同化による母音変化によってできたもので、語尾が-haN であった可能性も想定できる。

語尾に-tsaN のあらわれる単語のうち、つぎのものは、先行音節の進行同化によって h>s の変化がおきた可能性はないか。もしそうだとすれば、本来は haN 語尾の系列にふくまれるものであろう。

jaᵗssaN～jaᵗsɹ̥saN（やせた）、jatʃi pi̥tu（やせた人）

3 まとめ

以上のことから以下の結論がえられる。

(1)波照間方言、白保方言のふたつの方言に共通する形容詞の語尾は、-haN であり、波照間白保祖方言の形容詞語尾は-haN であった。

(2)白保方言の形容詞には語尾に-saN をもつ語があるが、これは周辺方言の影響でとりいれられたものである。このばあい、隣接する宮良集落の方言の形容詞の語尾が haN であることから、影響をあたえたのは宮良方言ではなく、石垣島の中心地である四箇方言の可能性がたかい。

(3)波照間島方言の形容詞の語尾にみられる-sahaN も、白保方言の-saN 語尾の形容詞とおなじく周辺方言の影響によって発生したものであろう。波照間島方言は、白保方言のように、saN 語尾の形容詞をそのままうけいれるのではなく、-saN 語尾の形容詞の sa 連用形を語幹としてとりいれ、語尾は波照間島方言の語尾-haN にした結果、語尾が-sahaN となったのではないかとかんがえられる。

琉球方言研究クラブ（1964）、同（1963）にみるように、沖縄島の諸方言には saN 語尾の形容詞と saN 語尾の形容詞がある。そこでは、形容詞の語尾にかぎって s>h の変化がおきているので、波照間島方言、白保方言ともに形容詞語尾にかぎって s>h の変化がお

きているようにもみえる。しかし、波照間島方言と白保方言の共通の形容詞語尾·haN は、宮古諸方言にみられるクアリ型形容詞の語尾である可能性がある。すなわち、第 2 章の摩擦音化でみたように、波照間島方言、白保方言いずれも s>h の変化はみられないが、k>h の変化がわずかながらみられるからである。

	波照間	白保
屋敷	hạko·	kạko·
顎	hạkotzɿ	kạkotzɿ、hạkotzɿ
九日	hạkonaga	kụkunuka

クアリ型形容詞の語尾·haN をもっていた波照間島方言、白保方言がサアリ型形容詞の方言の単語をそのままうけいれたのが saN 語尾の形容詞であり、サ連用形を語幹としてうけいれたのが sahaN 語尾の形容詞だとみると、波照間島方言と白保方言は、分岐後にそれぞれで sahaN 語尾の形容詞がうまれたことになる。この現象は、平行変化ということになるのであろうか。そして、この平行変化の要因はどこにあるのだろう。

琉球語諸方言の文法にかんする記述をすすめ、比較研究をおこなって、文法における「平行変化」「収斂変化」はどのようにおこるのか、そしてそれぞれをどう定義すべきか、検討したい。

参考文献

Thomas Pellarrd（2007）「宮古諸方言の音韻の問題点」第2回琉球語ワークショップ研究発表原稿、京都大学 2007.9.9.

石垣繁（1971）「八重山白保方言の研究－その音韻、アクセントについて－」『沖縄文化』36号、

石垣繁（1971）「八重山白保方言の研究－その音韻、アクセントについて－」『沖縄文化』37号、

上村幸雄（1997）「音声研究と琉球語学（『ことばの科学８』むぎ書房

上村幸雄(1993a)「方言音声の収集と研究の意義」『国際化する日本語－話し言葉の科学と音声教育－』クバプロ

上村幸雄（1993b）「音声の現状－琉球列島」『国際化する日本語－話し言葉の科学と音声教育－』クバプロ

上村幸雄（1992）「琉球列島の言語(総説)」『言語学大辞典第4巻世界言語編下-2』三省堂

上村幸雄（1990）『日本語の母音、子音、音節　調音運動の実験音声学的研究』国立国語研究所報告100、共著

上村幸雄（1989）「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか(2)－琉球列島諸方言のばあい－」『沖縄言語研究センター資料№79』沖縄言語研究センター

上村幸雄（1978）『X線映画資料による母音の発音の研究、フォネーム研究序説』国立国語研究所報告60、共著

内間直仁（2004）「古代日本語のワ行子音のｂ音化について」『国語学』第55巻2号、日本語学会

沖縄県教育委員会編（1975）『波照間の方言』（琉球方言緊急調査第2集）

加治工真市（1984）「八重山方言概説」『講座方言学10—沖縄・奄美地方の方言—』国書刊行会

かりまたしげひさ（2008）「琉球語音韻変化の研究」『ことばの科学』第12号

かりまたしげひさ（2006）「琉球語のせま母音化の要因をかんがえる－空気力学的な条件と筋弾性的な条件－」『沖縄文化』第40巻2号

かりまたしげひさ（2005）「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」『日本東洋文化論集』第11号、琉球大学法文学部紀要

かりまたしげひさ（2003）「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき－城辺町保良方言の形容詞の活用を中心に－」狩俣繁久・津波古敏子、加治工真市、高橋俊三編『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』(環太平洋の消滅に瀕した言語に関する緊急調査研究、平成１５年度文部科学省特定領域研究成果報告書

かりまたしげひさ（2002）「宮古方言研究のこれまで・これから」『国文学解釈と鑑賞』7月号

かりまたしげひさ（2000）「多良間島方言の系譜－多良間方言を歴史方言学的観点からみる－」高良倉吉編、『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』

かりまたしげひさ（1999）「音声の面からみた琉球諸方言」『ことばの科学 9』むぎ書房
かりまたしげひさ（1996）「宮古方言の音韻変化についてのおぼえがき－空気力学的な観点から見て－」『言語学林 96-97』柴田武先生古希記念論集刊行委員会、三省堂
かりまたしげひさ（1993）「大神島方言のフォネームについて」『琉球列島における音声の収集と研究』琉球列島班研究成果報告書
かりまたしげひさ（1992a）「八重山方言」『言語学大辞典第 4 巻世界言語編下-2』三省堂
かりまたしげひさ（1992b）「宮古方言」『言語学大辞典第 4 巻世界言語編下-2』三省堂
かりまたしげひさ（1987）「宮古方言の成節的な子音をめぐって」『琉球方言論叢－琉球方言研究クラブ 30 周年記念』論叢刊行委員会
かりまたしげひさ（1986）「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」『沖縄文化』66 号
国立国語研究所編（1963）『沖縄語辞典』大蔵省出版局
崎山理（1963）「琉球・宮古方言比較音韻論」『国語学』第 54 集
崎山理（1963）「琉球宮古方言の舌尖母音について」『音声学会会報』112
仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
仲宗根政善（1962）「琉球方言概説」『方言学講座』第四巻、明治書院
中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』法政大学出版局
中本正智（1982）『図説琉球語辞典』
平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』
平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』
平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』
平山輝男編著（1983）『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社
平山輝男編著（1986）『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店
平山輝男編著（1988）『南琉球の方言基礎語彙』桜楓社
宮城信勇（2003）『石垣方言辞典』沖縄タイムス社
宮良當壮（1930）『八重山語彙』東洋文庫
八杉龍一、小関治男、古谷雅樹、日高敏高監修（2005）『生物学辞典』第 4 版、岩波書店
琉球大学沖縄文化研究所編（1968）『宮古諸島学術調査研究報告－言語・文学編』
琉球方言研究クラブ（2005）『琉大方言－石垣白保方言の音韻体系－』第 20 号
琉球方言研究クラブ（1964）『琉球方言』第 6 号
琉球方言研究クラブ（1963）『琉球方言』第 5 号

平成 17 年度～平成 19 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））
研究成果報告書
「琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究」

平成 20（2008）年 3 月 5 日 発行
発行者　研究代表者　　狩　俣　繁　久
琉球大学 法文学部 教授
〒903-0213　沖縄県西原町千原 1 番地